琵琶湖博物館研究調査報告

22号　　2004年3月

アジア基層文化の探究

―アジアから日本列島と琵琶湖を見る―

●アジア考古学研究機構　編



LAKE BIWA MUSEUM
琵琶湖博物館

琵琶湖博物館研究調査報告

第 22 号

アジア基層文化の探求

－アジアから日本列島と琵琶湖を見る－

アジア考古学研究機構 編

滋賀県立琵琶湖博物館

2004年３月

地域における研究活動の一例 ――「まえがき」にかえて――

琵琶湖博物館は、「湖と人間」を主題に地域に根ざした博物館として、努力を続けてきました。地域に根ざすという言いかたの中にはさまざまなものが考えられますが、その一つには、博物館が中心となりながら、いろいろな研究組織を地域の中で作り上げ、それによって研究を進めていくことがあります。琵琶湖博物館の研究調査報告の中にも、そのような成果をまとめたものがいくつかあることは、皆さんもご存知のことでしょう。

ここにお目にかける『アジア基層文化の探求－アジアから日本列島と琵琶湖を見る－』は、このようなものの一つであり、また、その中でもかなりに独自性のあるものです。すなわち、以前に滋賀県の文化財保護とくに行政発掘に携わってきた人々が、数年前からアジア全体に目を向け、自発的に、主として休日を利用して、自己資金すなわち私費で、現在の所属や枠組みを超えて、調査研究活動を行ってきた結果を、第1期終了の現段階で先ずは総括したものです。

この組織の名まえは「アジア考古学研究機構」です。しかし、この報告書の「目次」を見るだけでも判るように、城・都・寺・墓などの遺跡、石器・土器・陶磁器などの遺物を主な対象にしながらも、その地の人びとの生活と信仰を掘り下げ、とくに湖と川の文化史的意義を論じ、それら遺産の現代における機能に当たり、そして博物館のありかたにまで触れた、極めて広い範囲にわたるものです。

いくつかの地域での一つ一つの研究活動については、すでに数度にわたって公表されてきているので、私も斜めながらそれを読んでいました。しかしこの報告書では、民俗調査はもちろんのこと、近現代史的な視点も加わり、日本列島と琵琶湖の歴史的な評価にも、一石を投じているように思います。

聞くところによれば、この報告書の立案段階でもかなりの議論を行ったうえ、書かれたそれぞれの原稿は、全員で査読を行なって、いろいろと変更もしたのだそうです。そうしたやりとりが見事に反映されているかどうか、それは本書をご覧下さった皆さんのご判断に任せたいと思います。

内容についても研究調査の進めかたについても、さまざまなご批判・ご意見をお寄せ下さい。この組織の皆さんがたは、それを糧にしながら相互に厳しく指摘しあい、次の第2期の活動の準備を進めて下さると期待しております。そして第2期には、各研究者の所属機関の公式の行事としても、これが進んでいくことを私は希望しています。

「アジア考古学研究機構」の皆さんのこれまでの御努力に敬意を払うとともに、この研究をさまざまなかたちで支えて下さった皆さまに、また、とりわけ研究調査の現地の方々に、深く感謝の意を表します。

2004年2月20日

滋賀県立琵琶湖博物館

館長　川那部　浩哉

琵琶湖博物館研究調査報告　第22号

『アジア基層文化の探求 －アジアから日本列島と琵琶湖を見る－』

アジア考古学研究機構 編

目　　次

アジアから日本列島と琵琶湖を見る
－アジア考古学研究機構の調査研究活動－ …… 用田政晴… 1
1　はじめに
2　興味の対象
3　今後の展望

第1部　生活文化と国家の基層を探る

東南アジアの生活文化と宗教世界 …… 植田文雄… 5
1　ベトナムの生活文化
2　カンボジアの食を掘り下げる
3　食文化と宗教世界

石器・石造品と列島の縄文文化 …… 植田文雄…23
1　台湾の石器・石造品
2　縄文文化とアジアの石皿
3　文化の海流と列島の縄文社会

東アジアにおける都城
－特に山城との関わり、稜堡との関わりについて－ …… 中井　均…41
1　はじめに
2　台湾城郭の概略史
3　囲壁・環濠集落の成立
4　都城と山城
5　変容する都城
6　古代都城の近代的変容
7　おわりに

第2部　湖と川の史的意義

トンレサップ湖の意義とアンコール遺跡群との諸関係 …… 用田政晴…61
1　ミーソンとアンコール
2　トンレサップ湖とメコン川
3　アンコール遺跡群
4　トンレサップ湖とメコン川の歴史的意義

イスラエルの琴湖と琵琶湖 …… 用田政晴…66
1　琴湖・ガリラヤ湖
2　ヨルダン川水系の状況
3　琴湖と琵琶湖

第3部　人類遺産の機能

アジア文化遺産の諸相から
－日本の文化財保護・活用への視点を探る－ …… 山本一博…72
1　日本の現状
2　アジア文化遺産の現状と分析
3　文化遺産と人々の関わり
4　地域の文化遺産継承への提言

琴湖・ガリラヤ湖の遺跡保護と発掘調査 …… 用田政晴…86
1　イスラエル考古学事情
2　エン・ゲブ遺跡発掘調査
3　埋蔵文化財行政
4　発掘方法と文化財の活用

第4部　アジアにおける博物館の意味

ベトナムの地域博物館 …… 用田政晴…91
1　海外調査
2　博物館
3　博物館の欲求と要求

イスラエル事情と博物館 …… 用田政晴…96
1　博物館の事情
2　博物館の在り方と展示手法

表紙写真
左上：雨季のトンレサップ湖
左下：トンレサップ湖のエリ
右上：アンコールワットのレリーフ（水軍と魚）
右下：トンレサップ湖のモンドリと木造漁船

Research Report of the Lake Biwa Museum, No. 22

Towards an Understanding of the Common Basing of Culture in Asia

− Archaeological and Folkloral Aspects of the Lake Biwa Rigion and the Japanese Archipelago as Viewed from Asia −

edited by the Asia Archaeological Research Institute

Contents

General Review of Archaeological Aspects of the Lake Biwa Region and the Japanese Archipelago as Viewed from Asia
− Research Activities of the Asia Archaeological Research Institute − YODA, Masaharu … 1

Part 1. Towards an Understanding of the Basis of Life Culture and the Process of State Formation

Life, Culture, and Religion in Southeast Asia UEDA, Fumio … 5

Comparative Studies of Stone Tools and Artifacts from the Neolithic Period in Asia UEDA, Fumio … 23

Ancient Capitals in East Asia
− With Special Reference to Hill Forts and Bastions − NAKAI, Hitoshi … 41

Part 2. Historical Significance of Lakes and Rivers

Historical Significance of Lake Tonle Sap and the Angkor Ruins in Cambodia YODA, Masaharu … 61

Comparative Studies between the Lake Biwa Region and the Lake Kinneret Region in Israel
YODA, Masaharu … 66

Part 3. The Functions of the Heritage of Humankind

Problems and Proposals Concerning Asian Cultural Properties
− Protection and Use of Cultural Properties in Japan − YAMAMOTO, Kazuhiro … 72

General Introduction to the Excavation and Cultural Properties of the Lake Kinneret Region in Israel
YODA, Masaharu … 86

Part 4. Role of Museums in Asia

Local Museums in Vietnam YODA, Masaharu … 91

General Introductions to the Museum Situation in Israel YODA, Masaharu … 96

（英文：用田政晴、牧野久実、マーク・ジョセフ・グライガー）

琵琶湖博物館研究調査報告　第22号　1～4ページ　2004年3月

アジアから日本列島と琵琶湖を見る
－アジア考古学研究機構の調査研究活動－

用田　政晴※

General Review of Archaeological Aspects of the Lake Biwa Region and the Japanese Archipelago as Viewed from Asia
－Research Activities of the Asia Archaeological Research Institute－

YODA, Masaharu※

1　はじめに

過去5年間、私たちは特にアジア地域において、考古学研究に生かせるであろう調査活動を行ってきたつもりである。これらの活動費用は全て私費であり、また休日を利用して行ってきた。これは、私たちの小さな誇りである。

かつて私たちは、教育委員会で文化財保護という名の行政発掘を行う同じ業務に携わっていた。そのころの私の調査研究上の関心事は、日本列島の考古学にあり、悩みは緊急発掘調査での様々な行政上の問題であった。そして、当初、関わっていた考古学という人類史の世界から、日常の矮小化した雑事に追われるようになり、考古学という学問に閉塞感を感じるようになっていた。

そうした頃、琵琶湖博物館の計画が具体化し、世界的な視点に立った展示やその他の活動も求められるようになったことを一つのきっかけとして、私たちの調査が始まった。そして、ひとたびアジアの諸文化に触れると、人間と関わる森羅万象を日頃の研究対象とするだけに興味は尽きなくなった。

今回、これまでの活動を総括し、それを踏まえた上で第二期の活動に入るため、この報告書をまとめることになった。

本書では、私たちがアジアでどのような視点で見聞きし、考えてきたかを紹介し、そこから日本列島の歴史的な固有世界と普遍世界を明らかにするという方法論開発の一部にしてみたい。

2　調査の対象

私たちは、アジアにおける遺跡と博物館をキーワードに調査を行ってきた。これが基本である。しかし、その経過の中で、考古学的な理解のために必要な民俗および近現代史的な視点も無視できなくなり、各地の民族の誇りのようなものも肌で感じるようになった。

今日の学問体系の中では、考古学、民俗学、博物館学および近現代史として整理できるかもしれないが、わかりやすく言うならば、アジアの遺跡、生業と信仰、博物館、そして極めて現代的な各国・地域事情と分けられる。

(1)　考古学と博物館事情

見て歩くだけで遺構の全体像がわかる城、都、寺、墓が主な対象遺跡となり、石器、土器、陶磁器などが遺物として、列島とアジアの共通項になっていった。



写真1　高句麗好太王碑（中国）

※ 滋賀県立琵琶湖博物館　Lake Biwa Museum



写真2　市街地に残る高句麗の都・国内城の遺構（中国）



写真3　アジアの稜堡・億載金城（台湾）

もう一つは、遺跡の修復と保存およびその公開方法である。これらは観光と深く結びついている場合が多いが、これも現地のそれぞれの地域の価値であり、生業の場でもある。

墓では、墓標、棺や石室など施設・設備、盛り土や副葬品の有無やその内容も興味を引いた。城では、その中心的な建造物や礎石などの遺構、濠、土塁や石垣は、世界的に共通する要素である。



写真4　崩壊の進むアンコール遺跡群（カンボジア）



写真5　石窟寺院の保存修復が進むエローラ（インド）

また、武器・武具も城の構造と不可分に結びついたものである。都や寺は、その建物や基壇、時には瓦の製作技法や瓦当文も私たちの目を引くところとなった。

アジアの主な都市には必ずと言っていいほど博物館がある。その建物は様々であるが、照明や空調、ガイドブックや案内スタッフ、それに展示手法も興味の対象である。珍品・奇品主義をあながち否定できないことを痛切に感じながらも、アジアの展示に極めて斬新な手法を見つけることもあった。

(2)　民俗と近現代史

民俗、特に考古資料と比較が容易な民具や考古学的な課題が密接に結びついたフィールドに私たちの目は行きがちであった。大別すると、農業、漁業、生活、そして宗教ということになる。

今の日本では博物館でしか見ることのできない前近代的な鍬、鋤、犂などの農具、水田や畑の規模・構造と灌漑設備、米・麦・雑穀・芋・野菜など、栽培植物も今日的な考古学課題との関係で無視できなくなってきている。

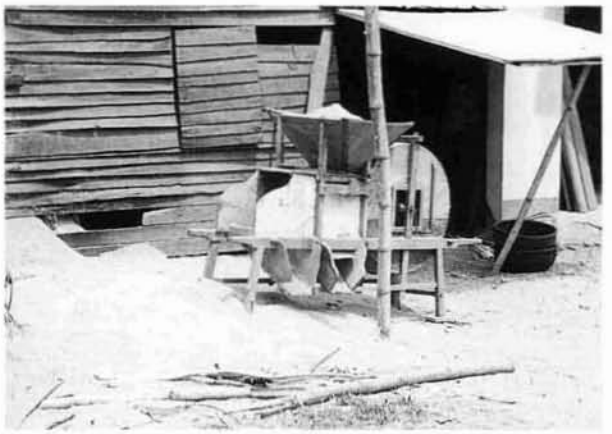


写真6　道ばたで見かけた唐箕（ベトナム）

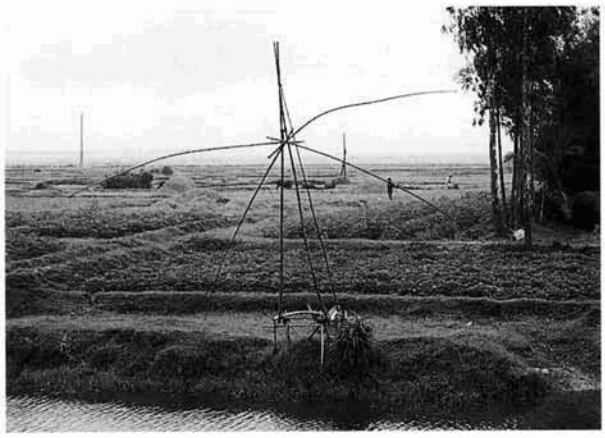


写真7　川で使われている四ツ手網（ベトナム）



写真8　琵琶湖周辺でよく見るゴイ（台湾）

内水面である河川、沼や湖での漁業、特に木造の漁船やエリ・ヤナなどの仕掛け漁具、四つ手網や筌などにも琵琶湖漁業との関係で比較が可能であった。特に、琵琶湖の風物詩ともなっているエリに類似するものを見つけた時の感激はひとしおであった。

村や町の市場では、商品としての米、麦、雑穀、野菜、果実それに魚の種類に目が行き、逆に肉類には全く興味がわかなかった。市場を一歩出ると、井戸、カワト、水車、竜骨車や竜尾車など揚水機などの水回りのみならず、カマドや高床の倉庫なども対象となった。また、時には煉瓦や線香の製作現場も見学した。

寺などの宗教生活は、主としてその信仰の対象や象徴が何かと言うことが重要であった。竜や蛇、それに石棒などから列島の縄文人の精神生活を探るための手がかりを求めていたように思う。

私たちは、いくつかの地域で今日的な問題に直面することが度々あった。

ベトナムでは先の戦争の影響、特にチャンパ遺跡での米軍による爆撃で、いくつかの祀堂や周辺地域が破壊された現場を見たり、カンボジアにおいてもポルポト政権による弾圧の博物館や処刑後の埋葬地も歩いた。中国東北部での極端な反日感情を煽る博物館での展示とそこを遠足で訪ねる多くの小中学生、川の向こう岸に見る北朝鮮の山の頂上まで開墾された畑なども印象的であった。

現在もインドで残るカースト制度の話を現地ガイドに聞いたり、イスラエルではもちろんパレスチナとの争い抜きでは考えられない状況にも直面した。特に、世界最古の都市遺構といわれるエリコ遺跡は、今ではパレスチナ政府が置かれ、容易に訪ねることができなくなってしまった。こうした遺跡などの文化財保存が、現代的な諸問題の中で揺れ動く事情を実際に学ぶことができた。

3　今後の展望

多岐にわたる私たちの興味の対象を羅列してきたが、結局のところ、日本列島や琵琶湖周辺地域での考古学的な遺物・遺構の理解を助けるための調査であったと言うことができる。時には、考古資料等では同時代資料での比較であり、民俗資料を用いた、考古資料の機能や使い方等への援用と類推であったりするが、基本は物的資料の比較作業であった。



写真9　トゥールスレーン博物館（ポルポト政権下の収容所）（カンボジア）



写真10　エリコのテル（遺跡丘）（イスラエル・パレスチナ）

また、中国の歴史的な周辺地域への影響力、宗教の持つ民衆を動かす力、そして生活・生業レベルでの人類の共通項の多さなどを知ることができた。博物館における技術的な側面はともかく、現代社会においてそれが果たす機能と新しい視点・発想は、今後の日本での活動の参考になるかもしれない。

こうした中、私たちも個別の課題を明確にし、さらに今後は地域をいくつかに限定して、深く掘り下げられるような活動が求められているかもしれない。

第１部
生活文化と国家の基層を探る

Part 1
Towards an Understanding of the Basis of Life Culture and the Process of State Formation

琵琶湖博物館研究調査報告　第22号　5～22ページ　2004年3月

東南アジアの生活文化と宗教世界

植田　文雄※

Life, Culture, and Religion in Southeast Asia

UEDA, Fumio※

1　ベトナムの生活文化

(1)　稲作とコメ加工食品

インドシナ半島の東部に位置するベトナムは、南シナ海に沿って南北に長い国土をもつ。そのせいで北部と中部、南部で気候の違いがみられる。北部では緩やかな四季があるが、南部では雨季と乾季にわかれる亜熱帯気候である。また中部は両者の中間的特徴を示し、熱帯モンスーン気候のため高温多雨である。そのため主たる農業は、年3回収穫の稲の三期作である。ハノイからホーチミンへ南下する国道1号沿線の片側では、10人ほどの集団が黄金色の田んぼに一列に並んで手作業の刈り取りをしており、その反対側では田植え前の代掻きをする。そんな光景が随所で見られた。この肥沃な土地は二つの大河の沖積作用で、北部では中国に接する高原地帯からホン川が、南部では「九龍（クーロン）」と荒れ狂う龍にたとえられたメコン川が、それぞれ南シナ海に流れ、広大な河口デルタを形成した賜物である。

総務庁統計局発行の『世界の統計』[1]によると、1995年現在のベトナムの耕地面積は675万7千ヘクタールである。国土の約21%にあたり、日本の場合337万8千ヘクタールで、国土の約9%に過ぎない。農家人口の総人口に対する割合は、日本の5.3%に対し、ベトナムでは68.9%を占めている。米の生産高は1996年で2,630万トンにのぼり、日本の2倍以上もあって世界第5位を誇っている。またこの国では、生産された米の半分近くを輸出し（世界第3位）、貴重な外貨を稼ぎ出している。

しかし目にした農作業風景は人力・畜力主体で、農夫が水牛の尻を叩いてカラスキで畝をたてる姿に象徴的であった。カラスキは、日本では博物館でしか目にすることのできなくなった農具で、現在使われることはない。また、収穫後の稲モミはゴザにひろげて乾燥させ、脱穀後の選別に唐箕（マイ・サイ・ルァ）が使用される。耕起作業は人海戦術で、長柄のクワを振り下ろしておこなわれる。ちなみにベトナムの1993年度のトラクター保有台数は、3万7千台と日本の2%にも満たない[2]。ほ場は自然地形に近いままで、機械化はあまり進んでいない。ベトナムでは、人々の勤勉さが米生産を支えている。



写真1　牛耕（フエ郊外）

この国の米種はインディカ米で、そのまま炊飯もするが粉に加工することも多い。フエのドンバ市場では、米粉を30cm程度のブロックにして売る店があったし、現地ガイドの説明では、コメと水とを同時に石臼に入れてドロドロになった白い液体を、ライスペーパーなどに加工するという。ベトナム語でコイ・サイ・ダと呼ばれる石臼の一例は日本と同様回転式のもので、直径約0.7mで回転柄のついた上臼と直径1mの下臼が

※ 能登川町埋蔵文化財センター　Excavated Cultural Properties Center, Notogawa Town



写真2　市場の米粉屋（フエ）

組み合わさり、下臼には液状化した白い米粉を落とす片口がついている。

さて、米粉の加工品は単純に分けて二とおりある。まず一つはビーフンのように麺にすることである。ベトナムの人々はこの麺を好み、細いものは中華風のビーフンとして、太麺はフォーという独特の米うどんに調理する。また、中間ぐらいの太さのものをメンと呼び、やはりフォーのように食す。フォーは地方や町、店によって味付けが異なるが、北部よりも南部ホーチミン市の方が美味しいという。フォーもメンも鳥ガラでとった薄口スープにニョク・マムで味付けされ、具には牛か豚肉または鶏肉のスライスに、たっぷりの香草パク・チーや赤唐辛子などをのせるのである。ドクダミのような強い香気を放つ香草は、この辛い麺によくあっていた。香草にはバナナの花の刻んだものもあり、南国特有の香気を放つ。屋台ではフォーを5千ドン（50円）で食せ、働き者のベトナム人の胃袋を満たしていた。



写真3　沿道のフォー屋台（フエ）

もう一つの食べ方は、ドロドロの米粉を薄く円形にのばして乾燥させた、南部でバン・チャン、北部でバイン・ダと呼ばれるライス・ペーパーである。和紙のように薄くのばした直径30cmの円板を、板に貼りつけて天日で乾燥させる。豚肉またはエビなどの具と一緒に、レタスや香草を巻く生春巻きバィン・チャン・グンには、ニョクマムのタレが適して絶品である。ほかには、ライス・ペーパーを炭火で煎餅のように炙り焼いて食べる方法もある。

筆者の注意をひいたのは、これとは別のモチ米を液状米粉にした、餅のような食べ物である。直径5cmほどの小皿に薄くモチ糊が蒸され、その上に乾燥エビをのせたバイン・ベオやバナナの葉にくるんで蒸されたバイン・ラーは、一見しておやつのような食品である。日本でいうと、バイン・ベオは神饌のシトギ餅であり、バイン・ラーはチマキである。チマキはもとは神饌であるから、ベトナムのこれらの食品も神聖な食べ物だったのではないだろうか。近江湖北の神事として名高いオコナイで飾られる繭玉は、典型的なシトギである。

アジアの栽培植物を渉猟した中尾佐助は、照葉樹林文化の共通項を解説する中で、シトギに着目する[3]。シトギは元来ウルチ米を加工したもので、発生地を中国南西部に比定し、照葉樹林帯を中心としてアジア各国に分布するという。また日本語の「シトギ」は、古代朝鮮語の同義同発音に一致する数少ない例であると述べる。シトギは、照葉樹林文化帯では神前供物であることが多く、さらにシトギ製造の技術的背景に、アワなどの雑穀や、澱源的な加工対象物としてドングリやトチノキの製粉にも言及している。

ベトナムは、気候・地勢ともまさに稲作に最適の穀倉地帯である。ベトナム中部の農村風景は、四方を山地に囲まれ中央に琵琶湖を抱えた近江の田園風景を思い起こさせた。

(2)　畑作と森の生産

世界文化遺産に登録されるグェン朝の王廟は、中部の都フエの郊外山間部に点在している。青々とした、葉身の大きい常緑樹林の中に開かれた空閑地には、自然林とは明らかに違う白い幹肌の若木が、何十本も植林されている。これらは白檀の人工林である。仏教国であるベトナムでは線香を多く生産するので、香木として白檀を重用している。

4つの王廟は、どれも深い森の静寂の中に佇んでいた。このうちの一つドゥンカイン帝廟へは、車を降りてラテライト土の赤茶けた山道を分け入っていく。道沿いの民家では林を伐開し、畑作をしている。畑の周



写真4　廟とタピオカ畑（フエ近郊）

囲には白檀の木が、内側にはタピオカと「チャー」と呼ばれるお茶の木が植えられていた。チャーの葉は日本の茶の三倍もある大きさで、原生種のおもむきが濃い。タピオカ（キャッサバ）は地下茎作物で、サツマイモに似た味である。



写真5　ジャック・フルーツ（フエ近郊）

亜熱帯雨林では、さまざまなフルーツをふんだんに生み出す。はじめに目を引いたのは、この国で「ミッ」と呼ばれ、英語でジャック・フルーツと称す、40〜50cmもある大きな果実である。泰山木のような大葉の照葉樹で実は太い幹に直接なりだし、薄緑のラグビーボールがぶら下がるさまは異様である。これが、都市でも地方でも空き地のそこかしこに生えているのである。「ミッ」は漢字では「波羅蜜」と表記される。「摩訶般若波羅蜜…」と般若心経でうたわれる波羅蜜である。広辞苑をひくと「涅槃の境地を究める菩薩行」とある。仏説「阿弥陀経」に延々うたわれる来世の様はとてつもなく美しく、一年中おいしい果物が食べられる楽園だと説かれるが、仏典を広めた古代中国の僧たちが暖かい楽園をベトナムに見立てたとすれば、納得のいく話である。ミッの果肉は、薄黄色で繊維質のガサガサした噛み具合であるが、甘みと香りの強いものであった。庭先に栽培する理由として本来救荒作物であったともいわれ、日本の柿のようなものである。



写真6　果物屋（ダナン）

さて市場を覗くと、鮮やかな原色で彩られた果物の山々に遭遇できる。マンゴー・ロンガン（龍眼）・キウイに似たタンロンなど、どれも完熟で売られている。なかでもバナナは格別で、青いうちに収穫されて流通過程で黄変する私たちの食すバナナとは異なり、非常に濃厚な味の食べ物である。種類も豊富で市場では他の果物屋とは別に、何種ものバナナだけを吊した専門店があった。

中尾は、原初的な農耕がヤムイモなどの根栽栽培であり、さらにこれをさかのぼって野生植物栽培の開始がバナナであったとし、世界の農耕はバナナ栽培から始まったと予察した[4]。列島の縄文時代でいえば、アク抜きの必要なトチノキなど「野生植物の高度利用」



写真7　バナナ屋（フエ）

と、クリ林の管理栽培を例とする「半栽培段階」ということである。そして、東南アジアのバナナ・ヤムイモ・タローイモ・サトウキビの4種で構成される栽培形態を「根栽農耕文化」とよび、採集経済から飛躍させた「農業大系」に位置づけている。

日本では、青森県三内丸山遺跡でイヌビエなど半栽培段階の植物遺体が数々見つかり、クリの自然科学分析で栗林の管理栽培が指摘されて以来、研究者の一部で縄文農耕論が再燃しているようである。しかし、生産物だけでなく生産場・道具・生産体制など諸条件が多角的に検証されない限り、半栽培段階の様相を稲作と同列に扱うことは問題である。ただ「野生植物の高度利用」と「半栽培段階」は表裏一体の関係にあって、列島の縄文時代でも、石皿の急増する早期後葉（紀元前5000年ごろ）以後は、半栽培段階にあったとみてよいだろう。

東南アジアの熱帯雨林の森が、我々の予想をはるかに超える高い生産力を有していることは間違いない。多様で豊かな森の生産は、食料獲得に関する限り必要以上の技術発展を促さなかったのであろう。

(3) 内水面漁業と発酵食品

散村景観の田園地帯では、日常的に河川での魚取りがおこなわれていた。白檀・ミッ・バナナの屋敷林に



写真8 農家と四ツ手網（ダナン近郊）

囲まれたダナン近郊のある家では、隣接した川岸に降り口があって、川岸には竿を長くのばした四ツ手網がしつらえてあった。竹竿の長さは約8m、網は外してあったが一辺6m以上はありそうだ。川幅は20m余で、深さは2mはあるだろう。竹竿は基礎が頑強に作られており、恒常的利用が想定できる。以前の琵琶湖周辺がそうであったように、日々のおかず取りは住居付近の河川でおこなう半農半漁の生活形態である。

また中部の汽水湖では、敷網が仕掛けられてあるのを目撃した。網は5本の竹竿に張られ引き上げられた状態だったが、水底に下ろした網に魚の「乗り」を見計らって、タイミングよく引き上げる漁法をとると想像された。内水面域のいわゆる待ち網漁法[5]は、琵琶湖でも四ツ手網としてよく行われたものである。



写真9 汽水湖の敷網（ダナン）

この湖には、直径2mほどのエビ釣り用椀舟が浮かんでいた。竹で編んだ籠にコールタールを塗り込めたもので、漆塗りならば巨大な籃胎漆器の舟である。また湖岸では大量の貝殻が水揚げされ、白い小山をいくつもつくっている。貝は大きなアサリに似た2枚貝で、螺でん細工の材料になるという。ベトナムの人たちは指先が器用で、精巧な工芸品をたくさん生産するがこれは中国の影響と思われた。

市場で売られていた魚は、外洋魚ではマグロ・カツオ・サワラなどで、大型魚は部位別に切り売りされていた。近海魚で最も多いのはトビウオとニョク・マムの材料となるイワシ類で、淡水魚ではコイ・ナマズが圧倒的に目につく。野菜や果物とは異なり、魚を売る店は種別または部位ごとに専門化されているようである。野菜・果物には、流通過程に問屋のようなものがあって多種類の商品を置けるが、鮮度が問題となる魚介類は、漁師と小売店の間で直接流通しているか、漁師が自家売りしている可能性が高い。ダナン市場のある魚屋では思いもかけず、淡水魚の並びにイヌらしき肉が売られていた。イヌ食習慣は中国の影響で、北（ハノイ）へいくほど多いといわれる。

さて、日本の醤油にあたるニョク・マムは、ベトナム特有の調味料である。この魚醤に関する石毛直道らの先駆的な研究[6]では、大きく以下の5種類のマム（魚の発酵食品）に分類される。



図1　醤油の分布圏（注6石毛文献より）

1．塩蔵魚に煎り米、香辛料、砂糖を混ぜて発酵させたマム・チュア
2．小エビ塩辛ペーストのマム・トム
3．小エビ塩辛をさらに発酵させた醤油の、ニョク・マム・トム・チャット
4．塩蔵小魚を発酵させた液体の、ニョク・マム
5．大型エビのナレズシである、マム・トム・チュア

これらのうま味はすべて、魚肉の発酵により発生したアミノ酸類をもととする。

日本では大豆からできた醤油が主な調味料で、これらを穀醤といい、中国東半部・朝鮮半島・台湾・日本の東アジアでは穀醤卓越地域と考えられている。一方、マレー半島・インドシナ半島・フィリピンなどの東南アジアでは、従前のとおり魚醤が卓越する（図1）。



写真10　さまざまな魚醤（カンボジア・トンレサップ）

しかし石毛らの調査では、東アジア各地で魚醤を食す習慣が残っていることが指摘される。日本の塩辛類はマムの一種であるし、秋田県のショッツルや能登半島のイシリは魚醤そのものといってよい。日本の海岸部では、地域固有の魚醤が製造・利用されていたことを示唆している。ただ、塩辛の液体だけを分離して調味料にすることが、日本では普遍化しなかったと考えられている。

近江の特産品フナズシは、ベトナムのマムにあたる発酵食品である。近江ではフナ以外にも、ウグイ・ハスなどの中型魚やオイカワ・ムツなどの小型魚を漬け、これらを「ジャコズシ」と総称する。このように多様な発酵食品に慣れ親しんだ近江でも、現在のところ魚醤を作る話は聞かれない。ところが、古代近江の筑摩御厨（米原町）に関する『延喜式』「内膳司」の貢進記録に「造二醤鮒鮨鮒各十石一」とあって、古代の発酵食品にかかる重要な資料といえる(7)。報告者の中井均は、これを「造醤・鮒鮨・鮒を各十石」と読み下したが、筆者は「醤鮒・鮨鮒各十石ヲ造ス」と理解する。なぜなら後に「（前略）酒五斗。米一石。塩八石。醤大豆二石（後略）」と続き、大豆を原料としたいわゆる穀醤は別品目にあること、醤○○とある場合は原料名が後に付くことから、鮒を原材料にした魚醤が「醤鮒」と表記されたと考えられるのである。よって現在は失われてしまったが、元来琵琶湖周辺部で魚醤が生産されていたことが察せられ、東南アジアで魚醤とナレズシが、ともに食される状況と同じだったと考えられる。稲作とともに、大陸から伝えられた照葉樹林文化の共通要素が、私たちの身近に存在したのである。

また近江では、内湖や水路沿いの水田にフナやドジョウが大量に入り込み、水口や尻水戸（しりみと）にしつらえたウケやサデ網で日々のおかずをとった時代があった。魚が遡上しにくい鈴鹿山麓の段丘上の水田では、田植え後に鮒の幼魚を放して養殖し、成長した魚を盆の馳走にしたという。私たちが目にしなくなって久しい、稲と淡水魚の食文化が、インドシナ半島ではいまも生きていた。

2　カンボジアの食を掘り下げる

(1)　食材の洪水、プノンペン・セントラルマーケット

その国の、日常生活を垣間見ることができる格好の場所は、市場である。到着の夕、さっそくセントラルマーケットへ向かう。中央の円形ドームから放射状に配された市場は、午後5時に屋内の主要部は閉店され、



写真11　プノンペン、セントラルマーケット

あいだに増築された屋外テントの食材店と衣料品店のみが、買い物客で賑わっていた。魚や野菜は朝の売れ残りが並べられているだけで、物が動くのは朝だろうと考え、翌朝に再訪することにした。

朝6時の市場はごった返していた。様々な野菜、山積みの果物・魚・肉、そして人の洪水である。ここでもベトナムと同様、香草（チィー）がよく食される。ふた抱えもある竹籠に山盛りのチィーが、自転車や客車シクロで次々に持ち込まれ、そして買われていく。チィーはドクダミや春菊に似たものが多種類あるようだ。他には青いトマト・イモ類・冬瓜のようなウリが目につき、タケノコも売られていた。



写真12　タケノコ、チィー

13世紀末、元朝の冊封政策の一環としてここを訪れた周達観は、この国の生活習俗を記す『真蠟風土記』の「蔬菜」の項に「野菜に、葱・芥子菜・韮・茄子・西瓜・冬瓜・王瓜・筧菜などがある。（中略）名を知らない野菜も非常に多く、水中の野菜も多種ある。」と記し[9]、野菜種の多さに驚いた様子がうかがえる。

野菜売り場の一角には食堂があって、様々なおかずやスープ・粥が並べられ、コメ加工製品のビーフンや



写真13　チマキ

チマキの小売店がここかしこある。この国も長粒のインディカ米を主食とする米の国である。

魚屋に並べられているのは、ほとんど淡水魚である。大人の二の腕ほどもあるライギョ、小ぶりのナマズ、フナが無造作に転がされている。金盥に盛られたアジのような小魚は、魚醤タク・トレイや塩辛プラ・ホックの材料になるのだろう。また貝・エビ・カエルなど、多くの店は専門商品の商いをしていた。



写真14　テント下の魚屋

肉は豚肉である。市場の細い通路の脇から、ふと鼻の前に豚の顔が現れたのには驚いた。縦二つ割りにされた、100キロは超えそうな豚を頭上に担いだ男が売場に急ぐところだった。他の食料品がテント下にひしめき合っているのにたいし、豚肉屋は市場中央の建物内に広いスペースを占領している。豚肉は高級品でホテルやレストランに卸され、多くは観光客の腹に収まるのだろう。高いテナント料を払える食品は豚肉だけなのか、宝石や時計店の近くに裸肉が並ぶさまは異様だった。他には闘鶏に使われるシャモが、生きたまま足を縄で縛られて売られていた。アンコール・トムのバイヨン寺院壁画にも闘鶏は描かれてあったが、シャ



写真15　バイヨン寺院の闘鶏彫刻

モはシャム（タイ）の転訛で、東南アジア独特の美味な鶏である。

果物店では熱帯特有のマンゴー、パパイア、ドリアン、ドラゴンフルーツなど、目も覚める原色の品々が溢れている。ここでもバナナ専門店があるのは、ベトナムと同じである。インドシナ半島は根栽農耕文化の発生地であり、その北域に接する照葉樹林帯に影響を与え、焼畑による雑穀栽培とイモ類などの根菜栽培を併せもつ照葉樹林文化複合を生成した。根栽農耕文化の主たる作物はヤムイモ類、タロイモ類、サトウキビ（サゴ椰子）、そしてバナナ類である。これらの植物の中でアク抜きなしで食せるのはバナナだけで、食糧として重要度が高いものである。ヤムイモは、日本のヤマノイモやナガイモの仲間、タロイモはサトイモ（タイモ）の仲間で、サゴ椰子利用はサトウキビ利用の進化形とされる。中尾佐助が、栽培植物の原初にバナナを位置づけたのも納得のいくところである。東南アジアでは、バナナは果物というよりも副食材である。



写真16　果物屋

また照葉樹林文化の影響を受けて、稲作がインドシナ半島に伝わったのは紀元前2000年ごろのことと考えられている。山岳部では焼畑による陸稲で、メコンデルタの灌漑可能地域では、当初から水稲利用がおこなわれていたと想定されてきたが、後で触れるように昨今のDNA鑑定などで稲の種別は非常に多様であることが明らかになってきた。従来のインディカ・ジャポニカの分類に、熱帯系・温帯系が加わるなど、起源と伝播経路についてはますます複雑な様相にある。

ところでこの国の現代史には、忘れることのできないポル・ポト政権の時代がある。中部コン・ポントム州の貧農の、９人兄姉の８番目に生まれたポル・ポトは、理想とする共産主義国家の確立をめざし農業至上主義を唱えた。富（資本）が都市に集まり、農民の労働力が搾取され人々が疲弊していく仕組みを敵視した彼は、工場や都市文明の破壊を徹底的に進め、多くの技術者と知識人を虐殺したといわれる[8]。ポル・ポトの政策は悪夢に終わったが、彼の理想像にクメール民族の隆盛期、アンコール時代の誇りと憧憬があったことは、想像できるところである。

(2)　沈む森の稲と稲作以前

現地語で「沈む森」の意味をもつトンレ・サップ湖は、メコン川の広大なデルタ地帯に包まれた、東南アジア最大の湖である。５～10月の雨期には面積が３倍以上に拡大し、平均水深は２m前後でどこまでも広がる湿原である。トンレ・サップ湖のデルタ地帯には、現在も水面を浮遊する野生種の浮稲が分布している。

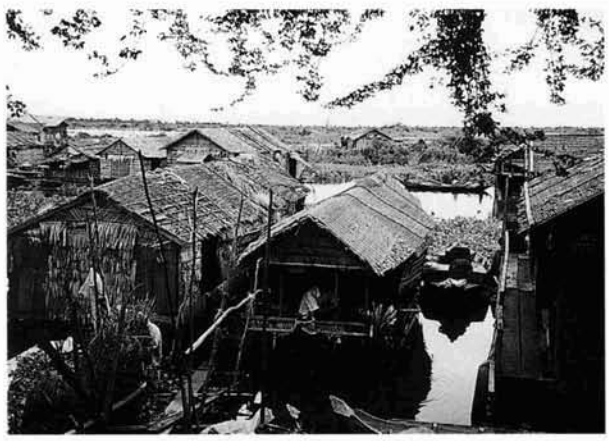


写真17　トンレサップの水上家屋

稲の野生種は非常に多くて、栽培種が一年生なのに対し、東南アジアに分布するオリザ・ペレニスという浮稲は多年生で、３mもの水中茎をもち、他種と交配する力も強いという[4]。栽培種が確立するまでには、野生種と栽培種の交配連鎖を経たことは知られたとおりである。



図2　浮稲オリザ・ペレニス（注4中尾文献より）

カンボジアではベトナムのように三期作ではなく、現在は年1回しか作付けしない。低い地勢と膨大な雨量は逆に水管理を困難にし、雨期後半から乾季にかけての1回の作付けが定着したのだろう。森や湖の他の生産物が豊富にあったことも一因である。かつて国際支援機関が二期作を導入しようとしたが、「そんなに無理をしなくても他の食べ物がいっぱいある」と、人々に受け入れられなかったことが象徴的である。

しかし、『真蠟風土記』に「この国は常に中国の五・六月のような気候で霜や雪を見ないため、普通一年間に三、四回の収穫がある。（中略）また一種の自然田があって、種子を播かなくても常に稲が生え、水の高さが一丈（3m）にもなると稲の茎もこれにともなって高くなる。」と、浮稲の存在とともに三期作ないし四期作されることを特記している[3]。

ではこの国の歴史上、稲作農耕はどのように進展してきたのだろうか。紀元前2000年ごろに照葉樹林文化複合の影響下に、他の雑穀類とともに伝えられた陸稲が、低地では湿地型の稲作になったという[4]。しかし、実際にこの理論を証明する物質資料はほとんど得ることができない。たとえば、日本で稲作農耕を生産基盤とする弥生集落の特徴、水田遺構・木製農具と、それを加工する磨製石器・金属器などは存在したのかどうか。また、集団の社会的な組織化・集約化を示す環濠集落は、確認されているのか。

ようやく得た手がかりは、プノンペン国立博物館の展示にあった。カンボジアでは世界文化遺産アンコール遺跡群の保護に力が入れられ、日本のように一般的な集落遺跡の発掘調査は、ほとんど行われないのが現状である。よって、博物館展示の主体も、アンコール



写真18　クレック・アースワークの展示

遺跡群の石造品におかれている。それら荘厳な石造品が陳列された回廊式展示の最後に、わずかばかりの考古部門があった。自然光だけの薄暗いケースには、石器・土器などが並べられ、脇にクレック・アースワーク（遺跡）と記された集落遺跡らしい展示があった。

フランス人研究者によって調査されたクレック遺跡の解説パネルには、直径160m程の環濠集落の模式図が描かれていた。環濠の外側には土塁がめぐり、内側に濠が掘られた集落である。遺跡の位置は明記されていないが博物館学芸員の説明では、ラオス寄りの山岳地帯にあって時期は紀元前300年ごろから紀元前後まで、つまり日本の弥生時代前期～中期ということになる。英文解説には、「このような円形の遺跡は、カンボジアやベトナムの農耕集落として定型化したものである。」とあり、類似遺跡はインドシナ半島の広い範囲に分布するという。

ここで注意を引いたのは、展示された完形土器の一点が、形態・色調・法量とも日本で見慣れた弥生時代後期の高坏に類似していたことである。日本列島では高坏は縄文時代に存在しない器種で、卜骨や青銅器の

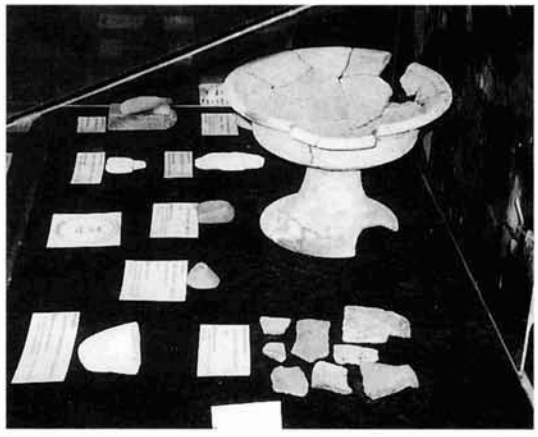


写真19　出土遺物

拡散とともに弥生時代前期の農耕集落拡大期に、忽然と出現する器形である。この事例のみで文化の相互関連を語ることは避けるが、１万年以上前に揚子江中下流域に芽生えたとされる稲作農耕[10]が、文化要素を共有しつつ拡散していく過程で起こり得た現象とは考えられないだろうか。

石器類では、有肩石斧・腕輪・玉砥石・紡錘車などが見られた。ジャポニカの分布に重なる穂摘み具の石



図３　稲の拡散概念図（注12佐藤文献より）

包丁は見あたらなかったが、狩猟具たる石鏃・石槍なども認められなかった。石包丁の代替として、インドシナ半島では金属器や木器が普及していた可能性が高い。ベトナム北部では、紀元前500年ごろのドンソン文化期に見事な銅鼓が製作されており、さらに半島全体を見渡すとタイのバンチェン文化が同じころ、金属器を造っていたことが知られている[11]。

インドシナ半島は気象・地勢が複雑で、付け根の山岳部では照葉樹林帯を交錯させるため、南下したジャポニカ種の受け入れも可能である[12]。また、長江の稲種にはインディカも混交していることから、逆にインドシナ半島からの北上も想定でき、情報の緊密度は高かったとみてよい。環濠集落や銅鼓の存在、石器の構成、さらに野生の多様な稲種が生育する環境からみても、わが国よりはるかに早い段階で稲作を開始していたことが理解できる。またベトナムでは、C^{14}年代測定で紀元前2000～1500年ごろとされる先ドンソン文化、フングェン段階のドンダウ遺跡で、炭化米が見つかっている[13]。

さて、カンボジアでは1世紀に興るクメール族の扶南国、6世紀の真臘国をへて、アンコール朝には稲作が強力な経済基盤になった[14]。10世紀代には東バライ（8×2km）・西バライ（7×1.8km）の二大灌漑用水池が造成され、これによって米生産量は増大し、紀元802年から1432年までの、世界史上まれにみる長期間の王国時代を築いたのである。アンコール都城の造営には、雨季と乾季の水利調整のため一番はじめに貯水池と排水施設を開削し、13世紀前半には東西35km、南北22kmにおよぶ大水利網が完成していたことも稲作に力点がおかれた表れであろう[15]。

では、稲作以前の食糧は何によっていたのだろうか。中緯度の日本列島では、稲が伝わる前に堅果類や根茎類のアク抜きをし、摂取したデンプンを食糧化していた。同じころインドシナ半島でも、日本列島の縄文時代草創期～早期併行のホアビン文化、早期後半～後期初頭併行のバクソン文化で、積極的な野生植物の利用があったとされる。また以前はインドシナ半島の土器出現がバクソン文化期とされていたが、この10年来の見解では、ホアビン文化期までさかのぼるとみられている。ホアビン文化は洞窟居住で特に貝を採取し、打製石器を多用したが、石皿・磨石も使用していたといわれ、稲作を行った根拠はないが野生種でのちに栽培されるオリザ稲もみつかっている[13]。

また、バクソン文化は局部磨製石斧や磨石・石皿などで構成されており、バナナ・ヤムイモ類などの植物利用、狩猟・魚貝採取など日本の縄文文化と大差ない。同文化期後半には、根栽農耕文化が確立し、水さらしや煮沸によるアク抜きが必要なタロイモ栽培が開始されていたとみられている[13]。タロイモ利用と土器出現が関連する様態は、日本列島での縄文土器出現契機が何にあったかを考えるヒントになるだろう。アクの強い根茎類からデンプンだけを摂取するには、摺り下ろす磨石・石皿などの礫石器と沈殿槽である土器、またはアク抜きのための煮沸土器が不可欠なのである。



写真20　ヤムイモ類　ダ・ムロム

さて、現在のカンボジアの森では結局、堅果類の樹木を見ることはできなかった。一方ヤムイモ類は、現地語でダ・ムロムと呼ばれる、太さ3～5cm、長さ0.5～1mのナガイモがある。付近の森に自生しており、巻蔓を頼りに地表面から10cmも掘ればいくらでもとれる。生食はできず、煮てアク抜きをするという点はまさに土器利用植物の典型である。今では副食に食される程度であるが、森近くの人々は掘って自家消費するという。ちなみにダ・ムロムはシェムリ・アップの市場で、30cm程の長さに切りそろえた約10本の束が、500リエル（約18円）で売られていた。コメ以前、堅果類のない地域ではこのようなイモ中心であったのだろう。

ところで、もう一つトンレ・サップ湖の恵みの中では淡水魚が重要である。トンレ・サップ湖は雨期の増水期に大量の泥土を運び込み、同時に森を飲み込んで冠水林を形成し、魚類の絶好の産卵場となる。よって大量の漁獲高があり、1平方キロ当たり8トンと世界一を誇る[16]。この国でも他の東南アジア諸国同様、魚醤がたくさん食される。塩辛プラ・ホックと魚醤タク・トレイは、重要な調味料である。石毛の研究によると、カンボジア人口の9割を占めるクメール人は漁業に従

事せず、出稼ぎのベトナム人やチャム人が漁にあたり、農村のクメール人のコメと物々交換されるという。魚の多くはコイ科に属し、ダイという大がかりなウケを連結した装置で捕獲される。また、水田と水路との高低差がほとんどないため、水口にウケが設置されているのが随所で見られ、ひと昔前の琵琶湖周辺と同じく、水田漁業が日常的におこなわれていた。

3　食文化と宗教世界

(1)　ヒンズー教とベトナムのリンガ

インドから東南アジアにかけての国々は、言語や宗教を違えた多種の民族によって成り立っており、昨今耳目にふれる紛争の多くもその複雑さに起因しているようである。ヒンズー教は現在インドで主流をなしているが、紀元2・3世紀以後東南アジアに広まった。この宗教はインド教とも呼ばれるように、紀元前千年頃にインドでバラモン教の中から派生した。アミニズム、祖先崇拝、偶像崇拝など多様な要素を含み、多神論的で多くの宗派に分かれ、民間の呪物崇拝や仏教とも融合したものである。インドでは、カースト制度など閉鎖的な階級社会の中で一般民衆に広く信仰され、長い歴史を経て各地の土着信仰と結びつき、複雑で多様な教義を持つようになったようである。教義は宇宙・自然の力を第一義とみなし、万物創造神ブラフマーを最高神とするが、ビシュヌ、シバをあわせた三神が創造神として崇拝される。

ビシュヌは創造神であるとともに万物を救済する保護神であり、神鳥ガルーダに乗った意匠が多い。シバは破壊神でもあり、カンボジアのアンコール朝で最も篤く信仰された。戦いの神の象徴であり、その法力の表現に石柱リンガを祀ることが多い。アンコール遺跡群では荘厳な神殿の中央祀堂に、シバの化身としてリンガを祀った痕跡が見られた。

ヒンズー教は、キリスト教やイスラム教のように一神教でなく、自然崇拝を旨とした多様な神々を崇拝し、戒律が厳しくない点においても原始宗教に近い形態である。中世以後はシバ神などの偶像崇拝が盛んに行われたようであるが、本来は自然界に存在する万物に神や精霊を見いだしたようで、日本の神道に近い趣がある。日本で、神社の巨樹・巨石にしめ縄が巻かれるように、類似の行為は街路の巨木への食物供献として表される。また日常のなかでは戒律も柔軟に適応させ、自らがヒンズー教徒である現地ガイドは、「(神の使いである) 牛を食べることもある」という。またヒンズー教は、東南アジアに広がって数多くの神殿を残し、現在はこれらが世界文化遺産として多くの人々に感動を与えているのだ。

さて象徴リンガは、縄文時代の石棒と類似する男根をかたどった石柱である。ヒンズーの説話によると、ある時シバの法力が天から降りてきて、巨大な炎の火柱となって地上に突き刺さった。ブラフマーとビシュヌはその力が強大で危険だと考え、大地を守るためにそれぞれ八角と四角の鞘に変化し、地中に刺さった部分を包み込んだという逸話がある[9]。ヒンズー教を信仰した王たちはこの法力にあやかり、王朝ごとに神殿を建てその中央祀堂に自らがリンガと同化することを体現し、祭儀を繰り返したという。通常のリンガはヨニという女陰形の台座に立錐しており、男女結合のさまを表している。祭儀では聖水を石柱に注ぎ、ヨニの導水溝から流れ落ちる聖水を、石桶に受けて額にいただくものである。インドでこの祭礼に遭遇したが、古代王権の儀式は今よりも荘厳なものだったと思われる。しかしリンガの大きさや形態は、国や時代によって様々であり、次にそのいくつかについて述べてみたい。

ベトナムでは、中部山岳地帯にあるチャンパ王国のミーソン遺跡で多数のリンガを観察した。ミーソン遺跡は古都ホイアンの南西約30kmに位置し、四方を山に囲まれた聖地である。聖山マハーパルヴァを仰ぐ盆地の草木に埋もれて、8～13世紀末までに建造された60を越える宗教遺構がある[10]。ここに調査の手が入ったのは1909年のことで、フランスの研究者H.パルマンティエによる。その報告書で遺跡群をA～Hの8グループに分け、現在もこの分類を踏襲している。各グループはレンガ壁に囲まれた矩形を単位とし、ひときわ高い主祠堂を中心に置いて、周囲に大小の副祠堂・宝物庫等を配置する。各堂はレンガの持ち送り積みで高い三角屋根を架構し、入り口以外に開口部はなく、内部装飾はない。その主祠堂・副祠堂の中央に、神体リンガが安置されているのである。祀堂の外面は、唐草紋を主とした精緻な装飾をもち、砂岩やラテライトのブロックを摺り合わせて積んだのち、シバをはじめさまざまな神像彫刻が施されている。

中央祀堂のリンガは、地面に転がる以外は台座ヨニと方形基台上に屹立しており、これらは原則的に3段に積み重ねられている。まず一番下位の方形基台には、宇宙の創造主ブラフマーや宇宙創造の物語が刻まれている。2段目がヨニで、リンガを受けるように女性神をあらわし、その上部にリンガが立つのである。つま

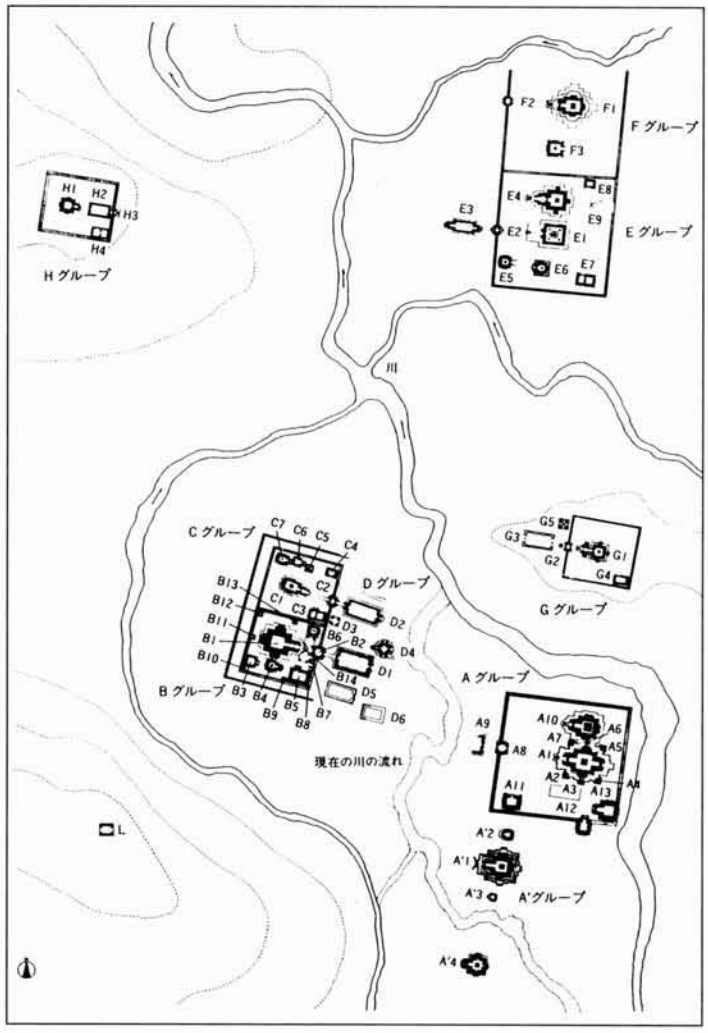


図4　ミーソン遺跡群（注15重枝文献より）

り、宇宙の創造主・女神・男神が一体となって最高神を形成しており、これがリンガの基本形である。

ところでチャンパ王国は紀元192年に現在のフエ地方に興り、4世紀末ごろにヒンズー教を崇拝し始めたという。初期は木製の祠堂を建立していたが、8世紀はじめ頃から石造りの祠堂になり、現在残るものはすべて石造建築である。この王国はベトナム中部のみならず、カンボジア、ラオスへと続く山岳地帯を勢力圏



写真21　ミーソン遺跡、B 5広場



写真22　抜き取られ放置されたリンガ

とした。山岳部の少数民族が産出する香木や翡翠などを塩や農・海産物と交換し、ホイアンの港から外国へ輸出することで栄えた貿易国家だとされる[16]。近年ホイアン近郊では、4世紀代の可能性のある城壁都市で、南北550m、東西1500m、城内面積約82haの領域を持つチャーキュウ遺跡が継続調査され、中国はじめ扶南、インドなど国際的な遺物が多数見つかっている[17]。チャンパ王国には海と山を通じてインド文化が流れ込み、ヒンズー世界の最北東端として、中国文化の南下と拮抗していたのである。これら地勢からみても彼らは単一民族国家ではなく、海浜・平野・山岳の多民族による連合国家であったことは想像できよう。時の王は、自らの王位継承儀式をこの聖地で行い、恭順のあかしに各地から呼び寄せられた部族長たちは、王とともにあるリンガの聖水祭儀に参列したのであろう。また、この聖地へ足を踏み入れることのできたのは王族と部族長であって、王は自らの権威をリンガに込めて、王そのものとして崇拝させたのであろう。

さて、数々の歴史の証人であるこの遺跡は、その後ベトナム戦争で解放軍ゲリラの基地とされため米軍の爆撃に遭い、Aグループの主祠堂など多くの遺構が破壊されてしまった。主な彫刻品は戦後の散逸を防ぐためダナンのチャム彫刻美術館で保存展示され、今も修復作業が継続されている。

(2) カンボジアの宗教遺跡とリンガ

アンコール・ワットをはじめアンコール遺跡群では、どの神殿も見事な彫刻が施されている。中でも城都アンコール・トムのバイヨン寺院は、群立つ塔の四面に人の背丈を超える観音菩薩の仏頭が総数196面（現在残るのは172面）も彫られ、寺院内のどこに立っても観音の慈悲深い微笑みに包まれる異空間である。隆盛を極めたジャヤ・バルマン7世によって12世紀末に建造され、その築造逸話を戯曲『癩王のテラス』[18]に仕立てた三島由紀夫が、「この世のものならぬ石の精緻な固まりが、空を浄土の空、森を浄土の森に変えたのです。」と登場人物に語らせたとおり、美しい仏教寺院である。

アンコール朝ではその時々の王の信仰によって、仏教とヒンズー教の二種の寺院が建立された。よって神殿は神仏混合し、仏教寺院でもヒンドゥーの神ビシュヌやリンガ（石棒）が祀られ、逆に元はヒンズー寺院でも後に菩薩像が祀らることもまれではない。現在この国は仏教徒（上座部仏教＝小乗仏教）が大半であ



写真23 プノン・バケンのリンガとヨニ

るが、ビシュヌ像に祈りを捧げる姿も目にする。バイヨンでも、石柱部分は抜き取られているがヨニだけが残されていたり、壁面にシバ神やヒンズー説話とも重なるインドの叙事詩、マハーバーラタの物語が彫刻されたり、融合している。ジャヤ・バルマン7世は、ヒンズー教を崇拝する民衆との調和をはかるため随所に両者融合の意匠をちりばめたのである。また、リンガの多くは抜き取られており、女性神ヨニだけが残されたものがほとんどだった。

アンコール遺跡群の中心部から、北方20km余り奥地にあるバンティアイ・スレイは、青い森の中に忽然と姿を現す。直訳で「女の砦」と呼ばれるだけあって、10世紀後半のこのヒンズー教寺院は非常に繊細優美である。唐草模様が刻まれた破風飾りの門をくぐり抜けると、波紋ひとつない前池に、バラ色砂岩の全景が写し込まれていた。境内に足を踏み入れると、神殿の壁・



写真24 リンガ3連のヨニ（プリア・カン）

柱・連子窓・楣・破風、そして屋根まで余すことなく、ラーマナヤ物語に取材された、神々・人物・聖獣で埋め尽くされていた。北神殿の女神デバーダ像は、「東洋のモナリザ」とうたわれ、見る者の多くを惹きつけている。各神殿のリンガは現在ほとんど抜き取られてヨニだけになっているが、その一つにもとは2本のリンガ穴をもつ長方形のヨニがあった。リンガは絶対神であり、複数が立ち並ぶのは不思議なことである。しかし、これもカンボジア・クメール美術の特徴で、多様なものや相反するもの、拮抗するものを受け入れたことの表れと理解できたのである。

同様に、12世紀末にジャヤ・バルマン7世によって建てられた仏教寺院プリア・カンでも、3連のヨニが遺存していた。横長のヨニは幅2m以上もあり、片側に聖水の溝が樋になって突き出すのは基本形で、往時どのような祭儀がなされていたのか、大変興味のもたれる遺物である。

(3) インドの宗教遺跡とリンガ

ヒンズー教発祥の地インドでは、現在、10億余ともいわれる人口の82%、8億数千万人がヒンズー教徒だとされる。よって人々は、日常的にヒンズー寺院に赴き、リンガに祈りを捧げている。古代の信仰が忘れられた先の東南アジア二国に対し、この国では今も熱心な祈りとともにリンガが再生され続けていた。

聖都ベナレスの、ヒンズー大学にあるビシュワナート寺院では、敬虔な礼拝の様を目の当たりにした。冷たい大理石の床中央に八角形の祭壇があって、八角形の水池の中に高さ0.8mほどのリンガとヨニが祀られていた。祭壇もヨニも白い大理石で造られ、中央に立つリンガのみが茶褐色の石で、頭部に南国的な赤白緑の花輪が掛けられてあった。ちょうど数人の男女が祭



写真26　二つ並べられたリンガ（ベナレス・ズルガー寺院）

壇の池から水を汲み、リンガの頭部に静かにかけて、ヨニの先からしたたり落ちる聖水を、額に戴いているところであった。ある者は額づき、あるものは小声で何かを唱えている。彼らは物見高い外国人の私たちを一べつもせず、黙々と礼拝の所作を繰り返すだけであった。これがヒンズー教の祭儀であり、リンガへの祈り方なのだった。

同じくベナレスのズルガー寺院は、女性だけが境内まで参詣できる特別な寺院である。ここはシバ神の妃が祀られており、赤レンガの外見は美しい。入り口には男性も祈ることのできる祠があって、女神像の前に二つのリンガが祀ってあった。ただしカンボジアにあった一つのヨニに2本立つ形態でなく、一体づつ2組みが祀られてある。本来、強い神と恐れられたシバ神の権化は変質し、ここでは女神像の足下にかしずいて祀られている。これもまた、この宗教の柔軟な一面なのだろう。また門前の店頭では高さ10cmほどのミニチュアのリンガが数種類売られており、人々はそれを購入し自宅で祀り日々礼拝するという。

さて遺跡にみる古代インドのリンガは、西部デカン



写真25　リンガへの礼拝（ベナレス・ビシュワナート寺院）



写真27　エローラ第16窟全景（背後上方から）

高原を見下ろすエローラ石窟群に残されていた。ここは世界文化遺産で、7世紀から9世紀までの、仏教・ヒンズー教・ジャイナ教の寺院が時代を経て連綿と開掘されている。同じく世界遺産のアジャンター石窟群は、秀逸な仏教壁画で知られるが、エローラでは石造建築とおびただしい彫刻群が著名である。石窟は全部で34を数え、第1～12窟が7・8世紀の仏教寺院、第13～29窟が9世紀代のヒンズー教寺院、第30～34窟が9世紀後半のジャイナ教寺院である。

なかでも第16窟は、カイラーサナータ寺院と命名され、756年からおよそ百年間に渡って彫り続けたといわれ、現在もヒンズー教徒のあつい信仰を集めている。ここは最大の建築物であり、幅47m、奥行81m、高さ33mのすべてがノミによって彫り出された、想像を絶する石造建築である。他の石窟が横穴式に掘り抜いて内部彫刻を施すのに対し、ここは硬い安山岩のひと山を、門・回廊・前殿・本殿と地面から屋根まで全身刳り抜き、それぞれに神像、聖獣を刻んでいる。そして中央祀堂に、筆者がこれまで実見した中では最大のリンガが祀られてあったのである。薄暗くひんやりした祭壇に、横幅4mもある円形ヨニが注ぎ口を北に向け、中央に直径0.8m、高さ1m余りのリンガが屹立している。総高は約2mで、ヨニの高さの割にリンガは低い。



写真28　最大級のリンガ（第16窟）

東南アジアのものと異なってインドのヨニは円形のものがほとんどである。また東南アジアでは、台座にブラフマー（宇宙創造）が彫刻されていたが、インドのものは一切彫刻がなくリンガとヨニの結合だけの表現である。

ヨニの先端は、北壁を貫いて祀堂外へと延びており、外壁面に注ぎ口と直径1mほどの石桶がしつらえてあった。聖水をかけるのと受けるのを祀堂内外に分離したもので、他では見られない構造である。おそらく、



写真29　祀堂北壁外面の水桶（第16窟）

中央祀堂内部で聖水をかける祭儀をおこなったのは、最高位の司祭者と、時の王であったと思われる。外の水桶では王族や恭順を示した部族長たちが、流れ落ちてくる聖水をありがたく戴いていたであろう。寺院全体の壮大さにも表れるように、創建した王権力の大きさが偲ばれる遺跡である。

また第34窟のジャイナ教寺院では、奇妙なリンガを実見した。ジャイナ教は仏教とほぼ同時期に成立したといわれ、厳しい戒律のなか苦行を重ねて解脱を求める宗教で、現在のインドでは0.4%と少数派である。第34窟では、門を潜った両側に守護獣として実物大の象が一対彫り出され、窟内には菩薩像が多数配置されるとともに本尊座像も仏像に酷似するなど、ヒンズー教と仏教が融合した意匠をもつ。この本尊前の神殿中央に、石柱部のないリンガが彫り出されていた。一辺1mほどのヨニに、高さ約20cmのリンガ基部が残されただけのものである。石柱部分は、後世に欠き取られた可能性もあるが、ヨニも稚拙な彫り方で全体的にひどく矮小化しており、当初からこのような形だったと考えられる。ジャイナ教が、ヒンズー教と融合して

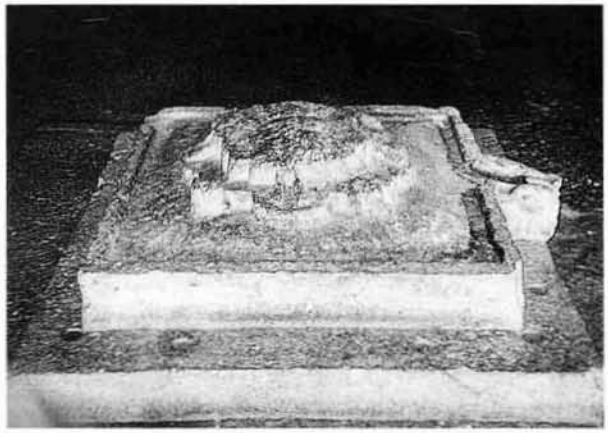


写真30　ジャイナ教寺院のリンガ（第34窟）

いく過程で、リンガも崇拝対象としたのだろうが、聖水祭儀を行った形跡は認められず、最も形骸化したリンガといえる。

(4) リンガと石臼と縄文石棒、磨ることの意味

さて、本家のインドでもリンガの姿はさまざまなことがわかったが、共通するのは聖水をもたらす仕組みをもっていることである。その構造は、コメ加工の石臼と同じで、液を流すため下臼には受け溝がめぐり注ぎ口がつけられる。ベトナムではコイ・サイ・ダ、またカンボジアではタ・バックンと呼ばれる石臼があって、ヨニはまさにその下臼を描写する。ヨニは、液体をこぼす突出した片口溝が北向きにつくられることが多く、これが女性器をかたどっていることはすでに述べた。リンガを能動体の上臼としヨニを受動態の下臼とすると、男神と女神を合体させた最高神は、まさに石臼そのものの写しだとみてよいだろう。リンガと石臼の形態的類似についてはすでに二編の報文[19]に述べているが、ここで改めて言及したい。

(1)は、カンボジアのシェムリ・アップの市場で入手したリンガのミニチュアである。実際のリンガは高さ1～1.5m、方形ヨニは1辺1～1.5m程度で、組み合わさった全高は1.5m～2mほどである。断面形は主柱部は円であるが、装着部分は方形ないし六角形である。これはヨニに穴を彫る際の技術的な問題と考えられる。

(2)は、インドのニューデリーにある国立博物館で購入した、ミニチュアである。ヨニが円形で導水溝が長く、石柱の低いのが特徴である。博物館に展示された紀元頃の初期リンガは、接合部も円柱になっており、ミニチュアでも断面は円形である。

これらと模型石臼の図(3)を比較してみよう。下臼とヨニは、構造的な共通性が瞭然である。機能面でも米汁が下臼の周りに流れ落ちるのと同様、リンガでは聖

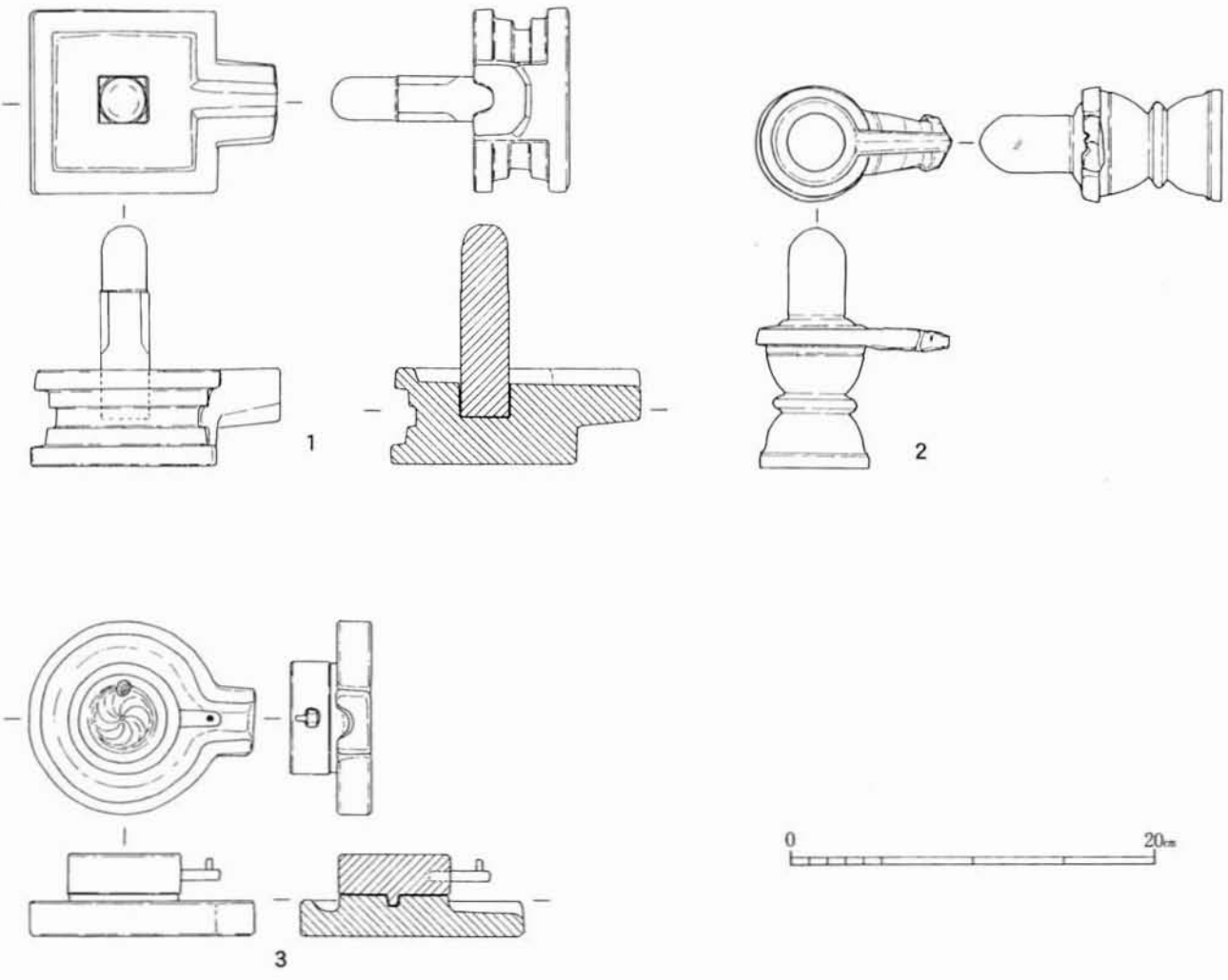


図5 リンガ・石臼 ミニチュア実測図（1：4）



写真31　石臼で米汁をつくる（カンボジア・トンレサップ）

水がヨニの導水溝からこぼれ落ちる。まさに白い米汁は聖水であり、神から賜る聖なる食物である。

ここで筆者は、食文化と精神文化（宗教）とに底流する思考の構造に注目したい。ヒンズー教を信仰した王族は、王権の象徴としてリンガ（男根）を王の存在そのものに見立て、聖水の祭儀をおこなった。リンガをつたい落ちた聖水はヨニに受けられ、溝から流れて地上界を満たし社会に豊穣をもたらす。東南アジアでは、ドロドロの液状米粉が主食であり、とれたデンプンを蒸してシトギ（神饌）を作り、フォーやライス・ペーパーをつくる。リンガの聖水は王の精水であり、米汁の様態が、生命の根源となる白い精液と二重写しになったのである。神話学の吉田敦彦によると、環太平洋域の先住民に、精液信仰を祭儀に組み込んだ例が広く残されるという[20]。

一方、縄文時代の石棒や礫石器にも、磨る祭儀の痕跡が数多く認められる。筆者は礫石器研究を進める中で、石皿や磨石の機能と石棒・石冠の摩滅痕に関連があると推察し、磨ることの祭祀性について考察したことがある[21]。一般的に縄文時代では、主食のドングリやイモ類を製粉・液状化するのに磨石と石皿を用いる。一遺跡で多量に出土するこれら植物食糧加工具は、生業活動の基本的な道具だといってよい[22]。そして石皿や磨石を祭祀具に転用した例は、北海道忍路環状列石や秋田県大湯環状列石、また岩手県樺山遺跡など数多いのである。北海道北黄金貝塚では、数千の磨石・石皿が一括出土し、ここでも祭祀性が示唆されている。自然界に対し謙虚な生活を営んだ縄文人は、ようやく得られた食べ物を加工することに、感謝の意志とともに精神的なよりどころを見いだした。使い慣れた日常道具に生命の死と再生を込めて葬り、祭儀において食物神の依代に変貌させた、というのが私の考えである。



写真32　日本最大の石棒（佐久市、川崎保氏提供）

また、縄文時代の石棒祭祀の場合、山本暉久の研究総括によると、かつて水野正好が打ち出した「動物供儀に関連する…男性的要素の強いもの」という考え方が、基本的な解釈として深く研究に影響しているという。しかし山本は、農耕祭祀か狩猟祭祀かという二者択一論でなく、生産の舞台である「大地の豊饒」に対する祭式と捉え、さらに妊娠呪術にも関係するのではないかと示唆している[23]。同じ観点から渡辺誠は、深鉢や注口土器などに表れた性的表現について、石棒などの陰陽物も含め、「再生観念と結びついた聖なるセレモニー」に関わる祭具であると位置づけた[24]。これらの学説に及ぶべくもないが、稲作以前の主食糧とされる堅果類や根茎類など「野生植物の高度利用」が、縄文の石棒祭儀の背後にあると私は考える。石棒が立てられた縄文時代の配石遺構に石皿がともない、未整形の石棒でもすられたり磨かれていることが多いのは、

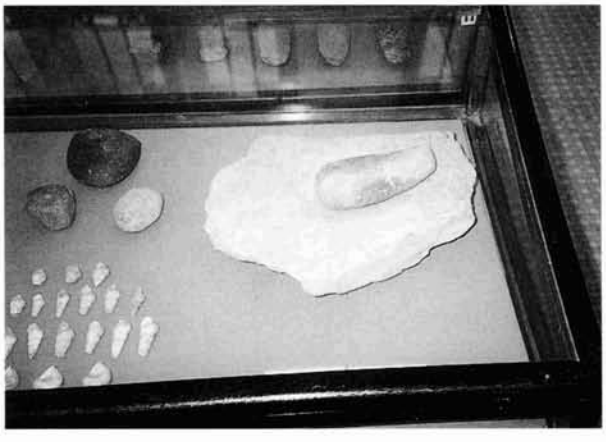


写真33　磨石と石皿（ホーチミン市博物館）

既述の通りである。

さてホーチミン市博物館には、紀元前10000～5000年ごろのホアビン文化の磨石と石皿が展示されていたが、いずれも縄文文化のものと同形態であった。インドシナ半島でも、稲作以前は野生植物の利用が生産基盤であったことは明らかである。文化も環境も異なるが、リンガとヨニは磨石と石皿であり、食糧を粉化することも、また第二の道具に神格化され祭具として崇められ、最後に葬られることも同じ所作である。

縄文人もヒンズー教徒も、神々への敬虔な態度は同じであって、その崇高な精神性を物質の海に翻弄された私たちが忘却してしまっただけである。

参考文献

(1) 総務庁統計局編『世界の統計』 1998年
(2) 『世界国勢図会（第6版）』国勢社 1995年
(3) 上山春平・佐々木高明・中尾佐助『続・照葉樹林文化』中央公論社 1976年 63～88頁
(4) 中尾佐助『栽培植物と農耕の起源』岩波書店 1966年 22～27頁、116～140頁
(5) 竹内利美「河川と湖沼の漁法と伝承」『日本民俗文化大系－山民と海人』5 小学館 1983年 310・311頁
(6) 石毛直道・ケネス・ラドル『魚醤とナレズシの研究』岩波書店 1990年
(7) 中井 均「考察－筑摩御厨について」『筑摩湖岸遺跡発掘調査報告書』米原町教育委員会 1986年
(8) W・バーチェット『カンボジア現代史』連合出版 1983年
石井米雄ほか『東南アジアを知る事典』平凡社 1986年 378～396頁
(9) 周 達観（和田久徳訳注）『真臘風土記－アンコール期のカンボジア－』平凡社 1989年
今川幸雄ほか『アンコールの遺跡・カンボジアの文化と芸術』霞ヶ関出版 1969年
今川幸雄『現代真蠟風土記』KDDクリエイティブ 1997年
(10) 厳 文明「稲作の起源と伝播」『季刊 考古学』第56号 雄山閣出版 1996年
(11) 石澤良昭・生田 滋「東南アジアの伝統と発展」『世界の歴史』13 中央公論社 1998年 58～62頁
(12) 佐藤洋一郎「稲のルーツ」『季刊 考古学』第56号 雄山閣出版 1996年
(13) ハ・ヴァン・タン編著 菊池誠一訳『ベトナムの考古文化』人類史叢書12 六興出版 1991年 143・144頁、72～74頁、81～118頁
(14) 石澤良昭「水利都市アンコールワット」『季刊 文化遺産』㈱島根県並河萬里写真財団 1998年
新田栄治ほか『東南アジアの考古学』同成社 1998年
(15) 重枝 豊・桃木至朗 編『チャンパ王国の遺跡と文化』㈶トヨタ財団 1994年
(16) 重枝 豊「チャンパの聖地ミーソン」『季刊 文化遺産』㈱島根県並河萬里写真財団 1998年
(17) 山形眞理子「東南アジア」『東アジアの囲壁・環濠集落』金沢大学文学部考古学研究室 2001年
(18) 三島由紀夫『癩王のテラス』中央公論社 1969年
(19) 植田文雄「ベトナムの食文化と宗教世界」『人間文化』8 滋賀県立大学人間文化学部 2000年
植田文雄「カンボジアの食文化と精神文化」『滋賀考古』第22号 2000年
(20) 吉田敦彦『昔話の考古学』中央公論社 1992年 212～219頁
(21) 植田文雄「ハレとケの縄文石器－礫石器の祭祀性についての素描－」『近江の考古と歴史』西田弘先生米寿記念論集刊行会 2001年
(22) 植田文雄「縄文時代における食糧獲得活動の諸相」『古代文化』50－10 古代学協会 1998年
(23) 山本暉久「石棒」『縄文文化の研究』9 雄山閣出版 1983年 177頁
(24) 渡辺 誠『よみがえる縄文人』学習研究社 1996年 75～83頁

琵琶湖博物館研究調査報告　第22号　23～40ページ　2004年３月

石器・石造品と列島の縄文文化

植田　文雄※

Comparative Studies of Stone Tools and Artifacts from the Neolithic Period in Asia

UEDA, Fumio※

1　台湾の石器・石造品

(1)　台湾考古学史の概要

台湾の考古学研究史を調べるのに、私たちが入手できる資料は非常に少ない。隣国とはいうものの、それだけ日本との文化交流の停滞したところでもある。ここでは現地で購入したいくつかの専門書と、日本人研究者が留学などによって得た紹介資料をもちいて、概要を紹介しよう[1]。

台湾考古学研究史は、第二次世界大戦を境として前後に大きく大別できる。戦前は日本人研究者が先導を切り、その筆頭が鳥居龍蔵であることは知られている。日本の人類学・考古学の草分けであり、1895年からはじめられた中国・台湾・朝鮮半島・樺太など東アジアでの人類学調査は、大きな業績である。彼は、1896年東京帝国大学の雇員として台湾入りし、伊能嘉矩のもとで台北帝国大学に土俗人類学教室を開いた。この時の全島調査は、台湾民族研究の元となり、現在知られるタイヤル、ヤミ、パイワンなど10の民族分類も、鳥居の命名によっている[2]。また、台北大学を拠点に考古学調査を行った鹿野忠雄と、国分直一の仕事も重要である。国分は、金関丈夫とともに考古学調査を実施し、中国語の専門書『台湾考古史』も著した[3]。

国分の『台湾考古史』によると、戦前の考古学研究史は３時期に分けられている。

まず第１期は、台湾出土の考古遺物として石器を紹介した、田中正太郎の報告である。田中は1896年４月に来台し、７月22日の夕暮れに、台北の「淡水河岸」で凹石を採集したことを、その年の『東京人類学会雑誌』第12巻127・128号に紹介した。翌1897年３月７日には、これを追究した伊能嘉矩・宮村榮一らが円山貝塚の存在をつきとめ、台湾島の新石器文化の一端を明らかにした。この貝塚を標識とした円山文化は、日本の縄文時代中～晩期に併行するとされ、櫛目文土器を使用した土器文化である。また、柱状片刃石斧や有肩石斧など磨製石器と玉器を作り、骨角器を使用する文化とされている。

第２期は、1930年代に始まる台北大学の移川子之蔵、宮原敦らが行った、本島南端「墾丁石棺遺跡」の発掘調査である。これには金関丈夫も参加し、1934年には台北大学の年報にその成果が発表された。この発掘で見つかった粘板岩系の板石を組み合わせた石棺は、その後、卑南文化（紀元前1000年～紀元ごろ）の遺跡で多数見つかり、東部から南部にかけての標識遺跡となっている。

第３期は、1939年に国分直一らがおこなった、高雄県湖内郷の太湖貝塚など西南部一帯の考古学調査である。この時期は、第二次世界大戦の激化に伴う国策に歩調を合わせた大発掘時代である。

さて戦後の調査研究は、中華民国の成立とともに中国人研究者によって進められた。1968～1969年には、台北大学の宋文薫らによって台東県長濱郷乾元・海霊・潮音の洞窟から後期旧石器時代の遺跡が発見され、先土器（先陶）時代に位置づけられた。自国の研究者による、本格的な考古学研究の幕開けである。さらに1980年代に入って、宋文薫らが新石器時代の研究を深め、土器出現期として大坌坑文化が設定された。また台湾島を北部・中部・南部・東海岸の４地域に区分し、こんにちの礎を築いたのである。大坌坑文化設定以後は地域ごとの発掘が進み、遺跡名が冠せられた文化概念が設

※ 能登川町埋蔵文化財センター　Excavated Cultural Properties Center, Notogawa Town

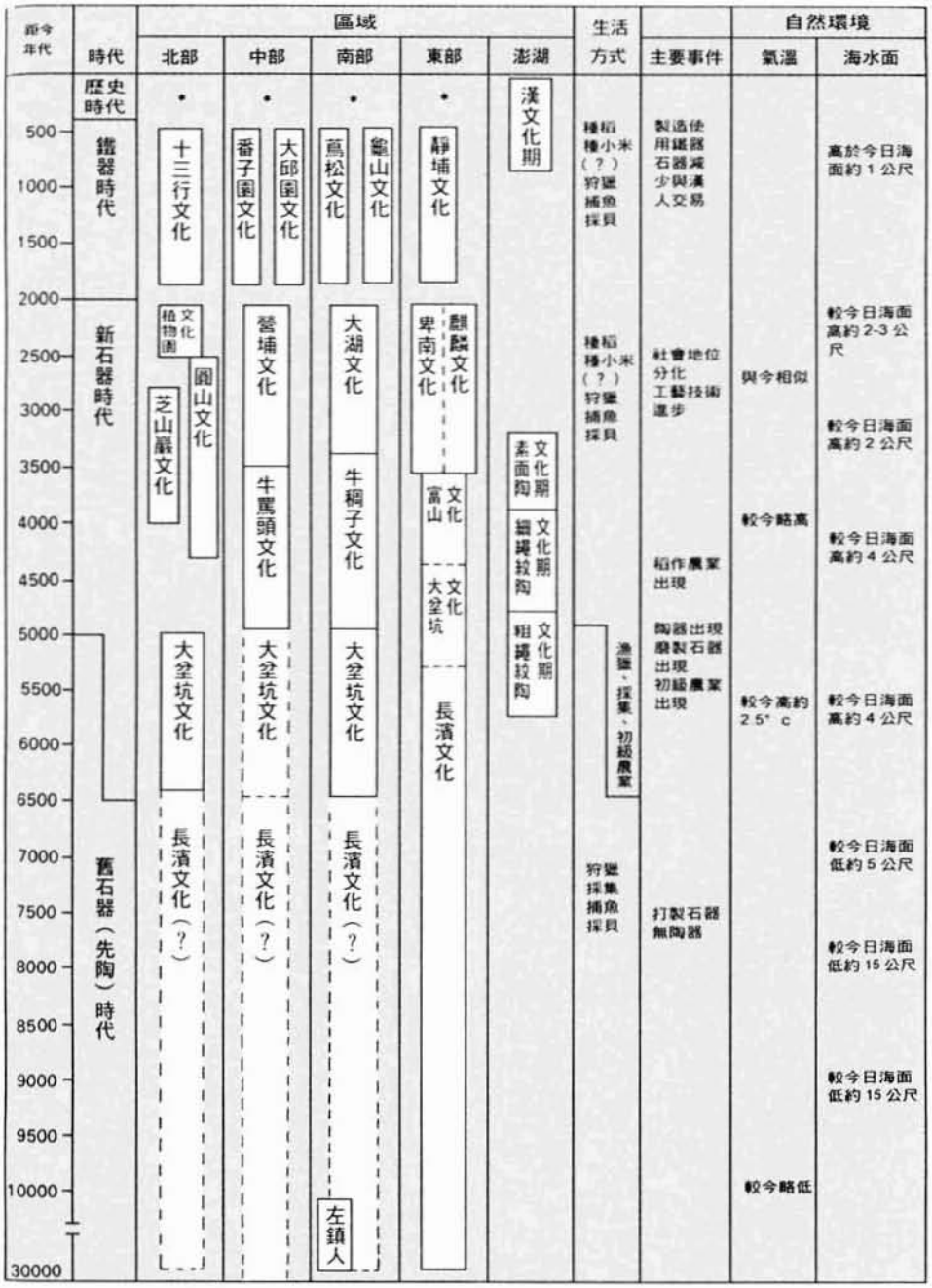


図1　台湾の考古文化年表（注4臧文献より）

けられるようになった。その後地域別研究や遺物の個別研究も進み、現在の文化概念の枠組みに至っている。なお台湾では、土器編年が遅れていることもあってか、年代決定にC^{14}年代測定法がもちいられることが多い。

このように、1896年からの約100年間におよそ1200か所の遺跡が見つかったが、その多くは1895年の台湾割譲以来、日本占領下の50年間に発見されたものである。当時、台湾総督府は帝国主義政策を強化し、台北大学土俗人類学教室も植民地政策の一環として置かれ、鳥居たちの調査は国策の波に委ねられた一面があったのである。

(2)　新石器時代と2種の石斧

台湾の文化時期区分は、旧石器時代に長濱文化が、次に紀元前4500年ごろにはじまる大坌坑文化が土器出現の新石器時代に位置づけられている。また紀元から17世紀前半までを鉄器時代とし、その後を歴史時代と設定されている[1]。長濱文化の開始期はおおむね2万年前と考えられているが、当時は後氷期の海面下降によって台湾海峡が陸化し、人の移動があったとみられている[5]。次に新石器時代の様相を概略述べるが、台湾では日本の縄文時代と異なって稲作が開始されており、この実態は中国・東南アジア・韓半島など大陸で、

共通する事実であることをまず述べておきたい。

土器が出現したとされる大坌坑文化は、北部台北県八里郷大坌坑遺跡が指標となる。ほとんどが日本でいう深鉢形土器で、体部に縄文が、口縁端部に刻目が施される。石器は少ないが、打製石斧・磨製石斧・石鏃・漁網錘などがある。土器は深鉢・鉢があり、縄文や貝殻文が施される。

次の段階からは、地域ごとに区分されている。

北部では円山文化が分布し、土器は押捺文・編目文・彩文が施される点が特徴的である。石器は、磨製鋤鍬・有肩石斧・有段石斧・漁網錘・石皿のほか、精巧な玉がよく造られる。玉玦・玉環・玉佩などもあり、これらは副葬品に用いられる。また、埋葬人骨から抜歯風習と首狩り風習があったことが判明し、高砂族の習俗との関連が注目されている。円山文化に併行して、彩陶土器や黒色研磨土器をもつ芝山岩文化（紀元前2000～同1000年ごろ）では、骨角器や木製農具を使用し植物繊維の編み物・縄なども見つかっている。炭化米が出土することから、稲作開始がこの段階とされ、華南地域からの伝播が想定されている。

中部では、円山文化と併行して台中県清水鎮牛罵頭遺跡の牛罵頭文化・営埔文化がある。使用土器の特徴から、牛罵頭文化は縄文赤色土器文化と称され、営埔文化は黒陶に類似する黒色土器文化と称される。これらは主に、農耕と漁業を生業とした文化と考えられている。

また南部では、台南県仁徳郷牛稠子・高雄市桃子園の牛稠子文化がある。打製石斧・磨製石斧を多用し、土器には鼎・豆（高坏）・甕など大陸からの伝播を想定させるものがある。これに続いて太湖文化・墾丁文化が位置づけられており、西海岸側の以上の文化相は三者共通項が多いとみられている。

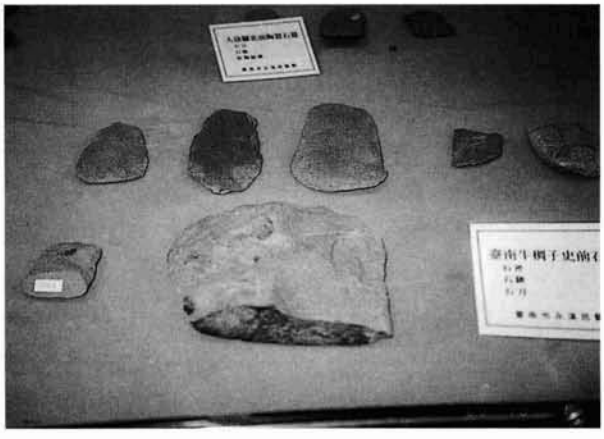


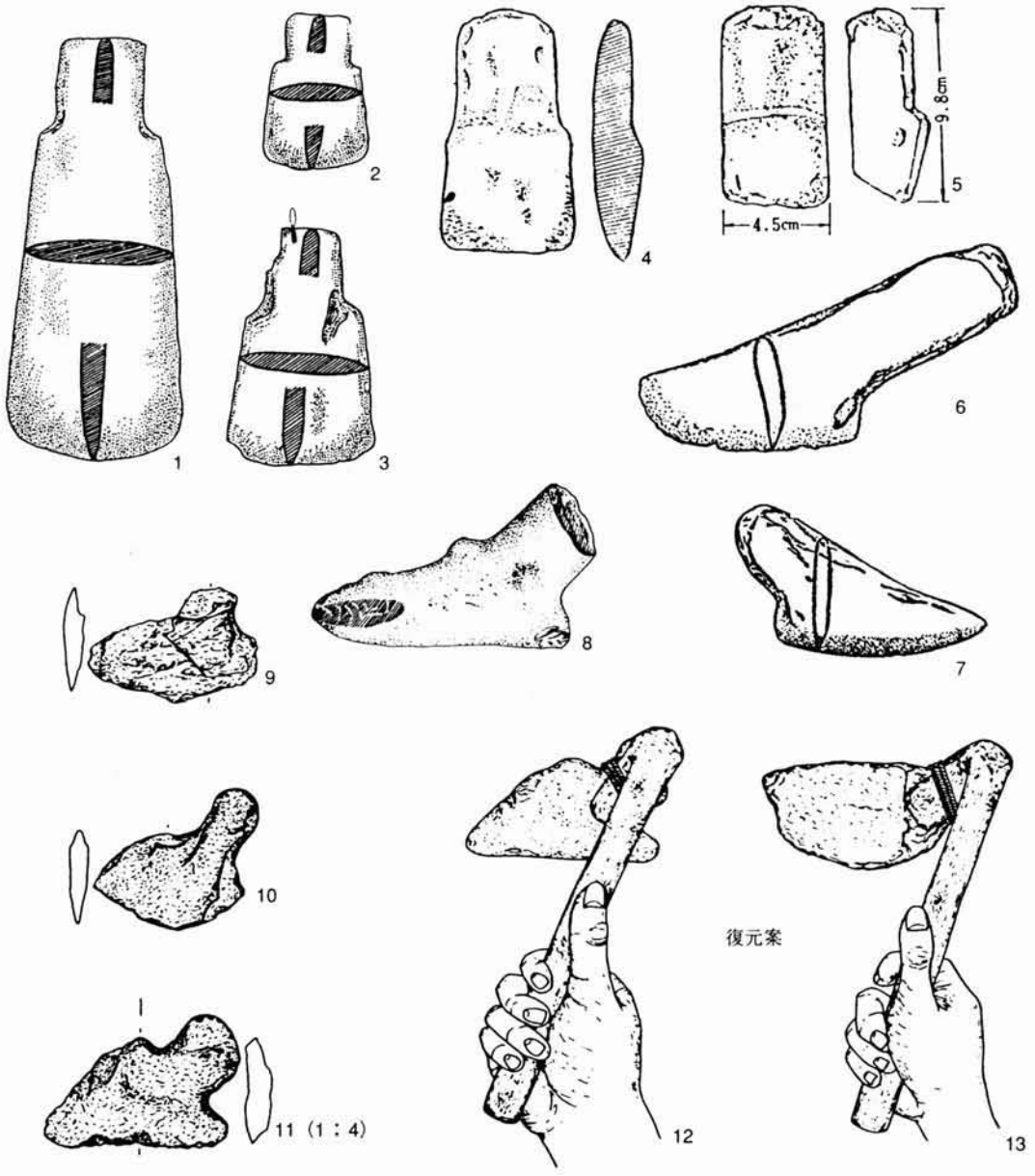
写真１　牛稠子文化の石斧（台南市立永漢氏民芸館）

東部（東海岸）では巨石文化、花蓮県麒麟遺跡を代表とする麒麟文化（紀元前2000～同1000年ごろ）が注目される。ここでは、石柱（陽石）・岩棺・石輪・石像など多くの石像群をもっており、祭祀的な遺物と認識されている。併行する卑南文化では、スレート状板石の組合わせ石棺を造り、ここでの抜歯・首狩り風習や豊富な玉類の副葬は、北部の円山文化にも共通する内容である。

さて以上が新石器時代の概要であるが、円山文化は縄文時代中・後期にあたり、特徴的な石器として磨製の有肩石斧がある。身幅６～８cm、長さ６～18cmと様々で、厚さは1.5cmと薄く精巧に作られている。日本列島の磨製石斧とは異なり、柄の装着部分を細くする。整形技法や断面形からみて弥生時代に多い扁平片刃石斧に類似し、展示品を観察した限りでは蛇紋岩など玉素材となる緻密な石を用いている。またこれと類似した有肩石斧は、インドシナ半島中部のバンチェン文化にも認められる。バンチェン文化は稲作を開始しており、早くから青銅利器を製作する一方、打製石斧や精巧な刃部磨製石斧を使うことから有肩石斧も主要な石器だったとみられる。

円山文化ではもう一種、片側の平坦面に段をもつ有段石斧が出土する。身幅４～６cm、長さ８～12cmと小型で、石質や調整は粗い横斧である。厚さは１cmから３cm以上と様々で、刃を片面に付けることから、チョウナ（手斧）のような使い方だったと思われ、丸木舟の刳り出しに機能を発揮したと想像できる。国分報告では主要な分布範囲は南シナ海全般とされ、中国南部に起源があると記される[3]。実測図の注記には「菲律賓（呂宋＝フィリピン）的有段石斧」とあり、南方起源説を補強する。時期的に、円山文化は東南アジアのバンチェン文化と併行し、後半に彩陶・黒陶も受け入れることから、華南の影響で成立した可能性はある。また同種の石器は、台湾西部・フィリピン群島・インドシナ半島など、南シナ海に面した地域に分布することから、共通する生業大系を持ち得たものと思われる。

さらに三つ目の石斧には、南部の墾丁文化に多い靴形石器が挙げられる。上記二種の石斧に比べ作りは粗く、土掘り具の打製石斧に近いものである。石材は安山岩・硬砂岩などで刃部と柄からなり、刃部研磨されるものと粗く打痕を残すものがある。類例の分布は中国中南部にあるとされるが、韓国や九州南部にも出土するとみられている[3]。類似品に日本の東北・北海道



1～3：有肩石斧，4・5：有段石斧，6・7靴形石器（6・7圓山文化），8：青竜刀形石器（ロシア，コンドン遺跡），9～11：有肩石器（曽利遺跡）

図2　アジアの様々な石斧（注3、6、26文献より植田が改変）

で出土する縄文時代中期の、刃部が磨かれて精巧に作出された青竜刀形石器がある。また極東ロシアのアムール川下流域にある、縄文時代中・後期併行のコンドン遺跡でも、同形態の石器が出土している。

国分は靴形石器について、山岳地域のブヌン族など雑穀栽培を生業とする人々の除草具にその用途を見いだしている。これは縄文時代中期の打製石斧と同様、野生植物の栽培に用いられた道具とみてよい。また類するものは日本の中部山岳地帯にもあって、根茎類堀鍬の打製石斧と伴出する「有肩石器」「有茎石器」が該当する。長野県曽利遺跡の報告書では装着状態を復元しており、除草鎌にみたてているのである[6]。

(3)　巨石文化と石棺

国立台湾博物館の前庭には、麒麟文化の巨石遺物がいくつか展示されている。

「石臼」は全長60cm以上、厚さ20cm近くもある大型のもので、縄文時代の有縁石皿と同形態である。重



写真2　石臼（石皿）（国立台湾博物館）

量は30kg以上あると思われ、これだけ大きい有縁石皿は日本列島では数少ない。有縁石皿は、縄文時代前期前葉に甲信地方で出現し、中期以後東日本で多用される根菜類対応の石器である[7]。管見では、有縁石皿は南九州を除いて西日本にほとんどなく、縄文時代の生業の地域特質がこの分布に表れているとみている。南九州では鹿児島県上野原遺跡はじめ、草創期・早期の遺跡で多量の無縁石皿が出土しており、筆者は中部以東とは別の生業形態を想定している[8]。それは根茎類中心の利用であり、台湾の新石器文化に掘削具の打製石斧が共存することから、雑穀もまじえた野生植物の半栽培がおこなわれていた可能性は高いだろう。

有縁石皿の他には「石輪」や男根状の「陽石」、平らで一端に窪みをもつ「陰石」なども展示されていた。石輪は、直径60cm以上もある楕円形平坦石の中央に両側から約15cmの穴を穿つもので、用途は不明である



写真3　陽石



写真4　陰石

が呪術的な石器と考えられている。陽石は長さ1m以上、直径30cmほどの石棒で、先端部約20cmが段をなして細く加工されている。一見して、列島の石棒とは異なった形態である。また陰石は平坦石の一端に幅15cm、長さ30cm、深さ8cmほどの刳り込みを施すもので、日本はじめ周辺地域には存在しない石造品である。

宋文薫は、これら巨石群を「当時人的日常生活並無関連、而可能與祭祀或其他儀礼有関」と推測し、祭祀的遺物としている[9]。新石器時代における類例では、ストーン・ヘンジで知られる紀元前3200～1500年ごろの、北西ヨーロッパで開花した巨石記念物が代表的である。しかしアジア全体を見渡せば日本を含む北東アジアに関連を求め得ず、南太平洋の島々に点在する南方と同系統の石像群とみなせるのではないだろうか。

また同展示には、「岩棺」という表示の刳抜き石棺が陳列されていた。これは長さ約2.2m幅約0.8mで、



写真5　岩棺（石棺）

蓋はないが合口の段加工が確認できる。石材はやや赤みをおびた灰白色の凝灰岩である。日本の石棺と比較すると、法量・形態・加工方法などに家形石棺との類似が指摘できるが、両側面に彫り出された3点の縄掛け突起は日本の石棺にはないものである。本来、古代中国や台湾に刳抜き組み合わせ式石棺の伝統はないことから、北方では九州阿蘇の凝灰岩製の可能性が、南方ではバリ島の舟形石棺やミクロネシアの石棺に関連を求め得る[9]。阿蘇の通称ピンク色凝灰岩は盛んに移動する棺石材として知られるが、紀元前とされる麒麟文化との年代が整合せず、東南アジア島嶼部の巨石文化の流れを汲んだ遺物と解釈するのが妥当であろう。

もう一種の石棺は、前記した東部卑南文化の箱式石棺である。卑南文化は、縄文時代晩期から弥生時代に併行し、石柱や陰陽石などをもつ。南部の山岳一帯では、現在も板状に剥離する石板スレートが多く産出し、在地パイワン族の家屋・倉庫も板石を積み上げて構築されている。卑南文化の箱式石棺は薄く強いこの石板を用い、側面に2ないし3枚、小口面に1枚用いるものである。

ところで日本列島の箱式石棺は、弥生時代を通じ山口県から北部九州・対馬・五島列島に多く分布する。

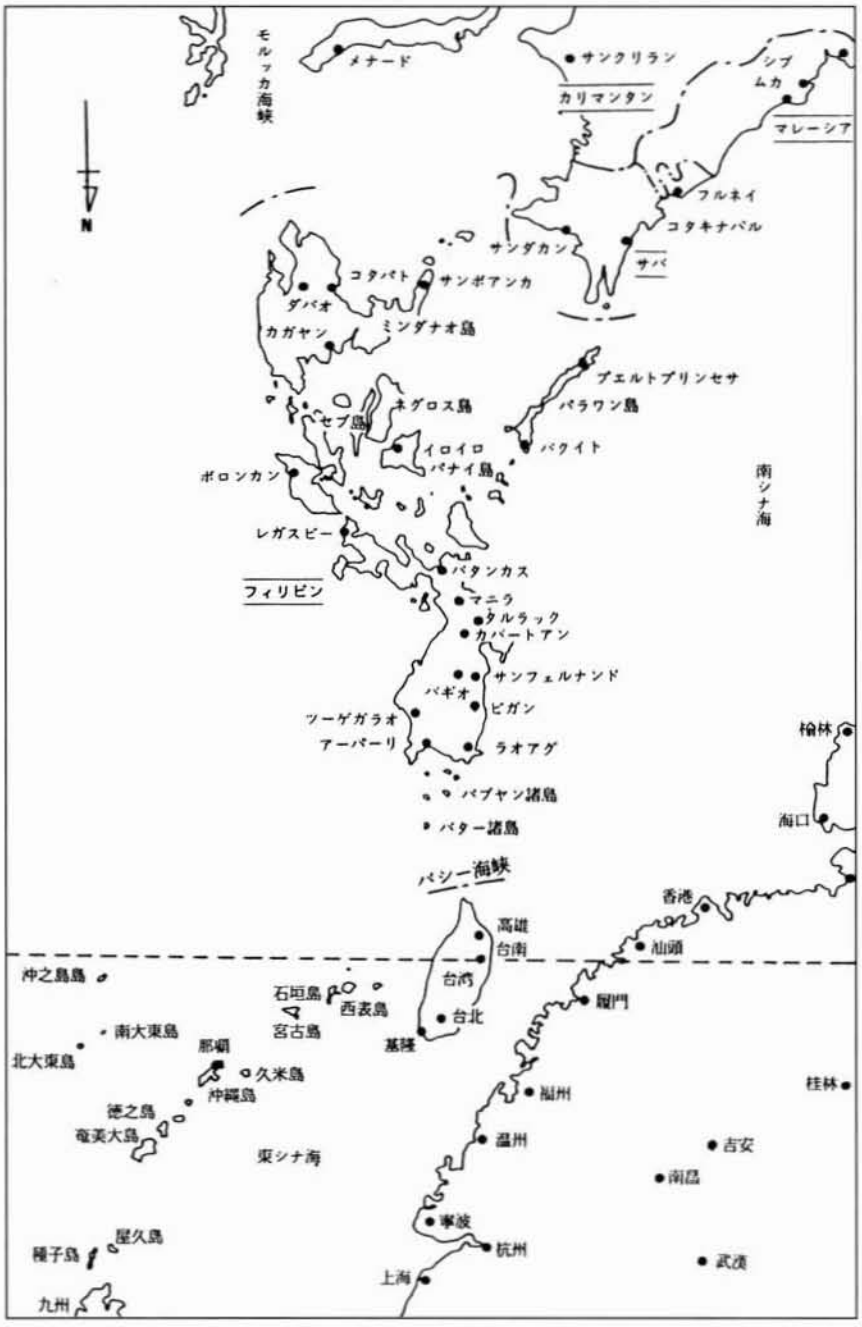


図3　琉球諸島・台湾・華南・ポリネシアの位置（注1盛本文献（1992年）より）



写真6　パイワン族の石積家屋（三地門、台湾原住民族文化圏区）

この起源を縄文時代晩期の北西部九州や、朝鮮半島の支石墓にともなう箱式石棺に求める考えがある[10]。朝鮮半島では、支石をもたない単なる石棺墓が扶余松菊里遺跡などで見つかっているのである[11]。基本的に板石で人間一人分の棺を組み合わせる埋葬方法は、シベリアはじめ朝鮮半島・中国東北部・北西部九州など東北アジア一帯に分布することから、東海岸に集中する箱式石棺は北方からの影響とも考えられる。東海岸では南からの海流に乗った巨石文化と北からの箱式石棺が混合し、西海岸では南シナ海地域の一つとして華南やフィリピンなど諸要素が融合した、多様な新石器文化の展開が見て取れるのである。

2　縄文文化とアジアの石皿

(1)　石皿の祭祀的側面

日本列島の縄文時代には、狩猟・採集など食糧獲得活動やその他実用的な役割を果たす「第一の道具」と、精神的活動に用される「第二の道具」がある。石器でいえば、石鏃・石皿・磨石など、その形態から機能・用途を想定できるものが第一の道具であり、石棒・石冠など、形態から用途を合理的に解釈しがたいものが第二の道具である[12]。

第一の道具は、素材や形・大きさなど多少の差異はあっても、古今東西にあまねく使用された道具である。一方、第二の道具は、時期・地域によって、形態・用途に個性をもつ遺物群である。また第二の道具には、文化領域をこえて共有される、普遍的な遺物が含まれる。第二の道具は基本的に祭祀具であるが、はじめから祭祀具として製作されないのに、使用の過程ないし後に、祭祀具に変貌する第一の道具がある。深鉢が転用された幼児甕棺もその例で、石器では磨石・石皿に祭祀具としての一面が見受けられるのである。

まず、図で模様の刻まれた彫刻石皿をみてみよう。岐阜県宮川村の牧戸出土品(2)は磨り面が小さく、三頂点に二条の円弧文が刻まれる。製作手順を実物で検証した結果、当初から文様は意識されたことがわかった。これに対し堂ノ前遺跡出土品(3)は、磨り面作出後に文様彫刻されている。(2)のように文様を優先したことは、当初から祭具的な性格をもたせて製作したことを示し、石皿の別の一面が窺える。また堂ノ前例には、「玉抱き三叉文」と呼ばれる特異な模様が刻まれている。玉抱き三叉文は北陸と飛騨北部に分布し、大型石棒に刻まれることが多く「女性器の表現」と見ることもできる特異文様である。

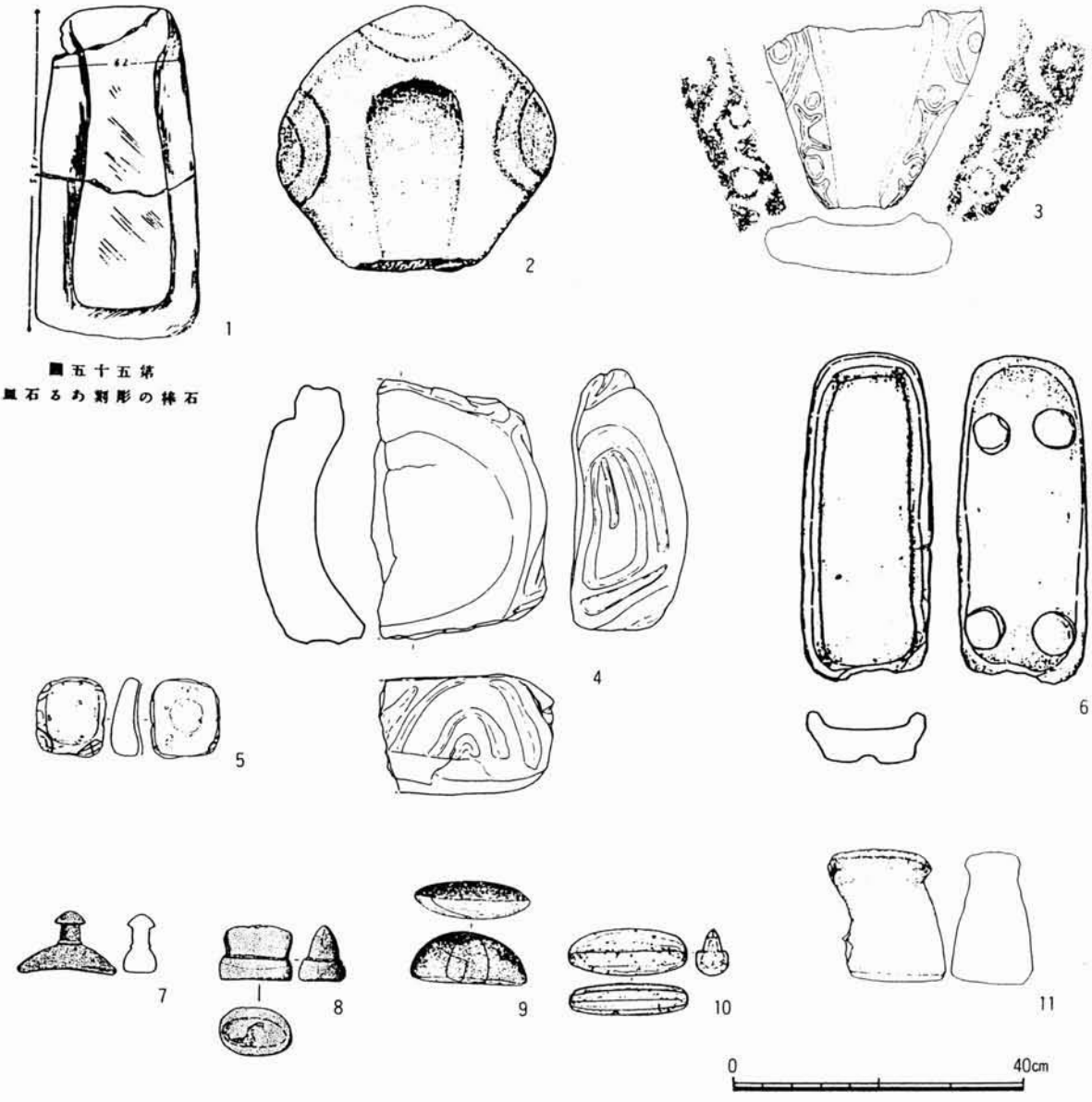
彫刻石皿は、岐阜県のほかに長野・山梨県でも出土するが、これらと直接的な影響の想定しがたい、鹿児島県の2遺跡（後期）でも見つかっている。なぜ南九州で、彫刻石皿が出土するのかについて定見を持ち合わせないが、草創期・早期の遺跡が多く、土偶など精神文化の高揚を示す遺物が早くに揃うことから、成熟した縄文時代社会が、南九州で成立していたことと関連するのかもしれない。



写真7　大陽環状列石（鹿角市）



写真8　樺山遺跡の墓標に使われた石皿（北上市）



第１図　石皿と石冠

1：『諏訪史』の石皿、2・3：宮川村出土石皿、4・5：草野貝塚出土石皿、6：脚付石皿、7：石冠Ⅰ類、8：石冠Ⅱ類、9：石冠Ⅲ類、10：石冠Ⅳ類、11：北海道式石冠（以上、各文献より）

図４　祭祀具的な礫石器（注15植田文献より）

次に磨石には、彫刻などの特別な加工痕はないが、配石遺構や環状列石に磨石が転用されている例は多く、磨石のみで構成される配石遺構も存在する。つまり磨石はそれ自身第一の道具であるが、配石墓・配石遺構・環状列石などに転用されることによって、第二の道具と化すのである。

また飛騨と北陸に多く出土する石冠（７～10）は、底面（接地面）を磨り減らし、窪ませるものが多い。用途不明品のひとつで中期末頃に飛騨地方で出現し、後期後半～晩期に周辺部に拡散する。滋賀県内では浅井町で表採資料がある。湖北の石冠は飛騨地方の影響ということで理解でき、石棒と同じ来歴を予測されるものである。石冠については、凹凸をもつ形態から「両性具有の呪術具」との考えもある[13]。

一方、遺跡の出土状況や遺構からも、礫石器の祭祀性をみることは可能である。北海道忍路土場遺跡や、秋田県大湯万座・野中堂遺跡の環状列石で現地観察したところ、磨石・無縁石皿の転用石は非常に多いと感じた。また岩手県樺山遺跡の配石墓には、割れた有縁脚付の石皿が墓標に転用されたものがある。ここの配石にもかなりの割合で、磨石・無縁石皿が含まれていたのを実見している。



写真9　北黄金貝塚から内浦湾を臨む（伊達市）



写真10　北黄金貝塚に露頭する磨石と貝層

滋賀県内では、甲良町小川原遺跡で約70基の配石遺構が見つかっており、多数の石皿・磨石・磨り痕のある礫が含まれることを確認している。東日本の、縄文時代中期後半に出現する、礫を一面に敷いた敷石住居でも、礫の中に磨石・石皿がまま見受けられる。

北海道北黄金貝塚では、湧水点近くの緩斜面で、1160点もの礫石器が集中して出土した。うち724点が北海道式石冠、246点が無縁石皿、103点が北海道式石冠の未製品であった。北海道式石冠[11]は、前期から中期前半までの間、東北北部から北海道中南部に多出する石器である。用途については、「植物質食糧の調理加工」に用いられ、基本的には第一の道具である。当初はこれを水場遺構の一形態とみて、石器製作場ないし作業場と報告されたが、その後アイヌ民族の霊送り儀式と関連づけ、「儀礼をともなった礫石器の廃棄」という考えが提示されている[10]。

このように縄文時代の礫石器には、祭祀的側面がある。彫刻石皿のように、遺物自身に表現されるものもあれば、配石遺構など遺構との関連で判断できるものもある。とくに一般的な道具の磨石・石皿は、日常のある場面で祭祀行為をともなって二つ目の役目を負わされ、第二の道具と化す。祭祀行為の具体的な姿は想像できないが、磨る（擦る）ことが祭りの重要なモチーフになっていることは、理解できるのである[9]。

また、磨石を能動態とみて男性に、石皿を受動態としての女性に擬態化する概念は、先に述べたリンガとヨニの関係にも当てはまる。縄文石棒でも亀頭頂部の磨られたものは多く、県下では能登川町石田遺跡の石棒も、先端部の磨り痕が著しい。自然界の循環にしたがう縄文時代社会では、底流に「生むこと＝生産」にたいする敬虔な思想がはぐくまれ、食べ物を生み出す磨石・石皿を祈りの対象としたのだろう。石棒とリンガには、生業と精神世界を結ぶ、普遍的な一面が見え隠れするのである。

(2)　森の石皿と平野の石皿

石皿あるいは台石の用途には、すでに触れた野生植物食糧の加工以外にも種々あったと考えられる。

まず狩猟関係では、毛皮の加工台、肉のミンチ道具、骨の割裂き台などが挙げられる。漁労関係では、サケ皮の加工台、魚肉のミンチ道具、貝割具、モリ・ヤスや釣針の研磨道具などである。また食糧以外の植物加工でも、繊維叩き台にされたり石斧の砥石や岩塩・顔料の粉砕具として使用された可能性も高く、実際には多様な使い方をされた道具である。

日本列島における石皿は、縄文時代草創期（紀元前11000年ごろ）には、確実に出現している。また、石皿と対になる磨石・敲石は、後期旧石器時代末には使用されている。ただし、初期の石皿使用では、板状石を作業台として使うことが主で、縄文時代前期以後に盛行する、有縁石皿のように受け皿としての用途はなかったと考えられる。おそらく後期旧石器時代～縄文時代草創期には、あらゆる作業の台石として使用されていたのであろう。

石器組成の中で石皿の比率が高まるのは、縄文時代早期（紀元前8000年ごろ）である。草創期ではまだ旧石器時代社会から抜け出ていない地域があって、遺跡数はもちろん生業活動の多様性を示す石器の種類も少ないが、一方で土器使用が急速に広まったことで生活レベルが向上し、早期にいたって人口増加に拍車をかけたのである。列島各地に、あまねく遺跡が分布し始めるのも早期に入ってからで、土器使用と磨石・石皿利用は、より豊かな社会に進む画期的な事項だったのである。また早期では、持ち運べないような大型石皿

が出現することから、定住化が進んでいだことも間違いないだろう[7][8]。

では、アジア全体を見渡すとき、磨石・石皿分布はどのような状況にあるのだろうか。各地の考古学調査の精度や、時期区分・年代決定に関する研究レベルに差が大きく、把握できる資料に限りがあるため、決して深く考察できる段階にないが、現在掌握し得た内容を次に示したい。

アジアを通してみると、大きく2系統の石皿分布圏が存在すると考える。



写真11　正楽寺遺跡の磨石・石皿　グラインド・ストーン（能登川町）

一つは、日本・台湾・東南アジア・広義のポリネシアなど中緯度から南方、モンスーン地帯・熱帯にかけて分布するもので、拳大の丸い磨石を伴う有縁石皿と、無縁石皿とをセットでもつグループである。有縁石皿は、日本では中部以東に多く分布するが、南九州と台湾にも確認できる。またこれらの周縁地域では、無縁石皿の中央部が、椀状に窪むほど使用したものが出土する。これは磨石の使用方法と関係し、石皿・台石に対し回転動作で磨るものである。さらに無縁石皿では、しばしば直径1・2cmほどの打痕を残すものもあり、叩く作業台であったこともうかがえる。有縁石皿は、想定される対象植物とともに、凝灰岩など軟質な石材入手の可否とも関係するのであろう。このタイプの石皿を、「回転磨り型石皿」と呼称する。

もう一つは、朝鮮半島・中国東北部など中緯度より北方と、西アジア・北アフリカなどサバンナ地帯に分布し、円柱・棒状の磨石とセットで使用された石皿である。これは古代エジプトの彫刻にあるように、前後に磨るか転がすかして使用するもので、前後端が反りあがった形の石皿となる。これを使用の様態から、「前後磨り型石皿」とする。

ここで、石皿の英語表記に二つの記述があることに着目したい。



写真12　韓国・岩寺洞遺跡の磨石・石皿　サドル・カーン（ソウル）

一つはサドル・カーン（Saddle-quern）で、一般の英文概説書や展示解説のほとんどはこの表記である。サドル・カーンとは、サドル（鞍）形のカーン（挽き臼）という、二つの単語が組み合わさったもので、主にイギリスなどヨーロッパの学者が関わった地域で使用される用語である。明治時代にイギリスで学んだ日本の考古学者はこの用語になじんだようで、わが国では英文サマリーなどでこれを用いることが多い。

もう一つはグラインド・ストーン（Grind-stone、grind＝粉にひく・つぶす）で、回転砥石・石臼の意がある。考古学よりむしろ人類学で用いられ、石皿の使用痕跡を自然科学的に調べた研究論文などに使われる。どちらも広義の石臼を指すが、前者が形態を語源にもつのにたいし、後者が作業動態をもとにする。またサドル・カーンが古典的で、グラインド・ストーンが新用語と思われる。

これら二つの用語は、上記2系統の石皿を規定するのに最適のことばである。日本の有縁石皿など回転磨



古代エジプトの農耕．サドル・カーンで製粉している．アフリカのサバンナ農耕文化地帯の粉食では雑穀を現在でもサドル・カーンで製粉している
(Singer, et al., 1956)

図5　サドル・カーン使用状況の彫刻模写（注16中尾文献より）

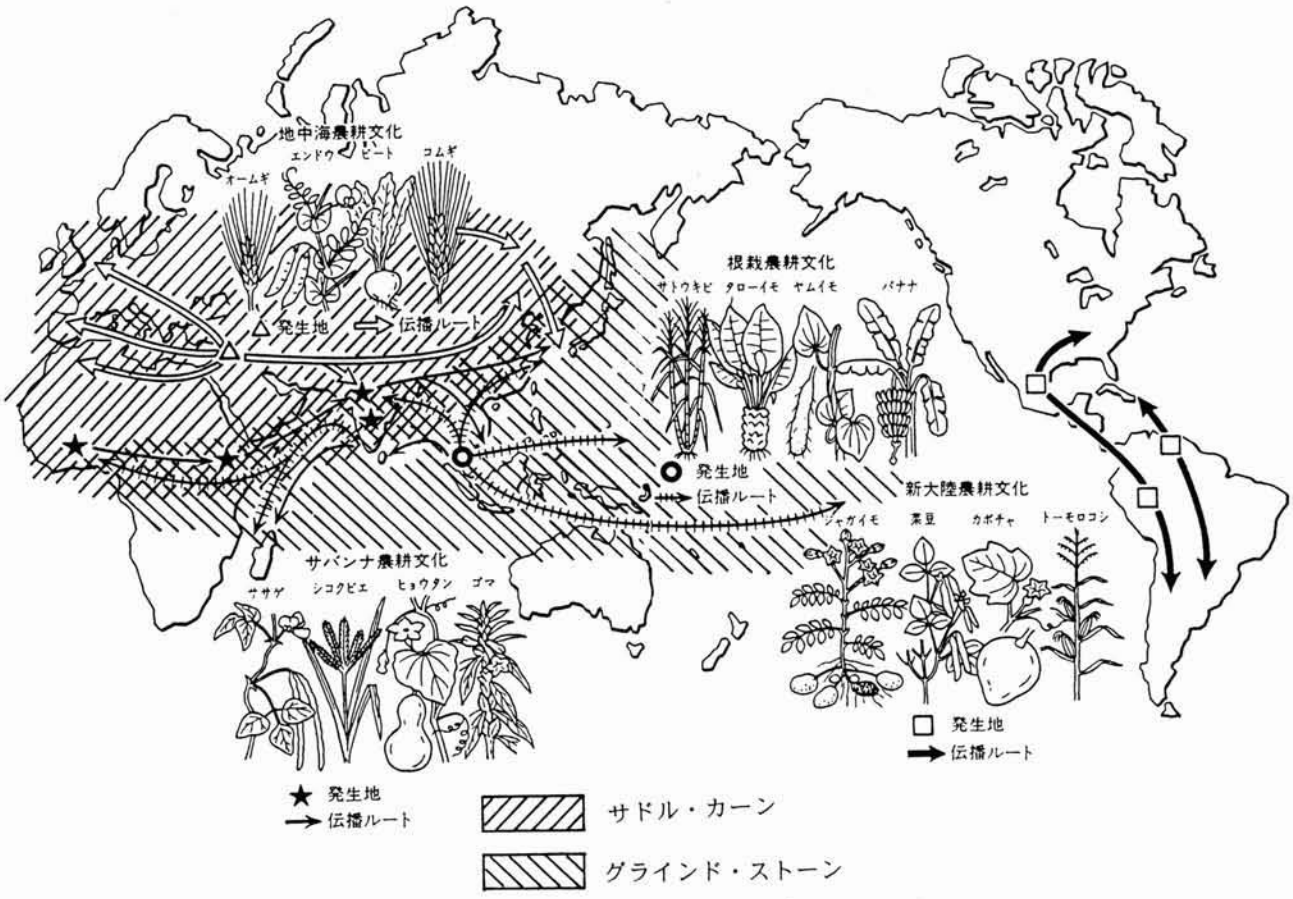


図6　初期農耕文化と石皿分布概念図（注16中尾文献に加筆して植田が作成）

り型石皿はグラインド・ストーンで、その特徴的な形態から前後磨り型石皿は、サドル・カーンである。しかし、実際の英語表記において両語は一括され、すべてサドル・カーンと表記される例が多い。だが本来は、サドル・カーンが前後磨り型石皿を指したことは間違いないだろう。

さて、この二種の石皿分布を、中尾佐助が示した初期農耕文化圏[10]とあわせて検討すれば、ある程度重複する二つの枠組みが見えてくる。グラインド・ストーンは根栽農耕文化圏に、サドル・カーンは地中海農耕文化およびサバンナ農耕文化圏に重なるのである。ヤムイモ・タロイモ・バナナなど、根栽利用を進めた地域はグラインド・ストーン＝回転磨り型石皿を、またヨーロッパ・北アフリカ・西アジア・ユーラシア北中部など、新石器時代にムギ・アワなど雑穀農耕が開始された地域では、サドル・カーン＝前後磨り型石皿を用いたのではないだろうか。この意味で、グラインド・ストーンを南方の「森の石皿」と、サドル・カーンは北方の「平野の石皿」と呼び換えることもできよう。

ところで、朝鮮半島へは新石器時代すでに、中国から雑穀栽培にともなってサドル・カーンが伝わったが、その後海を渡って日本列島の縄文文化に影響を与えることはなかった。列島では、落葉広葉樹林と照葉樹林の堅果類・根茎類が豊富にあり、雑穀を移入する必要がなかったのである。植物相が複雑にからみあう列島では、堅果類・根茎類からデンプンを摂取するために、グラインド・ストーンのみが使用され、動物・魚類も含め自然界の食糧獲得によって支えられていた。汎アジアで見た場合、縄文時代の固有性と周辺域に共通する普遍性が、この二種の石皿分布から読みとれる。

3　文化の海流と列島の縄文社会

(1)　縄文時代の水上交通

列島の縄文時代では、1万年以上前の草創期、すでに定住化を実現していたことが鹿児島県上野原遺跡などで知られている。多様な地勢と、照葉樹林帯・落葉広葉樹林帯がぶつかる自然環境は、それに適応した生業を成立させ、定住化が進展したと理解できる。また豊かさを求め、自給できないものを手に入れることも望んだことだろう。一般的に、本来持たないものを外部から入手し、その逆も含めた相互行為を私たちは、流通とよんでいる。縄文時代を通じて、黒曜石・サヌ

カイトなど石材、貝・玉石など装身具、アスファルト・水銀朱など鉱物資源が流通し、文化の成熟と発展に関与してきたのである。

琵琶湖を抱えた近江では、移動手段として縄文時代の丸木舟が特筆され、これまで湖底遺跡や内湖で数多く見つかっている。2000年度現在で、近江八幡市元水茎B遺跡で2隻、同C遺跡で5隻、同市長命寺湖底遺跡で1隻、彦根市松原内湖遺跡で12隻、湖北町尾上浜遺跡で1隻あり、これら21隻はすべて後・晩期のものである。近江の丸木舟について筆者は、漁労への利用だけでなく流通も重視し、丸木船出土遺跡を平野部へ展開する母集落の、情報窓口と考える[17]。



写真13　入江内湖遺跡の3号丸木舟（米原町）

また2001・2年度には、米原町入江内湖遺跡で新たに3隻が出土した。今のところこれらは、中期末ごろに比定され、琵琶湖に浮かんだ最も古い舟といえる。ただ、福井県鳥浜貝塚や京都府裏入遺跡などで、前期の丸木舟が見つかっていることから、琵琶湖縁辺でも中期以前の丸木舟が見つかる可能性は高いと思われる。

では、実際の丸木舟による湖上移動はどのように行われたのだろうか。尾上浜での出土を契機に、㈶滋賀県文化財保護協会によって、製作から湖上航行までの実験が行われた。材料は米スギで、尾上浜出土品と同じサイズ（長さ5.1m、幅0.5m、厚さ0.3m）に造られたもので、航行実験では尾上浜の湖岸から竹生島までの6kmを、ゆっくり1時間40分で到達したという。一連の実験に携わった横田洋三は、舟の厚さ（深さ）に着目し、尾上浜の0.3m程度の舟は琵琶湖本湖へ漕ぎ出すことが可能であり、松原内湖遺跡など0.15m程度のものは内湖や沿岸部専用であると考察している[18]。2種の深さをもつことは、中期末の段階で舟に機能分化があったと考えられるのである。

また現在は忘却されたが、湖上交通が近江の歴史的展開に関与した事例は多い。縄文時代から現代まで、湖上交通史を概括した用田政晴は、古墳時代に側板や波切板の付いた準構造船の出現をみるまで、丸木舟は湖上交通の主役にあったとする[19]。これまで、琵琶湖周辺で見つかっている丸木舟の数は実際の一部で、他にも未発見のものが低湿地に埋没しているとみてよい。入江内湖遺跡で、道路用地の狭い発掘調査だけで3隻見つかり、単純に面積で割り戻すとこの内湖だけで、百隻程度埋没していることも想定できる。

ところで、丸太を刳り抜く石器については中程度の横斧が該当するが、一般に縦斧の磨製石斧に比べて出土量は少ない。その中で注目されるのは、草創期の鹿児島県椈ノ原（かこいのはら）遺跡でみつかり、のちに沖縄県や小笠原諸島など南島での出土が確認された、丸ノミ形石斧である。これは、黒潮圏一帯に分布することから、南方の海洋民族が丸木舟を製作するのに用いた、専用石斧に比定されている[20]。筆者は、実物を観察する機会を得たが、刃先がスプーン状に抉りをもつことから、丸

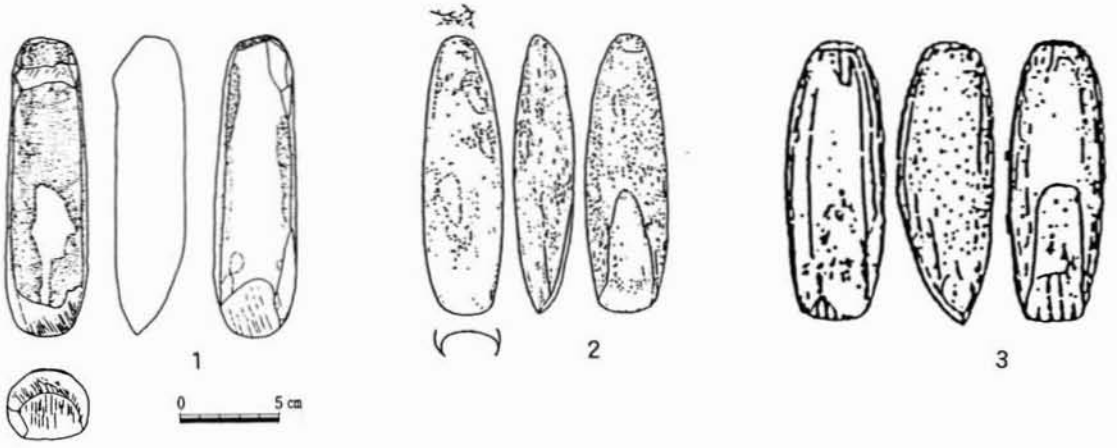


図7　丸ノミ形石斧
（1：鹿児島県椈ノ原遺跡、2：小笠原諸島、3：マリアナ諸島、1は1：4、2・3は縮尺不同　注30小田文献より）

太の刳り抜きに適すことは納得できた。

また海・湖岸だけでなく、内陸部の旧河川に面した集落で、舟による移動がなされていたことも指摘できる。民俗例では山間部深くの集落で、盛んに丸木舟が造られた記録がある。ダム工事に際し、まとまった縄文時代遺跡が見つかった新潟県朝日村奥三面（みおもて）部落では、狩猟を生業とするマタギが丸木舟をつくり、日常の移動手段に使っていたという記録がある[21]。

このほか、各地の山中で昭和初期まで盛んにおこなわれた「筏流し」も、移動手段として注目される。複数の材木を縄で緊縛するだけの筏は最も簡易な舟で、丸木舟ほどの大木は必要とせず製作工程も簡便なものである。これまで遺跡調査で、筏が出土した例は報告されていないが、実際は解体して木材として利用するため残らないのである。縄文時代の水上交通を解明するには、今後もさらに低湿地遺跡の慎重調査が求められ、そのフィールドである琵琶湖地域への期待は大きいものがある。

(2) アジアの新石器文化と縄文文化の交流

アジア各地の新石器文化は、海を越えた交流なしでは成立し得ない多様な内容を持っている。中でも日本の縄文文化は、四方の海が障壁ではなく、情報の道であったことを示す研究が増えつつある。そのいくつかを紹介し、新石器文化の交流実態について考えてみたい。

まず朝鮮半島との交流は、渡辺誠による漁具の調査で確かめられている。渡辺は、骨角器の結合釣針の分布圏が北西部九州と朝鮮半島南端で重なることを明らかにし、あわせて大型魚や海獣猟に用いる石鋸装着の銛の分布もこの範囲に重なることを示した[22]。漁具全般の共通性については韓国の研究者にも追認されており、彼地での研究も深められつつある[23]。また、朝鮮半島南部の隆起文土器・櫛目文土器と、九州の轟式土器・曽畑式土器・阿高式土器の影響関係も、両地域の交流を示すものである。熊本県阿高貝塚出土品と類似の貝面が見つかった釜山市東三洞貝塚では、中期、近畿に分布する瀬戸内系の船元式土器が確認され、土器そのものが海峡を越えたことが明らかにされている[24]。

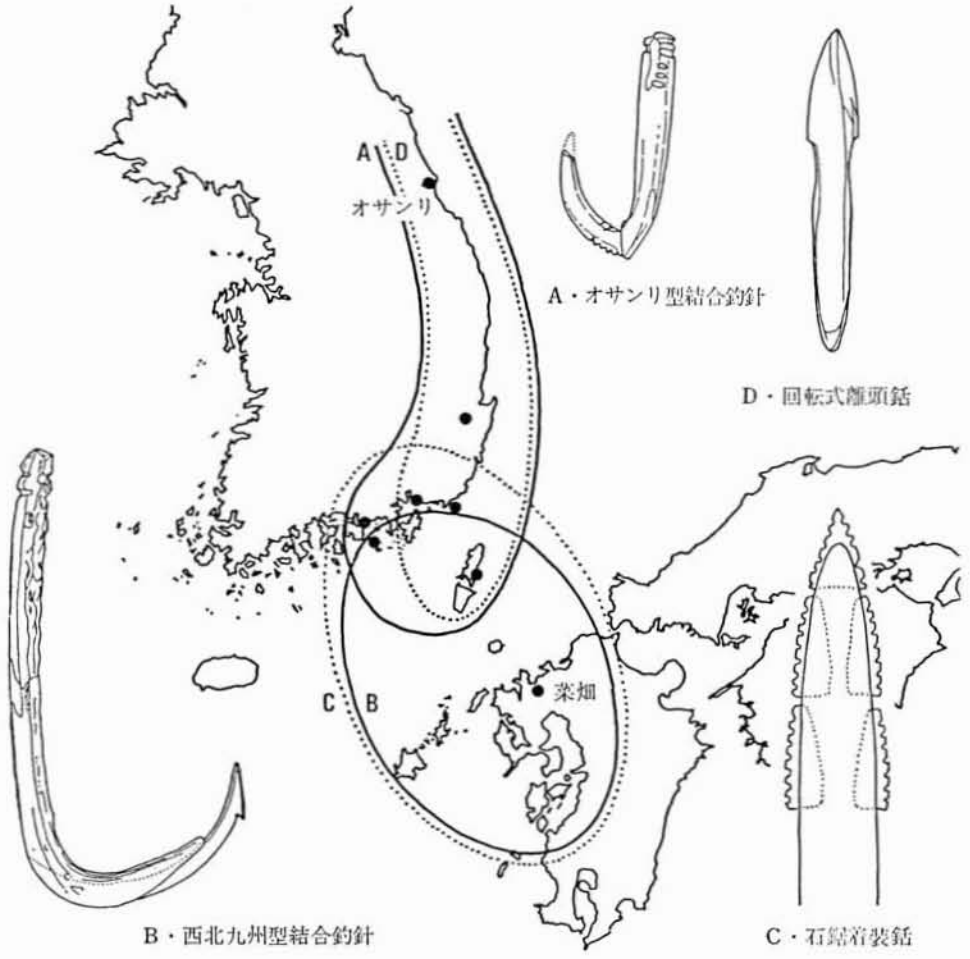


図8　朝鮮海峡の漁具分布（注22渡辺文献より）

土器の移動についても、単に流通品として伝播したということではなく、漁労民の往来の中で結果的に残されたものと理解されている。渡辺は弥生文化の渡来以前に、このような漁労民の交流があったことを重要視し、稲作はじめ新しい文化が一方的に流入したわけでなく、相互交流の中で取り込まれたものと考えている。つまり漁民の操船技術が前提にあって、大陸との交通が可能となったという理論で、対外交流の本質をついたものといえるだろう。

ちなみに上記の貝面は、本州では後期前葉に土面に変容し、祭祀具の一つとなる。東日本では、土面が後期後半～晩期に多く見つかることから、西から東へ影響を及ぼした文化要素のひとつと筆者は考えている。近江では、筆者の調査した滋賀県正楽寺遺跡の、実際に被れるサイズの土面がある。

次に、サハリン・シベリアとの関係では、北海道東部白滝産の黒曜石が石刃技法をともなって、サハリンやアムール川流域に渡っていることが確認されている[25]。他にも、沿海州で隠岐産の黒曜石が見つかっている。ただし、この時期の間宮海峡は陸続きだったようで、海そのものを渡ったかどうかは不明である。

またアムール川下流のコンドン遺跡では、近年ロシアと日本の共同調査が進められ、報告書も刊行されるなど、少しずつ交流関係が明らかになっている。コンドン遺跡は、コンドン文化期～ヴォズネセノフスコエ文化期（紀元前3000～1500年ごろ）に位置づけられており、日本では縄文時代中期～後期前葉に該当する。報告書掲載の遺物図版をみると、東北の縄文文化に共通する内容が見受けられる[26]。石器では、打製石斧と磨製石斧（局部磨製石斧）が多い。石鏃・石槍・石錐・石錘・スクレイパーも一定量あり、東北出土品と類似の垂飾品が、かなりの点数出土している。石皿などの礫石器も使われ、石器群を概観する限り縄文時代中・後期の組成と大きな差異はない。また、石棒や土偶が出土していることも注意される。石棒は、長さ約17cmで先が細くなる形態であるが、亀頭の造出は写実的である。住居跡出土の土偶は、後頭部が異常に発達した女性像で、目鼻立ちがはっきりした点が列島の土偶とは異なる。土偶が出土した住居3の土器でもわかるが、施文では半裁竹管文・沈線文・撚糸文・押圧文・磨消（充填）縄文など、基本的に縄文土器との類似性が極めて高いといえる。

また、沿海州および中国北東部とは、日本海側の縄文時代早期の遺跡でみつかる玦状耳飾りが、彼地のものと酷似し、影響を否定し得ない状況になりつつある[27]。

方向を南に向け、太平洋のオセアニア地域との関係を見てみよう。

ポリネシア・ミクロネシア・メラネシアに3区分されるオセアニアは、大小1万もの島々で構成されている。この地域は、約500の言語を使う多様な文化が錯綜しており、これらの人々を総称してオーストロネシア人と呼ばれている。また、3地域の島々で見つかる新石器時代人骨には、「ラピータ人」の名称が与えられており、彼らの使用した土器をラピータ土器として

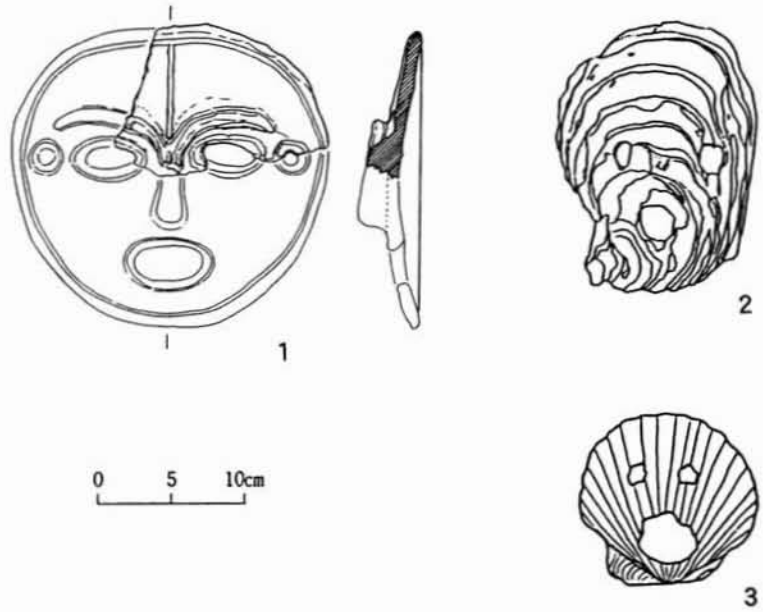


図9　土面と貝面（1：滋賀県能登川町正楽寺遺跡、2：熊本県阿高貝塚、3：韓国釜山市東三洞貝塚）
（1は注17植田文献より、2・3は磯前順一「縄文時代の仮面」『考古学雑誌』77－1　1991年　より）

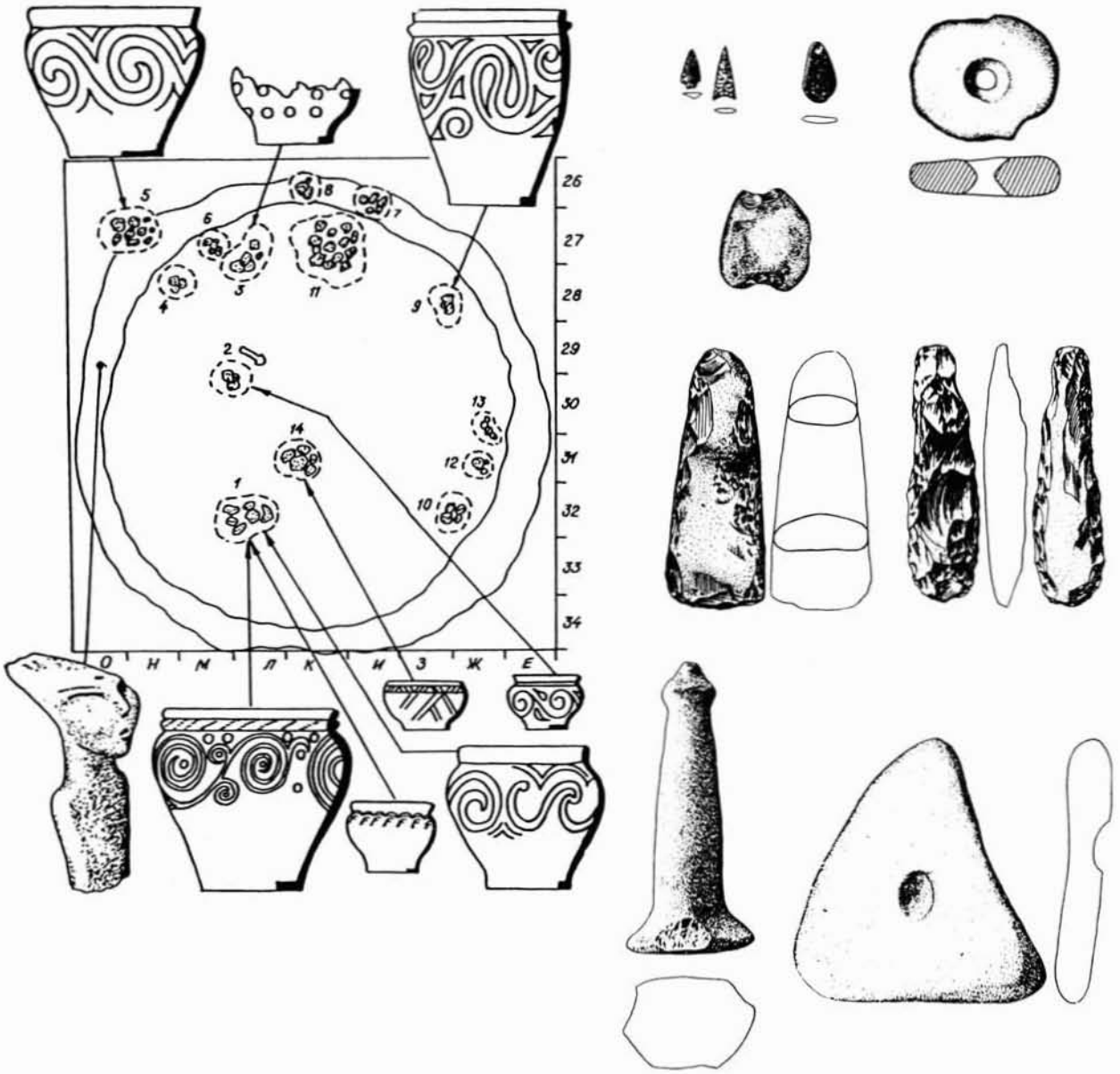


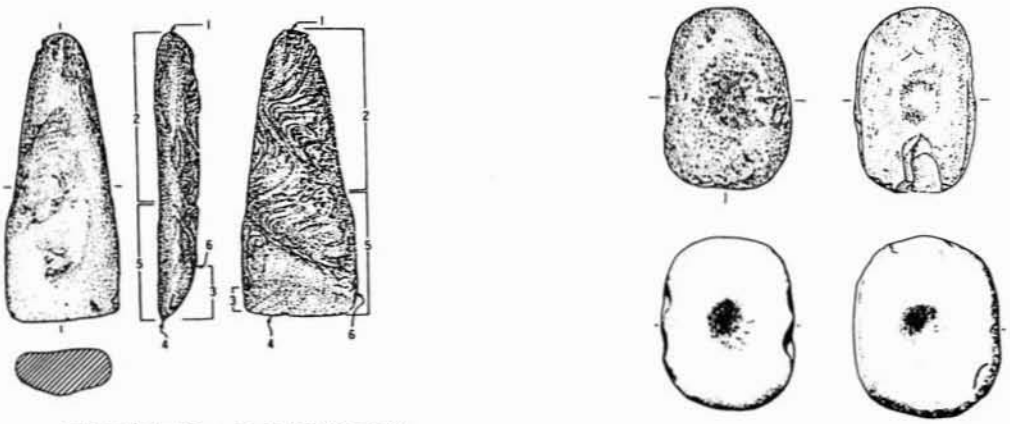
図10　ロシア、コンドン遺跡住居３（土偶・土器、縮尺不同）、右は他の住居跡出土土器（１：４）（注26文献より）

いる。ラピータ土器文化は、紀元前1500年ごろ出現し同じく紀元前300年ごろまで続いたとされる、太平洋諸島最古の土器文化である。彼らは、言語学的観点と考古資料の共通性から、東南アジア起源のタロイモ・ヤムイモを主食とした半栽培段階の人々と考えられている。

遺跡から見つかる出土品には、2000kmもの海洋を越えた黒曜石もあり、他の島と結ぶために相当熟達した航海術を保持したとされる[28]。紀元前5000年の往古、双胴式のカヌーで太平洋を自在に移動したのである。

沖縄の八重山諸島からは、同時期の遺跡でシャコ貝斧が見つかっている。シャコ貝斧は堅く厚みのある性質を生かし、先端を研磨した鋭利な斧である。筆者は、沖縄県埋蔵文化財センターで実見し、磨製石斧と遜色ない刃部を有すことが観察できた。ただ、横斧のため大樹の切り倒しには不向きで、逆に丸木船（カヌー）加工用の横斧としては有効だったと考えられる。これらシャコ貝斧については、フィリピン島嶼部渡来説が根強く、彼らの航海術をすればもっと南方からの移入も否定できないのである。また先述のラピータ人は、環太平洋に拡散した古モンゴロイドの末裔とされ、往古大陸から移動した人々である。その移動方法に、海面低下であらわれた陸橋上の徒歩以外に、渡航具（筏・丸木舟）の使用も想定できる。

一方、海洋渡航のあかしに、東京武蔵野台地の旧石器時代遺跡（紀元前33000年ごろ）から見つかった、



マキン出土のシャコガイ手斧の名称
左からFRONT（前面，ベヴェルの無い面），SIDE（側面），BACK（後面，ベヴェルのある面）。1．POLL（頭部），2．BUTT（柄に装着される部分，残余の部分はブレイドと呼ぶ），3．BEVEL（刃をつけるために面取りされたバックの一部），4．(CUTTING) EDGE（刃部），5．BLADE（刃身），6．CHIN（ベヴェルとバックが接した縁の部分）

図11　ミクロネシア・キリバス共和国出土のシャコ貝斧（左）と凹石（右）（注28高山・甲斐山文献より　縮尺不同）

伊豆諸島神津島産の黒曜石の石器が挙げられる[29]。本州と神津島は約180km離れている上、最終氷期最寒冷期（20000～18000年前ごろ）でも深さ200m、幅30km以上の海峡が存在することから、海上航行による産物と確実視されている。ちなみに、この資料が世界最古の海洋渡航を示す考古資料である。

伊豆諸島でも、縄文時代前期末から活発な渡航活動が行われていた。300km離れた八丈島で、本州渡来と思われるイヌとイノシシの骨が見つかっている[30]。新石器時代の黒潮圏では、数千kmも離れた地域間の直接交流を示す物質資料は、極めて少ないと思われるが、図に示されるとおり、複数の文化圏の重なりを海流が貫く事実からは、想像以上に多様な交流が予見されるのである。

さて、以上のように列島の縄文社会は、さまざまなかたちで海を越えた交流をおこなっていたことが理解できた。一方で、このような「似たもの探し」で交流を語ることに慎重な意見もある[31]。たしかに「他人の空似」はいつの時代どの地域にもあって、その是非を証明することは本当に難しい。だが、表面的に似ていることがクロスチェックの結果、同系統を汲んでいたり本質部分を共有する事例が、先の東南アジア例でもみられるのである。可能性が残される以上、広域での交流を視野にいれておかなければ、遠い時代の具体的な姿がいつまでも見えてこない。一つの文化にひそむ、多様性と固有性を見いだす作業は、これからも続くだろう。日本の基層文化を探るアジアの調査行は、まだ始まったばかりである。

謝　辞

小論を草するにあたり、次の方々から資料の検索・提供などのご協力をいただいた。ご芳名を記してお礼申し上げます。盛本　勲、宮田栄二、川崎　保、瀬口眞司、内田和典（順不同、敬称略）

参考文献

(1)　盛本　勲「台湾考古学の現状」『沖縄考古学会例会発表要旨』　1991年
盛本　勲「南琉球圏と台湾先史時代研究の現状と課題」『沖縄県教育庁文化課紀要』第8号　1992年
(2)　宋文薫ほか『跨越世紀的影像－鳥居龍藏眼的台湾原住民－』順益台湾原住民博物館　1994年
(3)　国分直一、金関丈夫　著、譯継山　訳『台湾考古誌』武陵出版有限公司　1990年
(4)　臧振華『台湾考古』行政院文化建設委員会　1999年（民国88年）36～39頁
(5)　黄士強　著、盛本　勲　訳「台湾先史文化の紹介」『沖縄県教育庁　文化課紀要』第9号　1993年
(6)　武藤雄六ほか『曽利』富士見町教育委員会　1978年
(7)　植田文雄「無縁石皿考」『列島の考古学』渡辺誠先生還暦記念論集刊行会　1998年
(8)　植田文雄「縄文時代における食料獲得活動の諸相」『古代文化』50－10　古代学協会　1998年
(9)　新田栄治ほか『東南アジアの考古学』同成社　1998年　200～203頁
(10)　藤田　等「石棺墓」『弥生文化の研究』8　雄山閣出版　1996年　101～103頁
(11)　『(韓国) 国立中央博物館図録』　1998　51頁
(12)　用語の初出は小林達雄の次の文献である。小林達雄「祈りの形象　土偶」『日本陶磁全集　土偶・埴輪』中央公論社　1977年
(13)　岡本孝之「石冠・石鋸・鰹節型石器」『縄文時代』第10号　縄文時代文化研究会　1999年　91～97頁
(14)　大島直行「北海道の水場遺構」『考古学ジャーナル』457

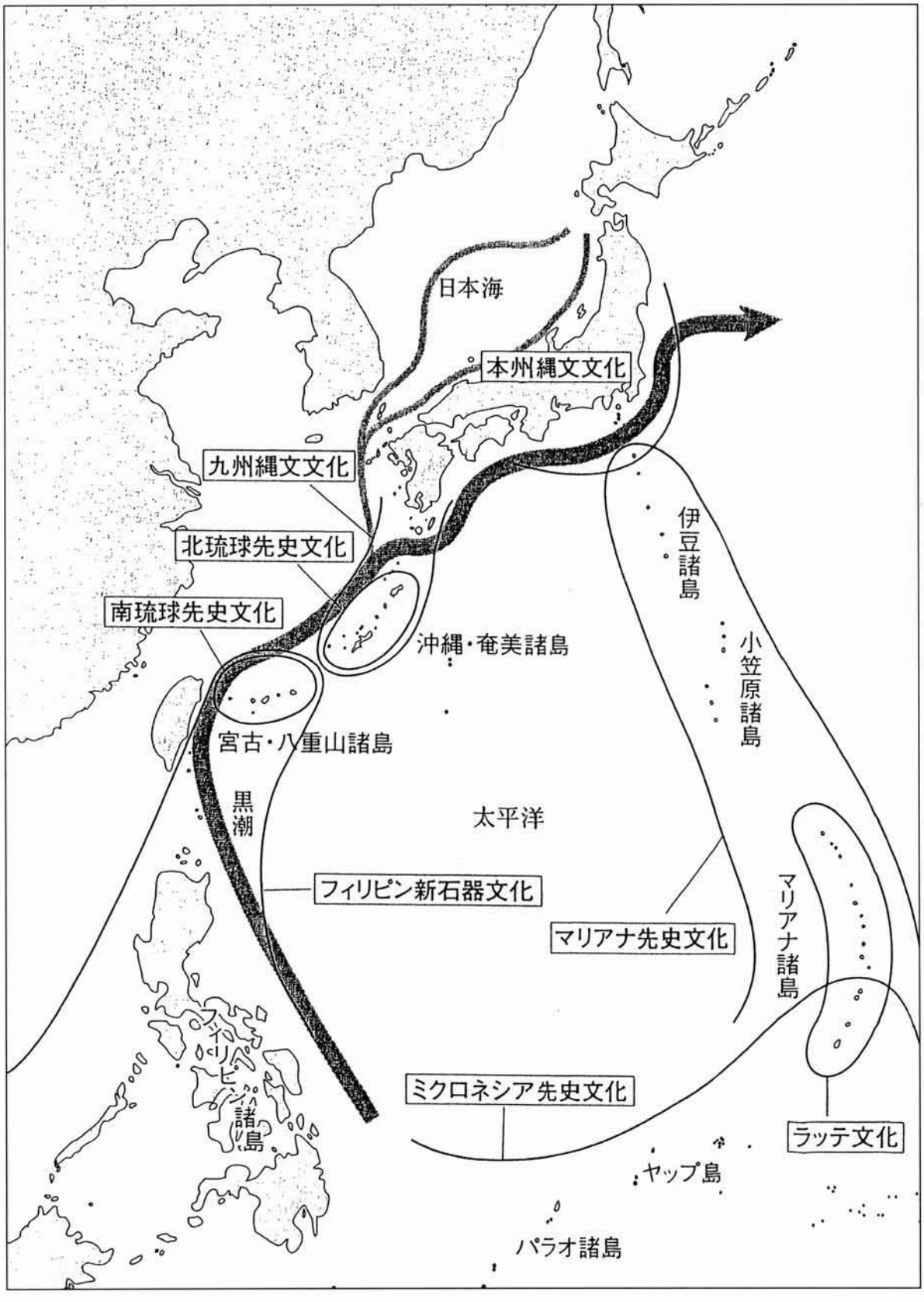


図12　黒潮圏の先史文化（注30小田文献より）

ニューサイエンス社　2000年
⑮　植田文雄「ハレとケの礫石器－礫石器の祭祀性についての素描」『近江の考古学と歴史』（西田弘先生米寿記念論集）2001年
⑯　中尾佐助　『栽培植物と農耕の起源』岩波書店　1966年　57頁
⑰　植田文雄　『縄文人の淡海学』サンライズ出版　2000年　74～87頁
⑱　横田洋三「縄文時代の丸木舟」『考古学ジャーナル』345号　ニュー・サイエンス社　1992年
⑲　用田政晴　『信長　船づくりの誤算－湖上交通史の再検討－』サンライズ出版　1999年　49～55頁
⑳　小田静夫「黒潮圏の丸ノミ形石斧－椎ノ原遺跡の丸ノミ状石斧をめぐって」『南九州縄文通信』No. 8　南九州縄文研究会　1994年
㉑　赤羽正春「越後の川舟」『日本民俗文化大系－技術と民俗』第13巻　小学館　1985年
㉒　渡辺　誠「縄文・弥生時代の漁業」『季刊　考古学』第25号　雄山閣出版　1988年
　渡辺　誠「朝鮮海峡における漁民の交流」『日韓交流の民族考古学』名古屋大学出版会　1995年　72～75頁
㉓　李　相均『新石器時代の韓日文化交流』学研文化社考古学叢書18　1988年　262～277頁
㉔　木村幾多郎「縄文時代の日韓交流」『東アジアと日本の考古学』Ⅲ　同成社　2003年　36頁
㉕　木村英明「北海道とサハリン・シベリア」『考古学による日本歴史』10　雄山閣出版　1997年　122頁
㉖　А.П.ОКЛАДНИОВ　『Древнее поселение Кондон』　ИЗДАТЕЛЬСТВО《НАУКА》　1983年
㉗　川崎　保「玦状耳飾りと管玉の出現」『考古学雑誌』83－3　1998年
㉘　高山　純・甲斐山佳子　『珊瑚島の考古学』大明堂　1993年　116頁
㉙　小田静夫「交易－黒曜石」『縄文文化の研究』8　雄山閣出版　1982年
㉚　小田静夫「黒潮圏の先史文化」『鹿児島国際大学付属地域総合研究所　研究会・発表要旨』　2003年
㉛　大貫静夫「日本と大陸の交流」『東アジアと日本の考古学』Ⅲ　同成社　2003年

琵琶湖博物館研究調査報告　第22号　41～60ページ　2004年３月

東アジアにおける都城
－特に山城との関わり、稜堡との関わりについて－

中井　均*

Ancient Capitals in East Asia
－With Special References to Hill Forts and Bastions－

NAKAI, Hitoshi*

1　はじめに

近年、全国で都道府県単位で中世城館遺跡の分布調査が実施され、日本列島には３～４万箇所にのぼる城館遺跡が明らかとなった。

これらの城館遺跡は、およそ14世紀から17世紀までの300年間に集中して構築されたものであり、日本の中世は、いわば「大築城時代」であった。

わずか300年のあいだに３～４万にのぼる城館を築いたのは世界史的にみてもおそらく日本だけであろう。

さて、アジア考古学研究機構では1998年よりアジア諸国の考古学事情を調査、研究することを目的としてベトナム、カンボジア、台湾、インド、中国東北地方を巡ってきた。とりわけ筆者は、城館遺跡が各国の民族性を検討する資料となり得るものであり、こうしたアジア各地に残る城跡を観察し、日本列島に残された中世城館遺跡と比較することが必要であると考えた。

本稿では、こうして見学した東アジアの城館遺跡を中心に、囲壁・環濠集落のあり方、山城、都城さらにはヨーロッパから導入された稜堡式築城について検討し、城郭からみた東アジア史を概観するものである。

2　台湾城郭の概略史

(1) イスパニア・オランダの築城

まず最初に、アジアにおける城郭史の事例として台湾を取り上げたい。アジア考古学研究機構では、2000年度の調査で台湾を訪れた。その際、オランダ、イスパニアというヨーロッパ諸国による築城とその後の中国による築城、さらには近代の稜堡式城郭というアジアの縮図ともいうべき城郭群を見学する機会を得た。残念ながらヨーロッパ侵略以前の城郭は見学することができなかったが、拙稿の最初に台湾城郭の概要を報告することによって、アジア城郭史を概観しておきたい。

中国福建省の東に浮かぶ台湾に、漢民族が移住を始めたのは意外に遅く、17世紀にはいってからのことである。それ以前は東南アジアから移住してきた先住民族として、山地に住む山地族と平地に住む平埔族が独自の言語、風俗をもって住んでいた。

ところが、大航海時代に台湾の地理的位置を重視したオランダは、1624年にゼーランジャ城を築き、翌年にはプロビデンシャ城を築き台湾南部を確保した。

ゼーランジャ城は現在の台南市に位置しており、安平古堡と呼ばれている、典型的な稜堡式城郭である(写真１、図１)。

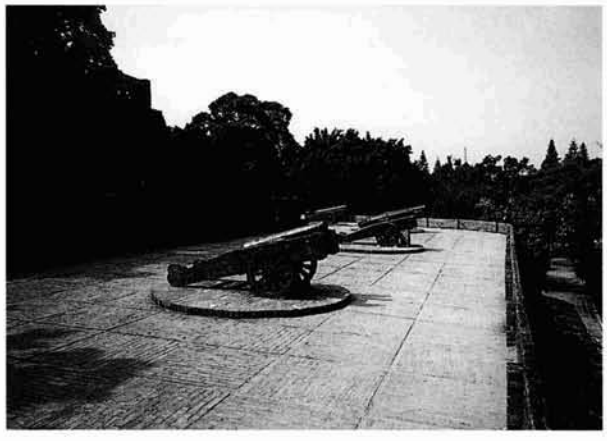


写真１　ゼーランジャ城跡

ちなみにゼーランジャ城は、日本の城郭研究史の中では最も著名な外国の城郭である。たとえば「こここそ要衝の地と思った築城家の高虎は、奇想天外の平地海城築城法を考え出したのである。この築城法は、台

※ 米原町教育委員会　Maihara Town Board of Education

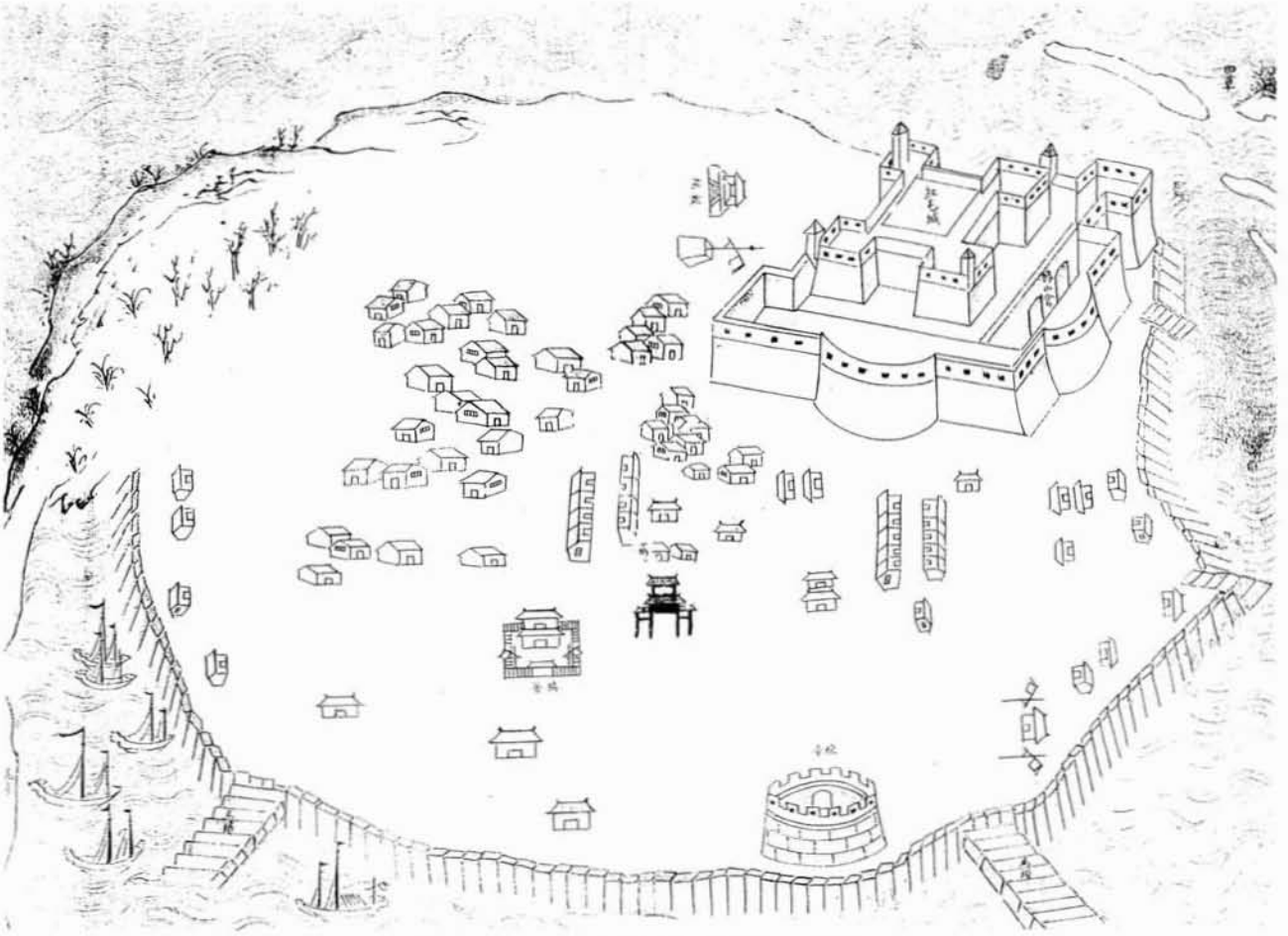


図1　ゼーランジャ城（参考文献8による）

湾にあるオランダ人の築いたゼーランジャ（開国城）の西洋式海防の構えからヒントを得たものといわれる」（大類伸監修『名城名鑑』中巻 人物往来社 1965）。「一説には、台湾島にオランダ人が築いたゼーランジャー（開国城）の西洋式海防の構えを研究して、これにヒントを得たのだともいわれている」（毎日新聞四国各支局監修『四国の古城』四国毎日広告社 1974）、などと記されている。築城の名手藤堂高虎が、今治築城にあたって参考にした城郭であったという。しかし、今治築城は慶長九年（1604）であり、実はゼーランジャ城より古く、こうした伝承が事実無根であることは明らかである。さらに今治城とゼーランジャ城との間には、構造的に類似する点は全く認められず、築城の名手藤堂高虎にまつわる伝説にすぎない。

プロビデンシャ城は台南市に位置しており、紅毛城と呼ばれている。

一方、イスパニアは1626年にサン・サルバドル城を、1629年にはサント・ドミンゴ城を築き、台湾北部を確保した。

(2)　清朝の台湾支配

17世紀初めに台湾南部をオランダが、北部をイスパニアが大航海の橋頭堡として確保したが、1642年にはオランダがイスパニアを追い払い、台湾支配に乗り出した。



写真2　プロビデンシャ城跡

中国大陸では1644年、明朝が滅亡し、満州族の清朝が起こっていた。鄭成功は明の遺民とともに1661年、オランダ支配の台湾に侵攻し、オランダを駆逐すると

ともに台湾を「反清復明」の基地とし、プロビデンシャ城をその本拠とした（写真２）。

清朝は1683年、ようやく鄭氏を攻め滅ぼし、台湾を領有化することができた。その結果、台湾を台湾府とし、福建省の一部に編入した。そして1725年には、台湾統治の拠点として台南に台湾府城が築城された。

台湾府城は一面が海岸に面し、他の三面の城壁を木柵として築かれた。その後、1791年に木柵が土塁に補強され、さらに1835年には外城の城門も増強され東郭と西郭が加えられた。ただし東郭は木柵であった。

現在、内郭の大南門、大東門と外城の克悦門が残り、内郭の小東門段と南門段、城壁が部分的に残されている（写真３、図２）。

1871年、清朝政府は大稲埕の南に台北府城を築城する。そして、1885年には台湾を省に格上げし、台北に省都が移り、台北府城が改築された。1894年の日清戦争により台湾は日本に割譲されると城門、城壁が取り払われ、現在では承恩門（北門）、重熙門（小南門）、麗正門（南門）、景福門（東門）などが高架道路の下にわずかに残されているにすぎない（写真４）。

さて、台湾省の下には県があり、それぞれの県に県城が置かれた。しかし、その大半は現在痕跡すら残さ



写真３　台湾府城跡大南門



写真４　台北府城跡北門



図２　台湾府城（参考文献８による）

れていない。唯一、台湾最南端の恒春城では城壁や城門が良好に残されている（図３）。



図３　鳳山県城（参考文献８による）

(3)　近代要塞の築城

1871年、琉球の漁民が台湾屏東県牡丹社に流れ着いた際、台湾原住民に虐殺されるという牡丹社事件がおこる。日本政府はこれに対し、1874年、台湾に出兵する。こうした外圧に清朝はいくつかの要塞を沿岸に築いた。そのひとつが台南市に所在する二鯤鯓砲台である。この二鯤鯓砲台は一般に、億載金城と呼ばれている。同治十三年（1874）、清朝政府は沈葆楨を欽差大臣に任命して台湾の海岸防備を計画させた。沈は安平



写真５　二鯤鯓砲台の稜堡

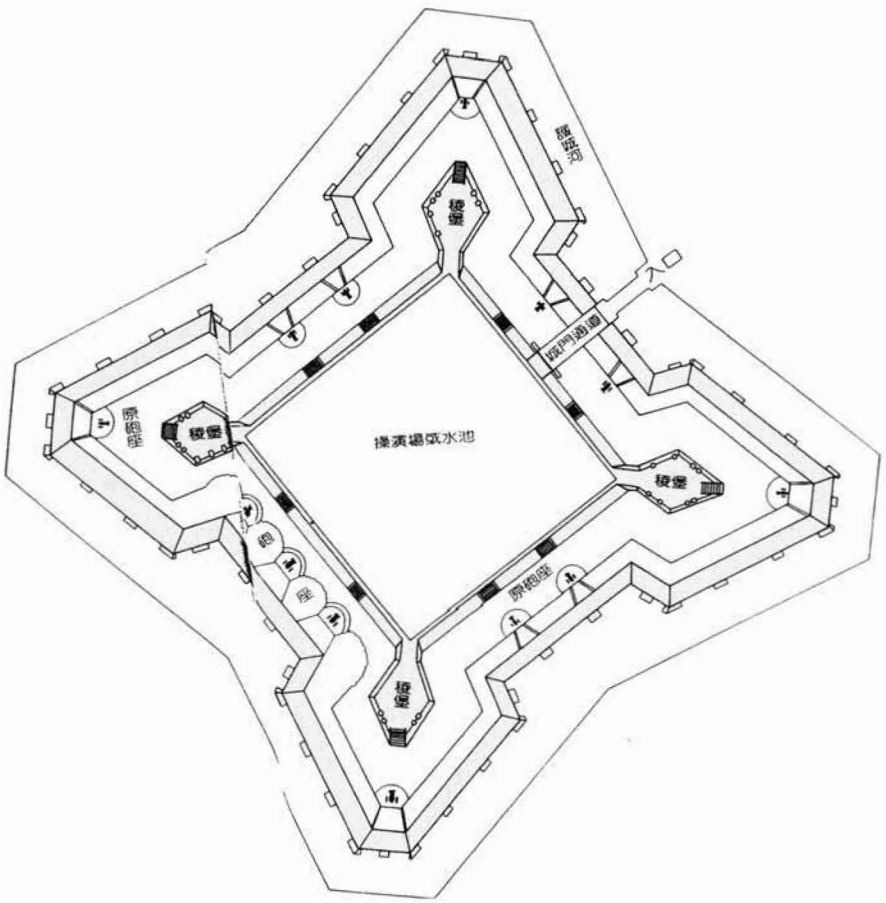


図４　二鯤鯓砲台平面図（参考文献16による）

に西洋式の砲台を建設することを奏上し、フランス人を招いて砲台の設計をさせる。これが二鯤鯓砲台である。その構造は、いわゆる星形稜堡で、四稜郭となっている（写真５、図４）。

3　囲壁・環濠集落の成立

(1)　東アジア・東南アジアの囲壁・環濠集落

さて、第２章ではアジアの城郭史の流れを台湾を事例に検討してみた。そこではヨーロッパの築城、中国の都城、近代の稜堡といったアジア城郭史の形成過程の縮図として捉えることができた。

次に本章では、城郭の始祖として位置付けられる囲壁・環濠集落について検討を加えてみたい。

日本列島では近年、弥生時代における環濠集落の検出例が飛躍的に増加しており、現在506箇所で確認されている（「日本人および日本文化の起源に関する学際的研究」考古学班が実施した研究、「東アジアの国家形成と都市化」の研究成果による）。

こうした集落は、たんに「倭国大乱」に乗じて形成されたにしては実数が多く、時代的にも幅があり、大乱に急きょ構築されたものとは考え難い。おそらくは、弥生社会の成立の一要素として、集落を防御する目的で囲壁・環濠集落が生成されたものと考えられる。

日本列島では山頂部を空濠によって囲郭するものと、平野部に環濠を巡らせるものと大きく２つに分けることができる。特に平野部では環濠が何重かに巡り、内郭に居住域、墓域、倉庫域などが集中して配されている。その平面形状は、山頂を巡るものも含めて楕円形が圧倒的に多い。

朝鮮半島においても日本列島とほぼ同様に、大半は環濠を巡らす形態が確認されているが、風納里遺跡では４～５世紀の段階で、２段築成の土築囲壁構造となり、その土壁は高さ５mにおよんでいる。

中国ではこうした囲壁集落が圧倒的に多い。内蒙古自治区の東八家遺跡、新店遺跡、西山根遺跡などでは囲壁が石積みとなっている。山東省では隅丸方形の土築囲壁が多く、周～商代に形成されていたことが判明している。陝西省では著名な半坡遺跡などで環濠が巡っている。このように中国大陸では環濠、土築囲壁、石積み囲壁が地域性をもって形成されている。

一方、東南アジアではタイのバーンチェンヒァン遺跡やシーテープ遺跡では土築の囲壁と環濠が巡る。特に後者では、元来存在した円形の環濠に拡張された方形の環濠が結合した形態を有し、環濠都市の発達過程を示すものとして注目できる。

ベトナムでは著名なコーロア遺跡を見ておきたい。ハノイの北郊に位置するコーロア遺跡は紀元３世紀中頃に甌貉国の安陽王が築城した螺城といわれている。方形の内城の外側に広大な二重の環濠を巡らせ、外濠はホアンザン川に直結しており、環濠の内側には土築の囲郭が三重に巡らされていた。内塁は全長1650m、高さ5m、幅6～30m、中塁は全長6500m、高さ最長10m、幅10～20m、外塁は全長8000m、高さ平均３～４m、幅12～20mを測る。ただし、現在の遺構が安陽王のものであるか否かについての確証はない（図５）。



図５　コーロア城平面図（参考文献14による）

ビルマではベイタノー遺跡、シュリクシェートラ遺跡、ハリン遺跡などピューの都城遺跡でレンガによる囲壁都市が発達し、いずれも内郭に方形の内城を構え、貯水池を伴っている。

(2)　囲壁・環濠集落の壁と濠

ところでこうした囲壁・環濠集落の壁や濠の形状に注目してみると、ただ単純に集落を巡るのではなく平面形において、凹凸を有していることに気がつく。半坡遺跡では外環濠の隅部が突出しているし、内環濠では通路部分で濠が鉤の手状に突出している。姜寨遺跡では環濠が凸状に突出した部分が検出されている。これらは明らかに防御施設として構築されたものであり、中国では後に雉城や、馬面と呼ばれる横矢掛の初原的施設と位置付けられ、半坡遺跡通路の鉤の手は通路への直進を遮断するものであり、日本の戦国期城郭の外枡形という虎口空間そのものである（図６）。

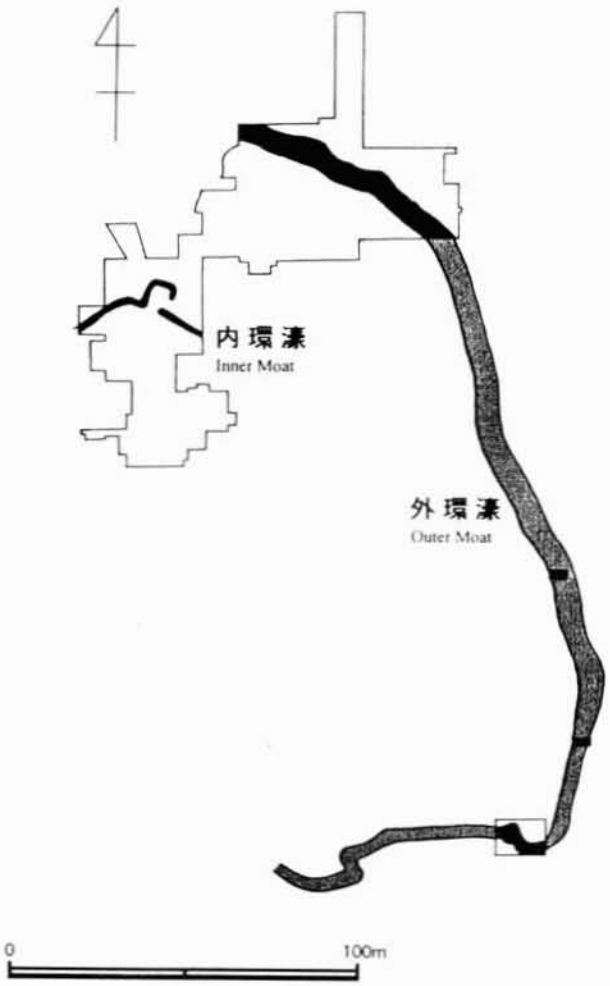


図6　半坡遺跡平面図（参考文献22による）

タイでは、タイ族最初の独立国家スコータイ王朝が12世紀に出現する。その王宮であるスコータイ遺跡では、東西1800m、南北1600mの城壁によって囲まれている。城壁の土塁と濠は3重となり、北にサーン・ルアン門、東にカンペーン・ハク門、南にナモ門、西にオー門が設けられていた。特に北、南、西の3門は三重の外枡形によって厳重に防御されていた（写真6、図7）。



写真6　スコータイ遺跡　サーン・ルアン門の土塁と水濠



図7　スコータイ遺跡平面図（参考文献15による）

日本列島では佐賀県吉野ヶ里遺跡で、弥生時代前期の環濠は集落を囲郭するだけであったものが、後期には南内郭、北内郭で環濠が凸状に突出しており、さらにその突出部分で楼閣と推定される掘立柱建物が検出されている。環濠は単に屈曲するのではなく、建物を構えて横矢が掛かるようになっている。佐賀県惣座遺跡でも弥生時代後期に外濠に凸部が構えられている。

本州では滋賀県二ノ畦・横枕遺跡で、やはり環濠の通路部が鉤の手状に屈曲した外枡形構造が検出されている（図8）。

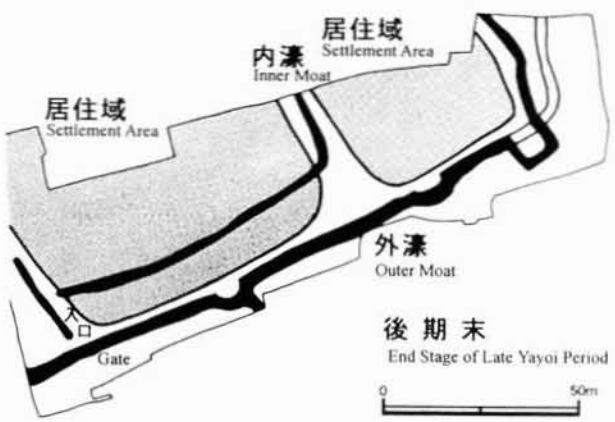


図8　惣座遺跡平面図（参考文献22による）

こうした事例に注視すると長崎県原ノ辻遺跡や弥生時代後期の愛知県朝日遺跡などで環濠の平面形が波状に連なっている形状となっているが、この波状の環濠

が横矢の可能性がある。

古墳時代になると横矢は顕著になる。大分県小迫辻原遺跡では、弥生時代後期末から古墳時代初頭に位置付けされる2号環濠で、4箇所にわたって凸状に突出する施設が設けられ、さらに1号環濠では通路部分が鉤の手状に突出している。群馬県三津寺遺跡では突出する施設とともに通路部分が内枡形状となり、古墳時代の豪族居館では明確な防御施設が伴うことが明らかとなった。

(3) 囲壁・環濠集落の立地

ところで、こうした囲壁・環濠集落には山に選地するものと平野に選地するものが存在する。中国では内蒙古自治区新店遺跡などで山頂部に石積み囲壁の存在するものが認められるが、概して山頂に選地するものは少ない。

朝鮮半島では、忠西南道松菊里遺跡や慶尚南道検丹里遺跡などで、丘陵上に環濠集落が検出されている。特に検丹里遺跡では、陸橋を伴う長径約119mの楕円形を呈する環濠が検出されている。さらにソウル特別市の夢村遺跡では丘陵頂部ではなく、裾部で丘陵全体を囲い込む土築囲壁が検出されている。

日本列島でも朝鮮半島と同様の状況が認められる。鳥取県尾高浅山遺跡や兵庫県大盛山遺跡などでは、丘陵頂部に楕円形の環濠が巡る。さらにこれら2遺跡の環濠は、みごとに山頂部を2重に巡らされている。

また、大阪府古曽部・芝谷遺跡では、山頂ではなく、丘陵を囲い込むように延々1000mにおよぶ環濠が取り巻いている。特に注目されるのは尾根筋を切断するように設けられた濠で、中世の堀切に類似する。

こうした先史時代の囲壁・環濠集落の立地が古代以後の城郭選地に強い影響を与えたと考えられる。中国の城壁都市、朝鮮半島の石の山城、日本列島の土の山城である。

(4) 平安時代の防御集落へ

これまで日本列島では、弥生時代の環濠集落はその後に継続せず、弥生時代の戦争にのみ出現したと考えられていた。しかし、近年の調査でこうした環濠は古墳時代の豪族居館の環濠に継続することが明らかになった。さらに最近では、東北地方で検出された防御集落も、直接か否かは別として、同一系譜の環濠集落として注目できるものである。

東北地方の防御集落は10世紀から11世紀に出現するもので、弥生時代の環濠集落と同様に、環濠の外周に土塁が築かれるという点は注目される。列島内では中世に数多くの城館が築かれるが、土塁はすべて堀の内側に築かれており、堀の外側に土塁が築かれるのは弥

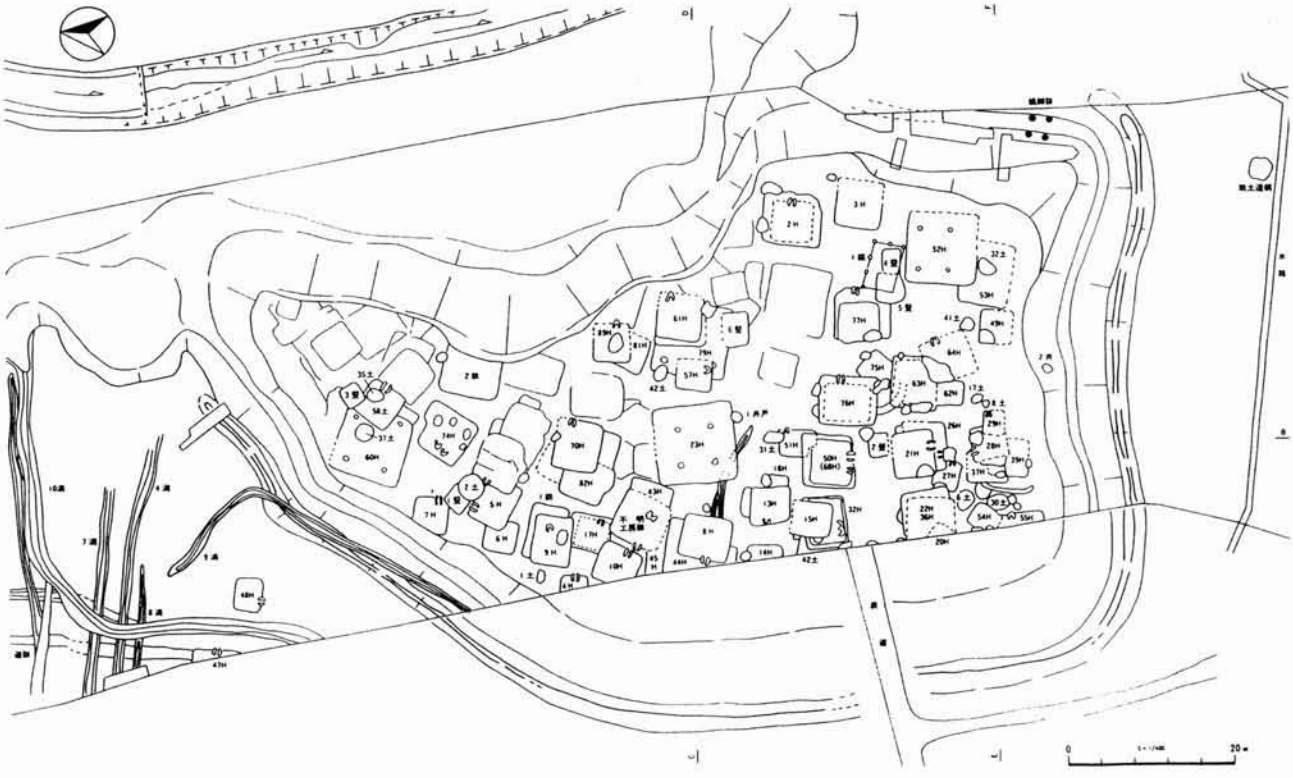


図9 高屋敷館遺跡遺構平面図（参考文献13による）

生時代の環濠集落と、東北地方の防御集落だけである。その典型例が青森県高屋敷館遺跡である。

高屋敷館遺跡は自然地形を利用して、北・西・南の三辺に濠を巡らせ、その外堤に土塁を巡らせていた。この濠と土塁の関係は、まさに弥生時代の環濠と同じである。なお、東辺は急崖となる。その規模は南北約80m、東西約57mを測る。濠は一部V字となるが、基本的には箱堀構造となる。環濠に囲まれた内側からは、多数の竪穴住居が検出されている。出土遺物より10世紀中頃から11世紀頃に防御集落が営まれたものと考えられる。集落内には鉄器の自給生産もおこなわれていたことが明らかとなっている。こうした環濠を伴う防御性集落を、津軽型防御性集落と呼んでいる（図９）。

一方、岩手県暮坪遺跡など比高４～50mの丘陵の先端に１～２条の堀切を設け、その内側に数棟の竪穴を配し、堀切外側に数10棟の竪穴を構えるタイプもある。これは上北型防御性集落と呼ばれている。

東北地方ではこうした津軽型、上北型が合わせて約20例知られ、それらは10世紀中頃から11世紀後半までの約100年間に収まるようである。史料の数少ない古代末の蝦夷世界において、部族が争乱を繰り返し、国家形成の揺籃期に出現した防御性集落と考えられよう。

4　都城と山城

(1)　朝鮮半島における山城

朝鮮半島においても、先史時代の囲壁・環濠集落の段階で、平野部と丘陵頂部という立地が認められることは前述した通りである。ただし夢村遺跡で土築囲壁が存在する他はすべて環濠である。

朝鮮半島で最も目につくもののひとつに山城が挙げられる。1924年の朝鮮総督府による調査で1,650箇所にのぼる山城の存在が報告されており、その実数は2,000箇所を超えることはまちがいない。

その初源的形態は逃げ城と考えられる。農民たちが侵略者からの攻撃、略奪を避けるために山に逃げ込んだもので、その規模は小さい。これが朝鮮半島の山城の第Ⅰ期として位置付けられる。第Ⅱ期として対外的な山城が出現する。新羅の場合、高句麗、百済、倭に対する山城が築かれる段階である。第Ⅲ期の山城としては、７世紀後半に朝鮮統一の動きと唐との戦争により全国的に山城が造り直される時期である。Ⅳ期の山城は新羅が三国を統一した段階で、各州の州都に山城が築かれる。そこには新羅王朝の権力誇示が存在する。

一方、邑城と呼ばれる村落を囲郭する形態は、朝鮮

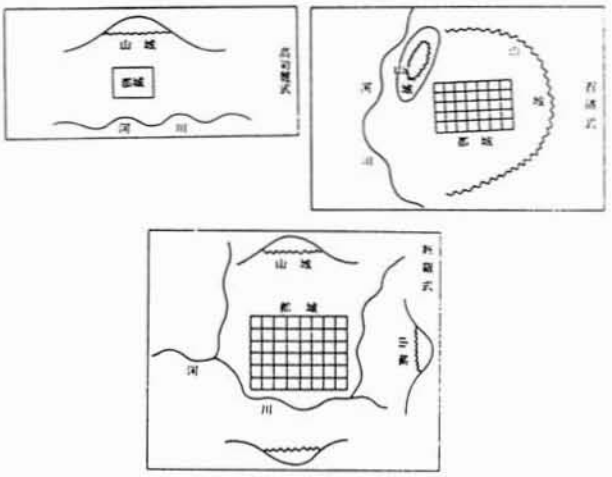


図10　三国時代の都城と山城（参考文献７による）

王朝期に新たに採用されたものである（図10）。

(2)　高句麗山城と都城

朝鮮半島でもとりわけ山城の分布が濃厚なのが高句麗である。このため高句麗山城と呼ばれる場合が多い。

その典型が、高句麗の都が置かれた国内城である。209年、公孫度に敗れた高句麗は都を遼寧省紇昇骨城より丸都（中国・吉林省集安）へ遷都する。丸都はその後、427年に平壌に移るまで高句麗の都となる。丸都は現在の集安で、鴨緑江中流域の狭い盆地に王宮である国内城がある。これこそ中国の城壁を巡らす都城そのもので、周囲2.7kmの城壁が巡り、６箇所の城門が備えられていた。

この地は南に鴨緑江、西を鶏児江（洞溝河）で囲われ、北側背後には山が迫る王宮の地として四神相応の地であった。

背後の山は四神の玄武に相当するものであり、中国では立地条件を満たす必要条件ではあるが、防御施設としては利用されなかった。ところが朝鮮半島では、山城がこうした都城背後の山には必ず構築された。

国内城は平城で、強大な外国軍が攻め寄せてきた場合、防御に不都合であったため、鶏児江上流約３kmの位置に尉那巌山城が築かれた。尉那巌山城は標高678mを最高峰とする稜線上に石塁を築き、中央から南に展開する谷筋を囲い込んでいる。こうした形態の山城を「甕城」と呼び、谷筋に展開する小盆地は水が確保できるとともに農業ができ、自給自足が可能となる。尉那巌山城では石塁が延々８kmにおよび、山麓の都城民の収容を目的とした築城であることが理解される（写真７、図11）。



写真7　丸都（現集安）の国内城跡



図11　丸都の国内城と山城（参考文献6による）

このように高句麗における王都の建設とは、山城の築城を含めたものであった。もちろんこうした王都と山城の関係は高句麗のみにとどまらず、初期の新羅や甘文小国・星州伽耶・金官加羅などの加羅諸国の王都にみられる「月城」と山城との関係にも認められる。

「月城」とは、中国の方形邑城に対して朝鮮半島の諸城は平面形が丸みのある形態を有しており、満月城、半月城などと呼ばれる。こうした「月城」は河川の彎曲部に築城されることから、方形ではなく円形もしくは半円形となったのである。

(3)　渤海の都城と山城

紀元698年に建国された渤海国は、現在の中国東北地方からロシア沿海州、朝鮮半島北部におよぶ広大な領域を有し、その国内に五京・十五府・六十二州・百数十県を設置していた。755年、文王が上京龍泉府に遷都し、以後渤海国の首都となった。上京龍泉府は東京城と呼ばれ、現在の中国黒龍江省寧安市東京城鎮の西方約3kmに位置している。

上京龍泉府の構造は外郭城、宮城、皇城から構成され、外郭城は東西4946m、南北3406mにおよび、南北辺に各3門と東西辺に各2門が設けられていた。宮城は外郭城北寄りの中央に配され、皇城はその南側に位置していた。この構造が、唐の長安城の配置に倣って設計されていることは明らかである(写真8、9)。



写真8　上京龍泉府外郭城跡の土塁



写真9　上京龍泉府宮城南大門跡

ところで上京龍泉府の遺構は、すべて土塁で囲まれており、一部は石貼りであるが土城遺跡と呼ばれている。渤海国の地方行政機関の関連の遺跡もまた土塁で囲まれた土城形式をとっていた。たとえばロシア沿海州の最南端に位置するクラスキーノ土城は『唐書』に記された「塩州」に関連する州治もしくは県治跡と考えられているが、いずれにせよ渤海国の地方行政機関の遺跡である。350m×300mのやや不整形な方形土城であるが、南・東・西に3門があり、すべて土塁を外方に鉤の手状に突出させて、みごとな外枡形を形成している。ただ、近年の発掘調査で城壁がかなり後世に改修されていることが判明しており、こうした外枡形

が渤海国時代のものであるか否かについては今後の検討が必要である（図12）。

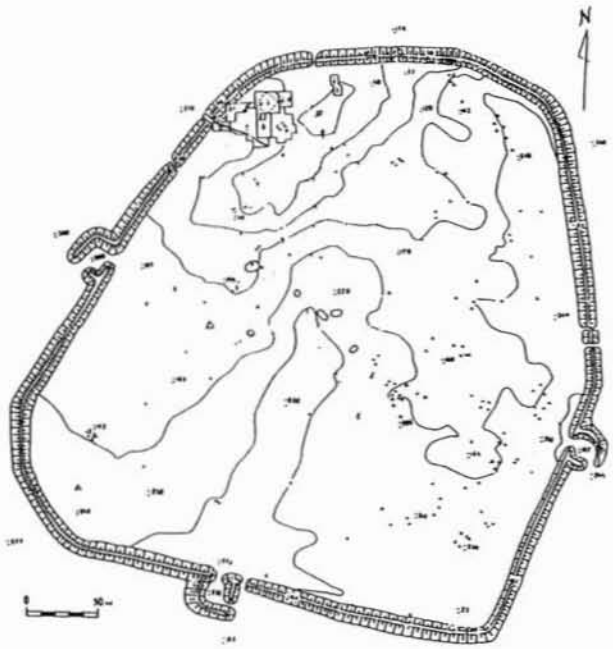


図12　クラスキーノ土城平面図（参考文献17による）

『中国文物地図集－吉林分冊－』では吉林省内の渤海遺跡は400を数え、その内訳は集落遺跡105、平地城42、山城18、墓地36、寺院7、その他11となる。これらは省内にまんべんなく分布するのではなく、幾つかの遺跡がまとまって１グループを構成していたようである。そしてこうしたグループ内には１～２の平地城や山城が存在していた。

特に渤海国の山城については、高句麗における山城と平地城のセットと同様に存在していたようである。渤海で発掘調査にかかわった田村晃一氏によると、ロシア沿海州のシニェリニコボ山城では、スイフン河に直接面した比高約100mの丘陵に選地し、周囲はすべて断崖となっている。頂部は東西約326m、南北約82mの楕円形で、川面とは反対側の急斜面に面して石垣が築かれている。石垣の中央に食い違いに入り組ませた門も確認されている。こうした門構造が、高句麗の城門構造と同一のものであることが指摘されており、渤海国の山城のあり方は、常に外権との緊張関係にあったことを如実に示している。

なお、朝鮮半島北部の渤海国内では、南海南京府の候補地である青海土城の周囲に龍田里山城、安谷山城、居山城などが配されており、南海府に通じる道を守る衛城の役割を果していた。龍田里山城は、絶壁部分には石垣を積まず、尾根上に長さ700m、高さ４～５mの石垣が積まれている。

また、土城は、南北360m、東西460mの土城で、版築された土塁は基底部幅11m、上部幅３m、高さ２mあり、城門、雉城、角楼が確認されている。小規模で、施釉瓦が出土していないことから州城とは考えられない。しかし、山城であり、二十四塊石が確認されていることから、県城クラスの所在地と考えられている。

(4)　日本の都城と山城

次に、日本における古代の都城について見ておきたい。ところで、王都を定めるにあたって四神相応の地という思想がある。四方を聖獣に守護させる四神相応の呪というものである。陰陽五行の理によると、北には山があり玄武が棲み、東には川があって青龍が棲む。西には大きな道があって白虎が、南には大きな池があって朱雀が棲む。そういう地理的環境が都の建設地に望ましいとされている。

さて、日本列島における古代国家建設に伴う都城制の最古例としては、天武天皇による藤原京であることは異論のないところであろう。天武天皇十三年（684）、「天皇、京師を巡行して宮室の地を定む」（『日本書紀』）とあるが、その後造営は一時中断され、持統天皇四年（690）に再開されている。この藤原京の立地は、北に耳成山、東に米川、西に竹内越、南に益田池が位置する四神相応の地となり、中国都城制の形態面だけではなく、理念あるいは思想自体の模倣も貫徹されていたことがわかる。ただし、中国都城の特徴である城壁、つまり羅城を巡らせていない。こうしたことから中国都城でもなく、朝鮮都城でもなく、日本のオリジナルとして中核部のみを受容したのである。以後列島における古代国家の都城では、最後まで城壁、羅城は形成されなかった。唯一、天武天皇八年（679）に「難波に羅城を築く」と『日本書紀』にあるが、その実態は不明である。日本における羅城は都城ではなく、中世城郭に出現する総構と呼ばれる城下を囲い込む外郭線にその事例を求めることができよう。都城では、あえていうならば豊臣秀吉による聚楽第築城に伴い天正十九年（1591）に築かれた御土居に、唯一、羅城を認めることができるのである。

ところで、藤原京以前の都城として天智天皇六年（667）に造営された大津宮は琵琶湖岸という、おおよそ古代の宮都としてはふさわしからぬ地に造営されている。しかし、その背後には山城が構えられていた記録が残されている。天武天皇元年（672）、「是の日に、

羽田公矢国、出雲臣狛会ひて共に三尾城を攻めて降しつ」(『日本書紀』) とあり、壬申の乱における大津京攻めに対して三尾城が攻め落とされたことが記されている。おそらく大津京の背後の山に築かれていた山城と考えられるが、残念ながら現状では三尾城の痕跡は確認されていない。古代山城、特に都城の背後に築かれた山城が見つからないということは、山城の存在自体を検討する必要もあろう。

なお、天智天皇六年は大津遷都とともに、「十一月、この月、倭国の高安の城、讃岐国の山田郡の屋島の城、対馬の金田の城を築く」(『日本書紀』) とあり、多くの山城が築かれた年でもあった。白村江の戦いに敗れた日本では唐、新羅軍に攻められる危険性から西国沿岸に防衛ラインとして山城を築いたのであった。

高安城とは難波京背後に築かれた山城である。ここもその存在が長く知られなかったが、近年、倉庫群の礎石が確認されている。同時に城域も検討されているが、石積みではなく、土塁で構築されていたようである。つまり、少なくとも難波京では背後に山城が築かれるものの、その外郭ラインは土造りであったようだ。三尾城の所在が不明なのも古代山城イコール石造りという概念によるものかもしれない。

こうした都城の山城とともに九州では、大宰府の背後に巨大な大野城が築かれ、対馬や瀬戸内に山城網が構築される。日本列島では総石垣となる山城は極めて少なく、大半が土と石を併用している。そうした古代山城で対馬に築かれた金田城は特異で、囲郭する城壁がすべて石垣となり、その延長は2.86kmにおよぶ。朝鮮半島に対する最前線としてこうした石垣が築かれたのである (写真10)。



写真10　金田城跡石垣

ところで、古代都城制が完成する平城京、長岡京、平安京では、背後の山に山城が築かれていない。対朝鮮半島との緊張関係が解消されれば、山城は必要なくなったのである。朝鮮半島では、平時においても常に山城を築いて緊急時の対策をとっていたことに対して、日本列島のそれは危機管理が意識されていない都城制であったと位置付けできよう。

なお、平安京では北の玄武が船岡山、東の青龍が鴨川、南の朱雀が巨椋池、西の白虎が山陰・山陽道、そして、鬼の入る鬼門にあたる比叡山に延暦寺を置いて鬼を封じ、北はさらに鞍馬で封じていたという。

桓武天皇は長岡京に遷都し、強力な専制政治を目指したが、藤原種継事件などにより頓挫してしまう。しかし、この新たに建設された長岡京では、中国都城を真似ることによって人心を刷新し、再度の専制政治を目指したことは明らかである。その最たるものが天壇である。

延暦四年 (785)、桓武天皇は河内交野郡柏原の野に郊祀壇を築いて、日本のアキツカミではなく中国の天神を祭り、祈祷をおこなった。これが枚方市の片鉾にあったといわれる交野の郊祀壇である。延暦六年には同じ場所で北辰を祭ったが、これは中国皇帝が冬至に都の南に天壇を祭る例に倣ったものである。中国では都城制が単に宮と京だけではなく、天壇や地壇を祀ることなど、様々な祭祀的要素をとり入れることにより皇帝政治がおこなわれていたのである。桓武天皇が天壇を祀ったのもこうしたことからであり、強力な専制政治の範を中国に倣ったものであった。

(5)　日本の山城と居館の構成

古代国家レベルで築かれた都城と山城ではなく、列島の中世は在地レベルで山城が築かれる時代である。中世城館跡は全国に3～4万箇所存在するといわれ、中世はまさに大築城時代であった。中世における山城の出現は、鎌倉幕府の正規軍である騎兵を寄せ付けないために、急峻な山に立て籠もったのが発端であった。室町時代には一旦、平野部に居館が構えられたが、応仁の乱以後の恒常的な戦いのなかで、平地居館では対処できないため、山城が構築されるようになった。南北朝時代の山城は急峻な山岳地形を活かした自然の要害であったが、応仁の乱以後の山城では曲輪、土塁、堀切などといった防御施設が人工的に作られたのである。

ただし、こうした山城はあくまでも軍事的な詰城であり、普段は山麓に居館を構え、そこで生活をするという、二元的構造であった。

5　変容する都城

(1)　中国の都城—中華世界の形成—

1980年代、日本の古代都城の研究は中国、朝鮮半島の都城との比較をさかんにおこなった。その結果、日本の都城がアジアの都城の東端に形成されたものとして位置付けられた。

ここでは、アジアにおける古代都城の発生の地である中国の都城について概観しておきたい。中国における囲壁・環濠集落は先にも触れたように仰韶期の代表遺跡である半坡遺跡で環濠が確認されており、その最下層は3955±105B.Cとされている。さらに竜山期後期には城壁が出現する。河南省登封県告城鎮の遺跡は、ほぼ方形の同規模の東西２城から構成されている。西城は一辺90m級で、城壁の基底部基礎槽が検出されている。こうした城壁都市が後の都城へと発展していくわけである。

さて、それでは中国都城の祖はどこに求められるのであろうか。『周礼』「考工記匠人条」に「営国」、つまり国都造営の条項が次のように記されている。「方九里、旁三門。国中九経九緯、経深九軌。左祖右社。南朝後市、市朝一夫。」つまり、国都は一辺九里の方形で、各辺に三門が開く。城内には縦と横に九条ずつの街路を造り、その道幅は車の軌の九倍とする。王宮の左（東）に宗廟を、右（西）に社稷を配し、前方に朝廷、後方に市場を置く。市場と朝廷は一夫平方とするということであり、これが後世の中国における都城のモデルとされた。中国の歴代皇帝が周をモデルとして国都を建設していくが、周辺諸国も同様に、古代国家建設に向けて中国に朝貢するとともに、都城をも模倣することによって中華世界の序列に位置づけされたのである。

(2)　琉球の都城

琉球王国は14世紀から15世紀前半にかけて、北山、中山、南山の三山に鼎立し、北山王朝が今帰仁城を、中山王朝が浦添城を、南山王朝が島尻大里城をそれぞれ本拠としていた。1406年、尚巴志は浦添城を攻め落とし、首里城に本拠を移した。さらに1416年には今帰仁城を攻め落とし、1429年には島尻大里城を攻め落とし、琉球を統一した。

こうした琉球の城は「グスク」と呼ばれ、城であるとともに王府でもあった。さらには聖域でもあり、集落でもあり、その性格の多様性は日本列島の「城」概念には収まらない。

ところで、グスクの平面形は中華世界に定着した方形区画とはならず、グスク特有のカーブを描く不定形平面となる。さらに第一尚氏、第二尚氏の琉球王府となった首里城も不定形の平面形態を有するグスクである。これらは琉球石灰岩を積んだ城壁を有する。日本列島内の戦国～近世城郭が切岸面に石を積む石垣となるのに対し、琉球では城壁となっている。こうした琉球での石積み技術はすでに14世紀には出現している。

そして、城壁内側の空間には、正殿とその両脇に脇殿が配されている。外壁は琉球独特のグスクとなるが、その内側には古代律令制を踏襲する「コ」の字配置の建物構造があり、ここに中華的都城の影響を見出すことができる。正殿と脇殿に囲まれた空間は儀礼の場であった。琉球王府である首里城では奉神門内部に広場が設けられ、正面に正殿、両脇に廊下で繋がる南風殿と北殿が配置される典型的な「コ」の字配置となる。広場は朝議の場であり、まさしく中国都城の影響を受けていることがわかる。中城城でも一の郭で端部に舎殿が検出されており、その前面が広い空間となっているし、座喜味城や今帰仁城でも同様である。

また、勝連城では二の郭に殿舎を配している。これらは単なる住居ではなく、石積基壇を持つ立派なもので、私的な建物ではなく政を司る殿舎であったことは明らかである。さらに前面には何も設けられない空間が存在するが、これは朝議の場であったと考えられる。つまりグスクは城であるが、その一郭は中華世界の一員たる都城の中核部を忠実に模した小さな中華世界空間だったのである。

なお、グスクの周囲に巡らされた城壁は、方形にはならないと前述したが、その曲線的な構造は琉球独特のものである。ただ、よく観察すると直角に屈曲はしないものの今帰仁城、座喜味城、中城城、首里城、具志川城（久米島）などでは、門に対して横矢が効いており、曲線は軍事的なものであることも示唆している。さらに糸数城や具志川城（糸満市）の城壁には、凸部が認められ、中国の城壁に見られる馬面の影響を受けていることがわかる（写真11、図13）。

日本列島の都城では羅城が出現しなかったが、琉球では城という軍事的施設のなかに律令国家の象徴である都城制が取り入れられた。このため外郭の城壁は軍事的に横矢や馬面、あるいは中城城や安慶名城に認められる狭間などが導入されていくわけである。

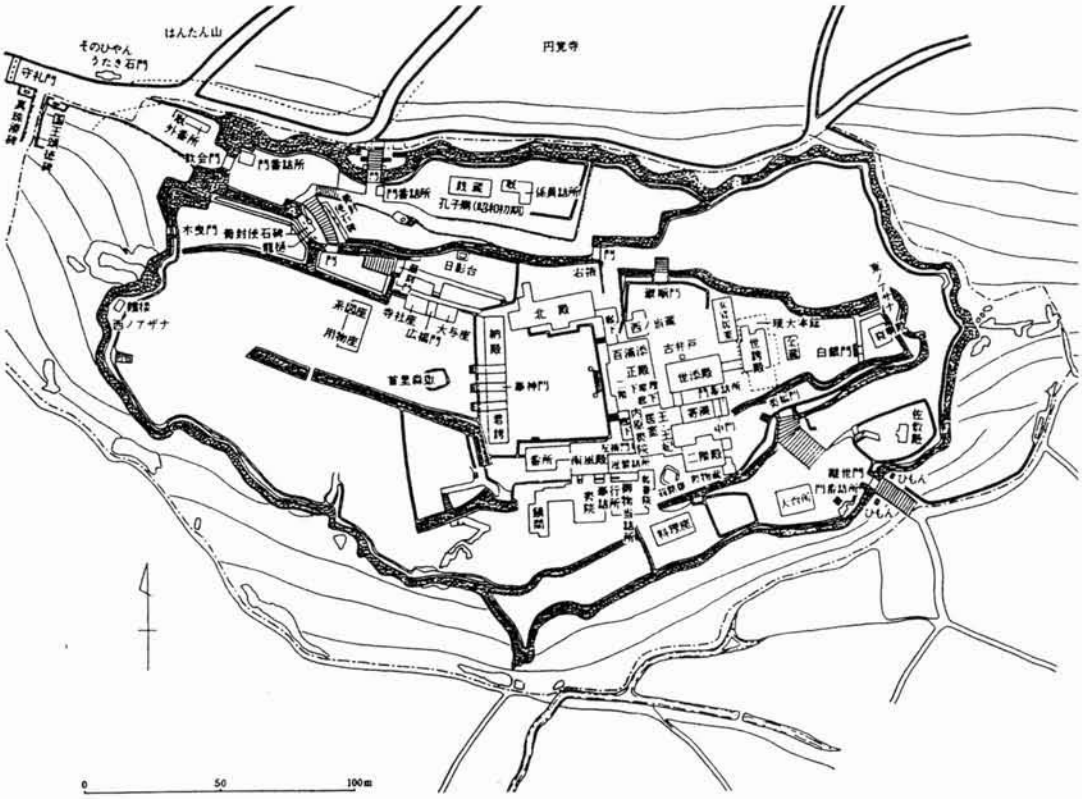


図13　首里城建物配置図（参考文献２による）



写真11　糸数城跡南のアザナ

(3)　宇宙観の具現化―アンコール・トム―

中国皇帝の象徴は龍である。皇帝の龍には爪が５本存在する。日本列島の古代都城で龍文様がどれほど使われていたかは不詳であるが、琉球では首里城のいたるところに龍文様が用いられている。

さらにベトナムでも、阮王朝の都城である順化（フエ）城のいたるところに龍文様が用いられている。

ところがカンボジアのアンコール王朝の都アンコール・トムでは、龍は一切認められない。代って登場するのがナーガ、つまり蛇である。アンコールの王は、夜ごと女性の姿をした九つ頭の蛇精の神と契りを結んで王国の繁栄を願ったのである。

古代カンボジアの真臘は、８世紀に水真臘と陸真臘に分裂するが、802年ジャヤバルマン２世によって統一され、889年に即位したヤショバルマン１世が現在のアンコールを首都と定め、その後550年間にわたってアンコールでは王都と寺院が建設され続けた。アンコール・トムとは「大きな町」という意味である。この地に都を定めたヤショバルマン１世段階では、現在のプノン・バケンを中心とした周囲約４kmの環濠都市であった。現在のアンコール・トムは12世紀末にジャヤバルマン７世の建設したもので、第４次のものである。この第４次の都城はそれまでの環濠都市ではなく、王城にはじめて石造りの城壁が出現したのである。

この第４次のアンコール・トムの姿を記した史料が残されている。元貞元年（1295）、元朝から派遣された使節に随行して真臘に入国した周達観が記した『真臘風土記』がそれである。

「州城は周囲二十里ばかりである。五つの門があり、門は各々二重である。ただ東側のみは二つの門を開き、［その］ほかの側はみな一つの門である。城の外側には大きい橋がある。橋の両傍に各々石神五十四体があり、石将軍の形状のようで、甚だ大きくてたけだけしい。五つの門はみなたいがい似ている。（略）城［壁］

はみな石をかさねてこれをつくり、高さは二丈ばかりである。[そのかさねた] 石はきっちり積み上げられていて堅固で、かつ草が生い茂らない。また女墻がない。(略) [城壁の] 内側は坂のようで厚さは十余丈ばかりである。坂 [状] の上にみな大きい門があり、夜に閉じ朝に開く」([ ] は訳者による)。

と記されている。中国の城壁都市を見なれていた周にとって、アンコール・トムはまさに城壁を巡らせた都市そのものに写ったことであろう。

さて、そのアンコール・トムであるが、一辺3kmのほぼ正方形プランで、周囲には幅約100mの濠が巡り、城壁は高さ約8mにおよんでいる。その中心にバイヨン寺院が配され、これを中心に城内は4分割されている。都城の中心が宮ではなく、寺院である点は中華世界の都城と大きく異なる。門は5箇所に設けられ、北面、西面、南面では辺の中央に門が配されており、門を進むとバイヨン寺院に至る構造となる。

王宮は4分割されたうちの北西に位置し、東面しており、東壁の門が正面に位置している。つまり東辺のみ2門設けられているのである。王宮正面の門は勝利の門と呼ばれ、遠征に勝利し、凱旋してきた軍隊が入城するために築かれた門であった。

ところで、王宮をはじめアンコールの諸寺院はすべて東面を正面としており、中華世界における「天子南面」と大きく異なる。『旧唐書』「真臘伝」に、「其の[習] 俗は東に向かって戸を開く。東を以て上と為す」とあり、東面が正面であったことがわかる。南面が正面であった中華世界にとって奇異に映ったためにわざわざ書き記されたのであろう。なお、アンコール・ワットは西面しており、その設計に特殊性が感じられる。

アンコール・トムを理解するためには仏教、ヒンズー教の宇宙観抜きにはできない。その基本形態は宇宙観を具現化したものである。中心に位置するバイヨン寺院はヒマラヤであり、仏教でいう須弥山であった。城壁は宇宙を囲む山脈であり、濠は宇宙を囲む大海であった。また、濠に架けられた土橋は虹を表現しており、俗 (城外) から聖 (城内) への掛け橋としていた。壁面に刻まれた乳海攪拌のレリーフそのものを表現した都市であった。

基本プランは方形で、城壁と濠によって囲まれた外観は中国の都城と同じであり、周達観が「州城」と記したことはうなずける。しかし、中華世界の都城の城壁や濠が防御的な施設であるのに対して、アンコール・トムの城壁は宇宙を囲む山脈であり、濠は宇宙を囲む大海であり、まったく別の要素であったことがわかる。

この点について周達観は興味深い観察を残している。『真臘風土記』に記された、「また女墻がない」という文言である。都城の城壁として見た周にとって、中国

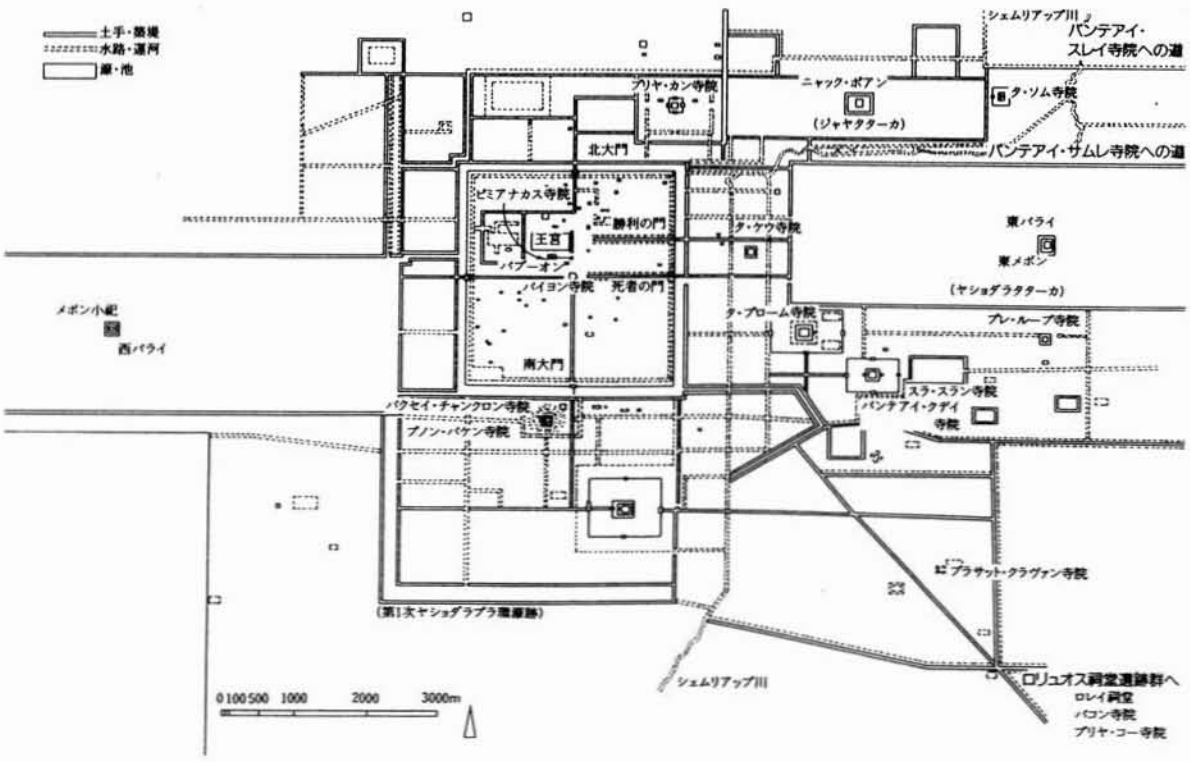


図14　13世紀のアンコール遺跡配置図 (参考文献9による)

の城壁に当然存在する女墻が存在しない城壁は奇異なものに映ったに違いない。女墻の存在しない城壁は軍事的な防御施設でないことを端的に示すものである。同様に幅100mの濠も防御施設として掘削されたものでないことは首肯されよう。こうした宇宙観に基づいて築かれた都城であるから中華世界の都城とは大きく異なっている（写真12、図14）。



写真12　アンコール・トムの城壁

6　古代都城の近代的変容

(1)　稜堡式築城の導入

稜堡といえば、五稜郭のような星形の城郭が思い浮かぶのではないだろうか。この稜堡式築城とは15世紀末から19世紀中頃にかけてヨーロッパで発達した築城法で、射程の死角をなくすために稜堡を突出させているのが特徴である。

それまでの中世ヨーロッパの城郭は都市を囲郭する垂直の城壁が主流を占めていた。しかし、1453年にオスマントルコの攻撃により、ビザンチン帝国の首都コンスタンチノープルが陥落した。このときオスマントルコは大砲、地雷という新型兵器による城壁攻撃をおこなったが、垂直の城壁はこうした新型兵器の前になすすべもなく陥落したのであった。

こうしたオスマントルコの勢力拡大は、ヨーロッパ諸国を震撼させ、築城の転換が求められた。聖ヨハネ騎士団の本拠地ロードス島は、1552年、オスマントルコの侵攻を受けて陥落する。ここでは稜堡こそ有さないものの、城壁を低く厚くするという改良が加えられていた。聖ヨハネ騎士団は、1530年にその本拠をマルタ島に移し、稜堡式の築城を開始した。

このように稜堡式築城はヨーロッパにおいてオスマントルコの脅威から誕生した築城技術であった。ところが17世紀になると三十年戦争のような大規模な国際戦争が激化し、王権の強化が進行する。フランスではルイ14世が登場し、現在のフランス東西国境を確定した。この国境地帯を防御する目的で築城されたのが星形の稜堡であり、発案したのがルイ14世の家臣ボーバンであった。以後19世紀までの200年間にわたり、星形稜堡はヨーロッパの要塞築城の主流を占めることとなった。

(2)　東南アジアにおける稜堡式城郭の出現

稜堡式築城は、ヨーロッパの世界進出とともに世界各地で築かれることとなる。それは帝国主義の尖兵として占領地や植民地にも数多く築かれることとなる。1584年、フィリピンの首都マニラでは市を取り囲む柵を石の城壁に改修した。そこはイントラムロスと呼ばれ、東洋で最も要塞化された都市となった（図15）。

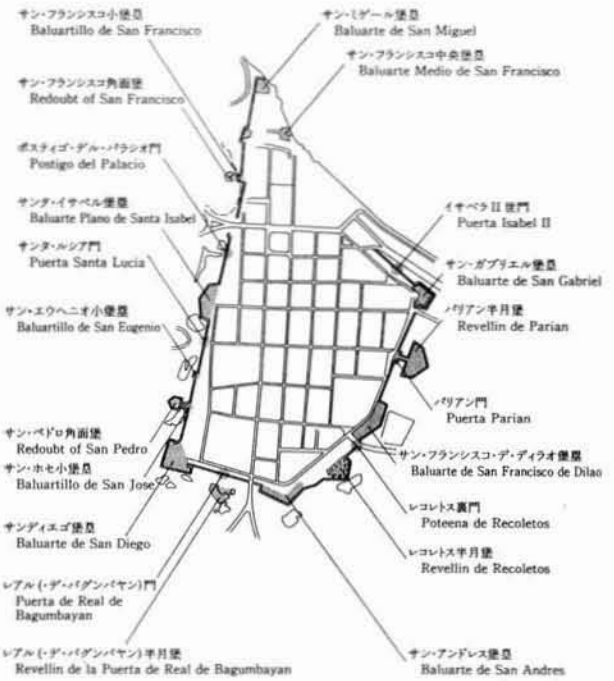


図15　マニラのイントラムロス（参考文献11による）

一方、オランダはジャワ島のスンダクラパに上陸し、新たに城壁と町の建設に取りかかった。1618年、新都市はバタビアと命名された。このバタビアはまったくのアムステルダムの模倣都市であった。チリウィーン川の河口には4つの稜堡を持つ星形稜堡ジャカルタ砦が、居留地には稜堡が築かれ、チリウィーン川沿いにはこの居留地を守るためジャカルタ要塞が構えられていた。1629年の地図では、ジャカルタ砦が巨大な稜堡バタビア城に一部を残し飲み込まれてしまった様子が描かれており、要塞が強化されたことが読み取れる。

1511年、ポルトガルは喜望峰経由の航路によりマラッ

カにやってくるが、その繁栄を知って攻略し、植民地化に成功する。従来あったマラッカ王国の城塞を破壊し、新たな城塞を建設した。絵図に描かれた城塞は五角形の平面をしており、海側に突出した稜堡を有していた。1641年、オランダはマラッカを攻撃し、ついにその植民地とすることに成功した。破壊された城塞は増強され、パンコ島とセント・ジョンの丘に新たに要塞が建設された。

台湾については2章で述べたように、イスパニアとオランダによる稜堡築城がおこなわれたのである。

このように16〜17世紀において東南アジアは、ヨーロッパ列強により植民地化されるわけであるが、その最初の段階で河口部で都市が建設された。そして、その一画に必ず稜堡が構築され、都市や港湾を防御していたのである。

(3) ベトナムの稜堡式築城

次にベトナムにおける稜堡式築城の導入経過について見ておきたい。

サイゴン（現ホーチミン市、以下同じ）は、フランスのインドシナ総督府を中心に放射状に街路が整えられた街である。このサイゴンが城塞都市であったことはあまり知られていない。1698年、コーチシナを併呑した黎朝ベトナムは、その統治のために嘉定府を設置する。さらに、順化（フエ）に都を定めた阮王朝は嘉定省を設け、その省城としてサイゴンに嘉定省城を築いた。

城内は方形に区画されており、羅城部分が稜堡となっている。阮王朝は熱烈な中国文化の信奉者であり、省都の構造には中国の都城制度を採用し、城壁にはフランスの稜堡を採用したものであった。さらにサイゴンには稜堡式の嘉定省城の北方、サイゴン川へ西からそそぐ支流沿いに城壁が巡らされていた。当時の地図では馬面の突出する城壁で、明らかに中国の城塞と同一のものである（図16、17）。

ところで19世紀のサイゴンの地図では、嘉定省城の稜堡の北東隅に重なるように新たに四稜郭となる稜堡の築かれていることが知られる。1858年、ナポレオン

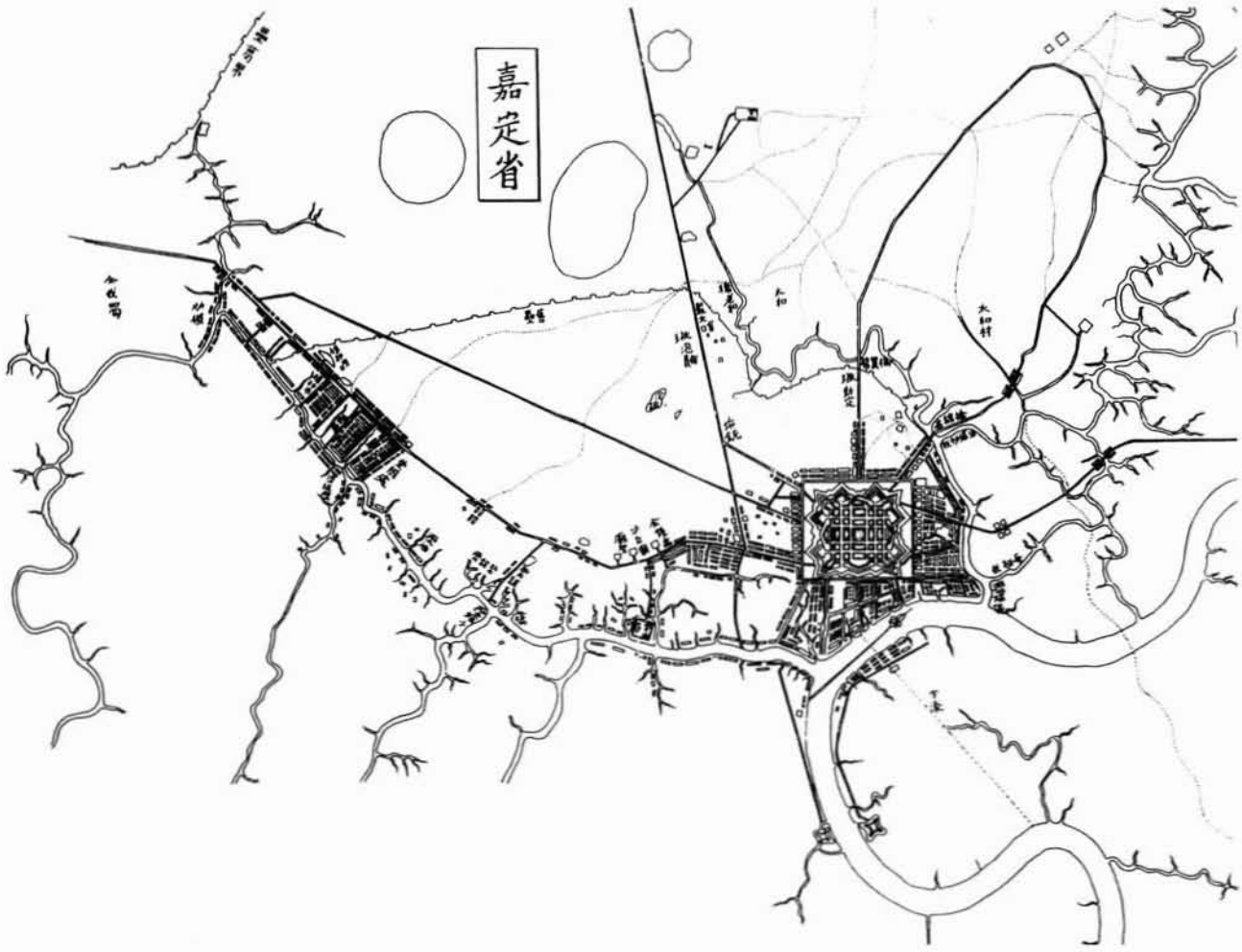


図16 嘉定省城と外郭城壁（参考文献12による）

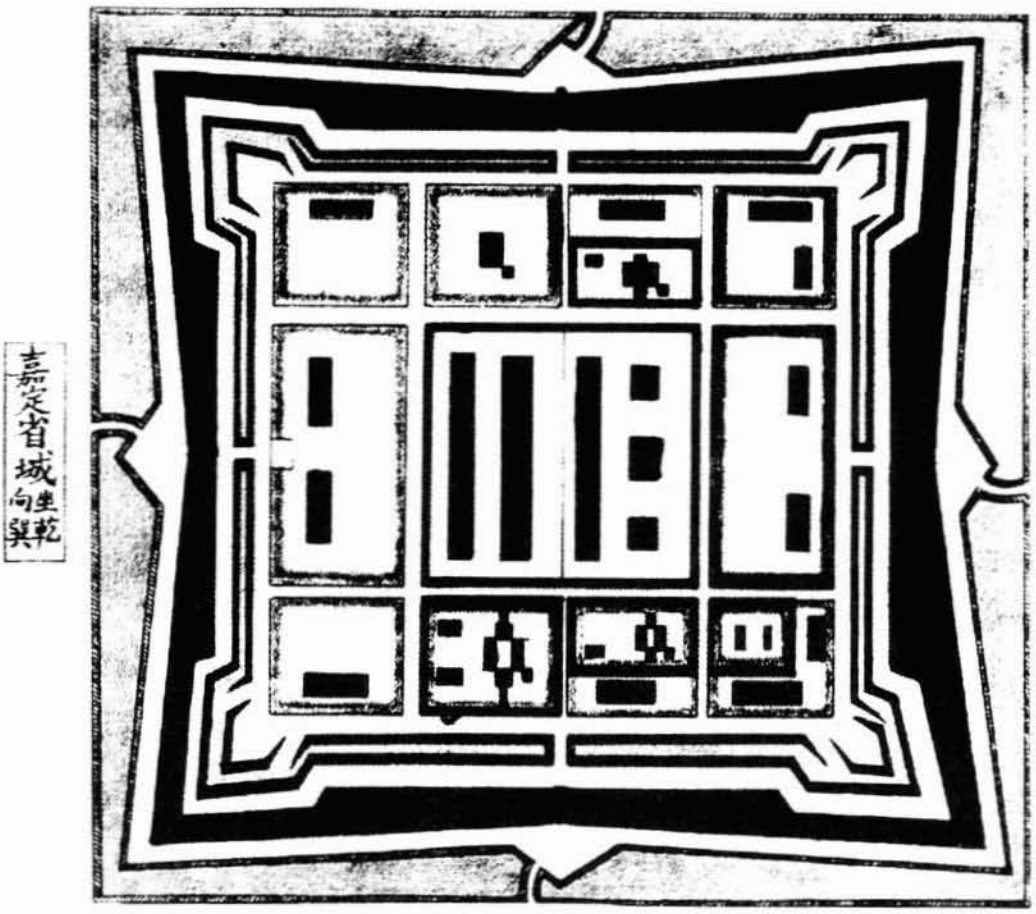


図17　嘉定省城平面図（参考文献12による）

3世はスペインと連合してベトナムへの侵攻を開始し、翌年にはサイゴンを陥落させこれを拠点とした。フランスはこの段階で嘉定省城を廃し、新たに四稜郭を築いたものと考えられる。

一方、阮王朝の都となった順化も稜堡式築城による都城が築かれている。阮王朝は広南阮氏最後の王、阮福淳（定王）の甥、阮福映がフランス人宣教師や傭兵の援助を受け西山党と戦い、1802年にベトナムを統一した王朝で13代143年間続いた。その首都順化に王宮が整えられたのは、嘉隆（ザーロン）、明命（ミンマン）皇帝の時代である。フォン川の北岸に内堀を方形に巡らせた王宮は中華世界の一員の王宮にふさわしく、清朝の紫禁城をまねて築かれている。

午門は王宮の正門で、石塁上に二層楼が設けられている。門口は3つあり、これも紫禁城の午門と同じ形式である。午門の正面に太和殿が配され、正面三段の石段下左右には正一品以下の位階を示す石柱が並べられており、紫禁城をはじめ朝鮮王朝の景福宮勤正殿前の石畳などと全く同じである。平城宮跡からも石柱が出土しており、その大極殿前庭にも同様の施設が存在していた。まさに中華世界の東限に日本が位置し、南限にベトナムが位置していることを端的に示している。

さて、順化城の南にはフォン川が流れており、順化市街はさらにこのフォン川から掘削された3km四方の濠によって囲まれている。この外濠のすぐ内側に24の稜堡を突出させた水堀と城壁が築かれている。また、この稜堡の北東隅には鎮平台と呼ばれる独立した稜堡式の要塞が築かれている。このような稜堡に守られた内側には、阮王朝の行政機関が方形区画内に林立していた。

阮王朝が忠実に清朝の制度をまね、皇帝の居所である王宮もそれにならったわけであるが、一方でその王宮を守る外城壁にはフランスの稜堡を導入したのであった。つまり阮王朝の都城である順化城や嘉定省城は中国古代からの都城制を引き継ぎながら、外壁に稜堡を採用した点は異彩を放っている。東アジアの伝統的都市要素と、ヨーロッパの近世的都市要素が同居したわけである。さらにベトナムにおける稜堡の築城は他のアジア諸国における稜堡築城がヨーロッパ諸国が植民地支配政策の第一段階として行った都市建設ではなく、ベトナム王朝が自ら築城したものであった（写真13、図18）。



写真13　フエ城跡の稜堡と水濠

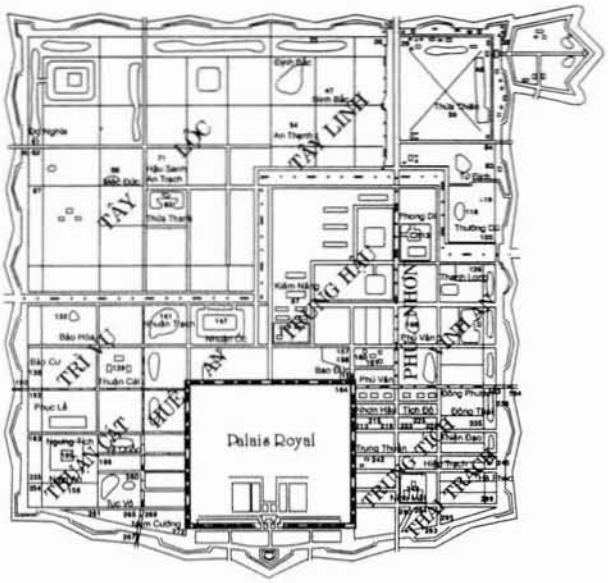


図18　順化城平面図（参考文献10による）

(4)　日本の稜堡式築城

さて、日本列島における稜堡の導入は、嘉永六年（1853）の黒船の来航による沿岸警備の目的で構築された砲台、台場にまず採用された。江戸湾防備に築かれた品川台場は、矩形を基本とする平面構造であり稜堡を意識したものである。さらに典型的な星型稜堡としては、舞子砲台や西宮砲台、天保山台場で導入されている。

しかし、なんと言っても五稜郭の構築が稜堡式築城の典型であろう。日米和親条約により箱館が開港されると箱館代官所が設置されることとなる。これがいわゆる五稜郭で、安政四年（1857）に着工され、慶応二年（1866）に完成した。五角形の星形稜堡で、さらに稜堡間の凹部に半月堡という独立した稜堡を５箇所設置する計画であったが、実際には１箇所に設けられたにすぎなかった。

築城の縄張りには武田斐三郎成章があたった。武田は文政十年（1827）生まれ、伊予大洲出身で緒方洪庵らに蘭学を学んだ。安政元年（1854）、蝦夷地御用となり、同三年箱館奉行支配諸術調所教授として五稜郭、弁天岬台場、古武井溶鉱炉の建設を手がけている。五稜郭については安政二年（1855）、仏船将官から西洋流土塁の指導を得て設計した（図19）。

五稜郭の北方丘陵部に、背後を防御する目的で明治二年（1869）に旧幕府軍によって築かれたのが四稜郭である。急造の臨時築城であり、石垣は用いられず土造りで、四隅の稜堡に大砲が据えられた。1箇所設けられた虎口は伝統的な内枡形となる。

また、五稜郭といえば信州龍岡の五稜郭も日本における稜堡式城郭を語る上で重要である。龍岡五稜郭は正式には田野口陣屋と称されるもので、文久二年（1862）に三河奥殿藩がその居所を信濃田野口に移し、築いた稜堡である。藩主松平乗謨は幕府の陸軍奉行を勤め、フランス式の稜堡を自身の藩邸に採用したのであった。半月堡はないものの函館五稜郭と同一プランが採用されている。

ところで、日本で最古の稜堡は五稜郭ではない。安政二年（1855）、幕府は蝦夷地を直轄地とし、仙台、秋田、南部、津軽、松前５藩に命じて警備にあたらせた。このとき松前藩が築いた陣屋が戸切地陣屋で、稜堡式築城であった。築城にあたって縄張りを設計したのは佐久間象山に蘭学、砲術、築城学を学んだ松前藩の藤原康蔵であった。この戸切地陣屋は、四稜形の陣屋と南東部に突出した砲台部から構成されており、２箇所の虎口内には馬隠しの一文字土塁が設けられていた。

一方、日本最後の稜堡は明治二年（1869）に築かれた松尾城であろう。明治元年（1868）、徳川家は明治政府に所領を返上し、新たに駿河・遠江に領地が与えられる。この処置により、駿遠の諸大名たちは上総・安房へ国替えとなり、新封地で築城を開始した。掛川藩は明治元年（1868）、上総へ移封となり、翌二年（1869）に松尾へ移り築城を開始する。その形状は他の稜堡式城郭のように規格化されておらず、いびつである。五角形の星形稜堡を中央で半切した形ともいわれるが、おそらく自然地形に制約を受けた結果であろうと思われる。残された設計図では虎口に対して合横矢が掛かり、内枡形を構えていたことがわかる。なお、維新直後の築城であり、石垣は用いられず、しかも完成したのは御住居地のみで明治四年（1871）には廃藩となり、廃城となった。

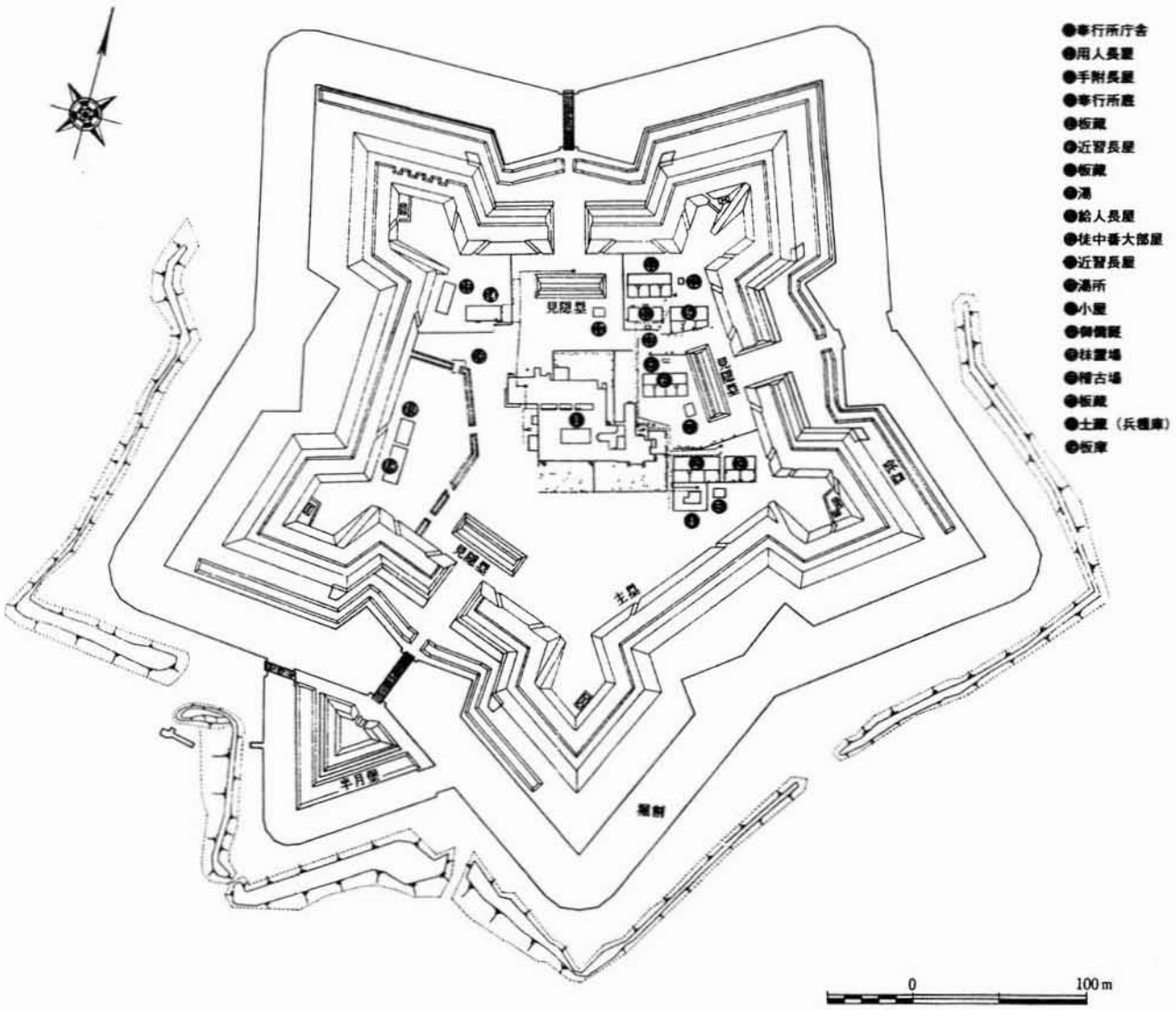


図19　五稜郭内遺構配置図（参考文献18による）

このように日本の稜堡式築城は幕末の海防とともに導入されたが、その設計に日本人があたっていることは注目される。他の東南アジア諸地域ではヨーロッパ人が植民地支配の足懸りとして築いている。ベトナムでは阮王朝が築いてはいるが、その指導にフランス人があたっていることはまちがいない。日本の稜堡は自国によって設計され、築城した例として評価されるものである。

(5)　李氏朝鮮の海防

17～19世紀にかけて李氏朝鮮は江華郡江華島において数多くの砲台を築いている。これらは12鎮堡、54墩台、8砲台と称されている。特に江華島東海岸は長城とも呼ぶべき長大な城壁を築いていた。

ところでこうした砲台には稜堡が全く認められない。李氏朝鮮独特の築城政策として注目される。その形態は円形、半円形、方形で、切石によって城壁が構築されており、砲眼が開かれている。なかには女墻の設けられたものも存在する（図20）。

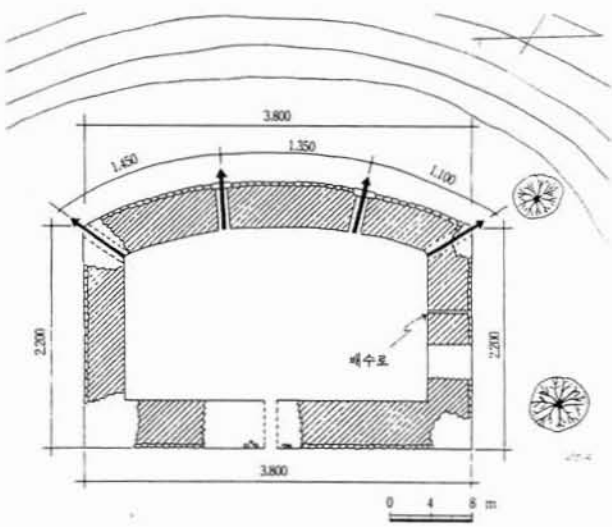


図20　江華島砲台平面図（参考文献19による）

おそらく中国の冊封体制下にあり、鎖国に近い国策を続けてきた李氏朝鮮王朝のとった海防策が、このような旧態然とした砲台を造らせ、ベトナムや日本のように西欧の築城技術、稜堡を導入しなかったのである。こうした旧態の支配体制から脱皮できなかったことが、その後の朝鮮の近代的展開に大きくのしかかってきたわけである。

7　おわりに

中華世界は一言でいうと、序列の世界であった。弱肉強食のヨーロッパ世界とは、対極に位置する世界観であるとも言えよう。それは冊封によって決められた序列でもあった。中国皇帝を頂点としたアジア的な主従関係こそが冊封体制なのである。

特に明代以降に顕著となり、太祖洪武帝は即位後直ちに周辺諸国に対して入貢を促し、これに応えた国は朝鮮、日本、琉球、爪哇（ジャワ）、暹羅（シャム）、三仏斉（サンブツセイ）、蘇門答剌（スマトラ）、満剌加（マラッカ）、安南（ベトナム）など十箇国余にのぼっている。こうした序列によって王に任命されて中華世界の一員となり、中国専制政治を貫徹していくわけである。その具現的な姿こそが都城制度そのものであった。

アジアの都城は、中国の都城形態を模倣しつつもそれぞれ独自に発達を遂げて行ったことも明らかになった。朝鮮半島では三国時代以来の中原王朝、遊牧騎馬民族、倭寇等々の侵略を受けており、「保民」とは単なる儒教国家の信条ではなく、切実な現実問題であった。「禦暴保民」を国是として山城が発達したのである。

一方、日本列島では都城の外郭ラインである羅城そのものが削除されてしまう。琉球では城の内部に小規模ではあるが律令体制を導入していた。このように中国都城は、変容を遂げながらも東アジア全域に受容されたのであった。

ところがカンボジアでは、宗教による宇宙観が表現されている。カンボジアは15世紀に14度におよぶ朝貢をしているにもかかわらずである。まさに祭政一致であり、中華国家の儒教が思想であったのに対して、仏教、ヒンズー教は宗教そのものであり、かつ政治体制よりも宗教を優先した結果として位置づけることができよう。

こうした中華世界の秩序にヨーロッパの帝国主義がアジアを侵略する。その尖兵として要塞が構築され、港湾を確保し、都市建設をおこなう。しかし、ベトナムではフランスに支配されたとはいえ、自らの王城に自らの手によって稜堡式城郭を築城する。日本における稜堡式城郭も同様に、日本自らの手によって築城されたのであった。

拙稿では、アジアにおける城郭について、囲壁・環濠集落から山城の発達という防御施設の発展と、中華世界を具現化する都城、さらには近代に導入された稜堡について概観してみた。そこにはアジア諸国のもつ民族性が如実に写し出されている気がしてならない。今後も城郭という軍事的防御施設を探ることによってさらにアジアの多様性が明らかとなっていくことだろう。

参考文献

1．井上秀雄「朝鮮の山城」『日本文化研究所研究報告』第15集　1979
2．沖縄県立博物館『特別展 グスク－グスクが語る古代琉球の歴史とロマン－』1985
3．加藤祐三編『アジアの都市と建築』鹿島出版会　1986
4．愛宕　元『中国の城郭都市』中央公論社　1991
5．沖縄県立博物館『城（グスク）－城に語らせたい地域の歴史－』1992
6．KBS한군방송공사『高句麗城』芸堂　1994
7．張　明洙『城廓發達과都市計劃 研究』学研文化社　1994
8．国立故宮博物院編輯委員会編『故宮台湾史料概述』　国立故宮博物院　1995
9．ブリュノ・ダジャンス著、石澤良昭監修　中島節子訳『アンコール・ワット』創元社　1995
10．ĐIA DANH『LA CITADELLE DE HUE』1996
11．ラモン・マリア・サラゴーサ著、城所哲夫・木田健一訳『マニラ 都市の歴史』学芸出版社　1996
12．TU' LIỆU, HÌNH ẢNH『SAIGON GIA ĐỊNH』1997
13．青森県埋蔵文化財調査センター『高屋敷館遺跡』1998
14．坪井善明監修『躍動アジア　ヴェトナム』アジア文化交流協会　1998
15．吉川利治「スコータイ」『季刊文化遺産』第五号　1998
16．台南市政府編『府城故事 台南市古跡巡礼』台南市　1999
17．田村晃一「渤海の土城・山城・寺院」『アジア遊学』No.6　1999
18．平井　聖監修「函館・五稜郭の復元と考察」『季刊大林』No.46　1999
19．陸軍士官学校・陸軍博物館『江華郡軍事遺跡地表調査報告書（墩台編）』1999
20．中井　均「ベトナムの城と都市」『人間文化』8号　2000
21．中井　均「カンボジアの都城－アンコール・トムを中心に－」『滋賀考古』第22号　2000
22．中村慎一編『東アジアの囲壁・環濠集落』金沢大学文学部考古学研究室　2001

第２部
湖と川の史的意義

Part 2
Historical Significance of Lakes and Rivers

琵琶湖博物館研究調査報告　第22号　61～65ページ　2004年３月

トンレサップ湖の意義とアンコール遺跡群との諸関係

用田　政晴※

Historical Significance of Lake Tonle Sap and the Angkor Ruins in Cambodia

YODA, Masaharu※

1　ミーソンとアンコール

私たちはかつて、ベトナム社会主義共和国のフエ、ダナンを中心とした地域において調査を行い、その成果はすでに別途、報告している[1]。特に、チャンパ王国の聖地ミーソン遺跡を訪ね、またチャム彫刻美術館で多くのチャンパ石造彫刻を観察することができた。

そこで、チャンパと長い間、敵対関係にありながらも影響を与えあっていたアンコール王朝の本貫地、アンコール遺跡群を訪ねた。また、人びとと水との関わりを探るため、東南アジア最大の湖トンレサップ湖にも足を延ばした。

2　トンレサップ湖とメコン川

インドシナ半島中央部に位置するカンボジアは、タイ、ラオス、ベトナムと国境を接し、中ほどをメコン川が流れる中央平原を中心とした国である（図１）。国土面積は日本の約半分で、そこに1,100万人の人が



写真１　雨季のメコン川



図１　インドシナ半島全体図（土方1999を一部改変）

暮らしている。クメール語が公用語で、クメール族が90%以上を占め、チャム族、華人のほかクイ族、タンプーン族など20以上の少数民族がいる。

チベット高原に源を発するメコン川は、中国、ビルマ、ラオス、タイ、カンボジア、ベトナムを通り、メコンデルタを形成し南シナ海に注いでいる。そのメコンデルタは、世界最大の米生産地であるが、やや上流のカンボジア中央平原もまた有数の米生産地である。

※ 滋賀県立琵琶湖博物館　Lake Biwa Museum

植民地時代の1866年、フランスはメコン川を南シナ海から中国雲南省に至る通商のための航路として利用しようとしていた。しかし、途中にはいくつかの滝や浅瀬などの自然障害があったためこれをあきらめ、ベトナム紅河の開発に切り替えた[2]。喫水15フィートの大型船が通行できるのは、河口からプノンペンのやや上流、カンボジアのクラチエまでといわれている[3]。

メコン川とプノンペンの北で合流する支流トンレサップ川は、上流でトンレサップ湖となる。乾期は2,700 km²ほどの面積であるが、雨期にはその3倍にまで広がり、周辺部は冠水してしまう「伸縮する湖」として知られている（図2）。カンボジア語でトンレサップ



図2　トンレサップ湖（石井1995）



写真2　冠水したトンレサップ湖

とは、「淡水の広いひろがり」という意味だそうである。広いところでは幅10kmにも及ぶ浸水林で囲まれるこの湖は、雨季の逆流水と共に湖に入ってきた魚が、浸水林間で産卵し、稚魚がそこで育つため淡水魚の宝庫となっている。215種の魚が知られ、漁獲高も10万



写真3　トンレサップ湖の大型モンドリと木造漁船



写真4　シエムリアップの市場でのナマズとライギョ



写真5　シエムリアップの市場でのシジミ

トン以上といわれている。カンボジアではナマズ、ライギョ、キノボリウオをはじめとする魚をそのまま市場に並べるほか、魚のプラホックというペーストやプラホックの上澄みを濾過して不純物を取り除き沸騰させた後、魚醤として商品化している。

トンレサップ湖の毎年の増水は、稲作に適した沃土を作り、米の生産性を上げている。また、こうしたメコン川とトンレサップ湖は、今でも豊富な水を供給し、

カンボジアの基幹産業である農業を支える源でもある。

3　アンコール遺跡群

一般にアンコールと呼ばれる遺跡群は、西暦802年から1432年まで栄えたクメール王国の都の跡である。東京23区に相当する範囲に、60を超える遺跡が展開し、これらを総称してアンコール遺跡群と呼ぶ。

世界遺産の一つアンコールワット（「都の寺」という意味）はあまりに有名で、ここでは詳説しないが、12世紀前半に建造されたヒンズー教の寺院であり、王スールヤバルマン２世を葬った墳墓でもある。アンコールというクメール語は、都城を意味するサンスクリット語「ナガラ」に由来し[4]、アンコールワットという呼び名は、仏教建築とみなされるようになった14・５世紀以降の新しい呼び名である[5]。

12世紀後半には、一辺３kmの城壁で囲まれた王都アンコールトム（「大きな都」）が築かれ、その中心にはバイヨンという仏教寺院がそびえ立っている。その他、周辺には主だったものだけでも62の遺跡が知られている（図３）。

こうした壮大なアンコールの都建設は、強力な王権と水利潅漑による農業基盤によるものであるといわれる。特に、水利灌漑はヤショバルマン１世（在位889～910年ごろ）による東西７km、南北1.7kmの東バライ、ウダヤーディティヤバルマン２世（在位1050～1065年）によるとされる西バライという巨大な２つの貯水池を中心として広がる。しかし、どうもそれだけではないようである。

石井米雄によると、第一には、トンレサップ湖北西に広がる肥沃な稲作適地をあげざるを得ないが、第二には、トンレサップ漁業の存在を指摘している。年間10万トン以上もの漁獲高が保証されるこの湖の幸は、重要な蛋白質源であり、米と魚は社会発展の基礎条件であるという。加えて、アンコールを交易国家として評価すべきという[6]。元代の中国商人は、交易を求めて競ってアンコールに出かけ、象牙や胡椒などを手に入れたようである。

現在、カンボジアの年間漁獲量は30～40万トン。国民のタンパク摂取量の50%以上をまかない、それらの40%がトンレサップ湖の魚である[7]。



写真６　小型魚を池で取るモンドリ

1　西バライ
2　メボン小祠
3　ピミヤナカス
4　バプーオン
5　バイヨン
6　アンコール・トム
7　プノン・バケン
8　アンコール・ワット
9　第一次ヤショダラプラ都城環濠跡
10　改修後のシェムリアップ川
11　ニヤック・ポアン
12　タ・プローム
13　バンテアイ・クデイ
14　スラ・スラン池
15　東バライ
16　東メボン
17　プレ・ループ
18　タ・ソム
19　プリヤ・カーン
20　タケウ

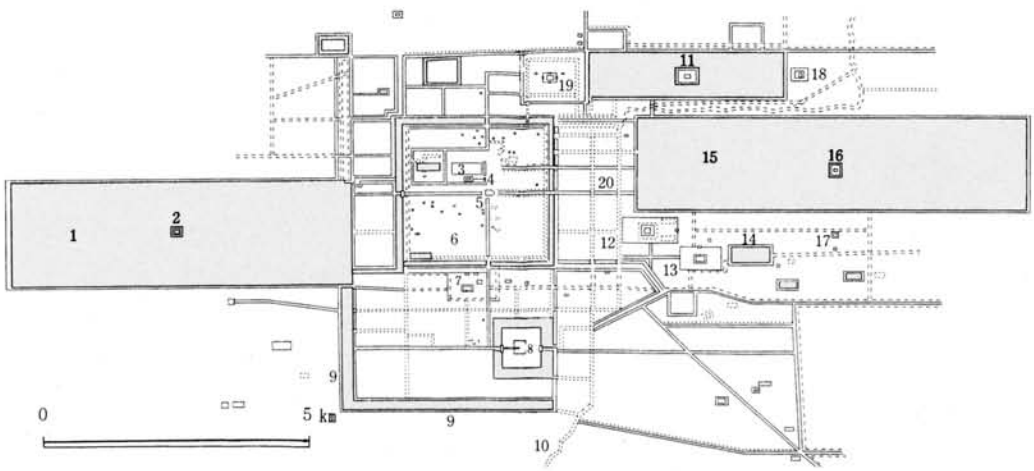


図３　13世紀のアンコール遺跡群配置図（石澤1996を一部改変）

そして、巨大石造建築物を長期間にわたって建設し続ける労働力を確保したのが、都城の東西に配された巨大なバライという貯水池と用水運河網であり、これによって8万6千haの水田潅漑が可能になり、50万人を養うに足る量であったという[8]。

4　トンレサップ湖とメコン川の歴史的意義

これまで「アンコールの王都」などと呼んできたが、実は単なる都でもなければ城でもない。ここは、その中心に須弥山を模した中央寺院を置き、まわりに海と山々を表す巨大な濠と周壁を築くなど、神々の世界を地上で具現化しようとしたものであった。そして王の権力は神格化し、政治と宗教は不離一体のものであった。四方へ走る基軸となる道路と豊かな稲の実りを保証する巨大貯水池や配水運河は、この世の楽園を作り上げた社会基盤でもあった。

江戸時代の初め、朱印船貿易の拠点として東南アジアの各地には日本人町が作られていた。当時のカンボジアにも少なくとも300〜400人以上の日本人が住んでおり、彼らはアンコールワットを仏教聖地の祇園精舎と考えていた。仏教の聖地かどうかは別にして、アンコールを築いた王の意図はまさにそこにあったのである。



写真7　トンレサップ湖の丸木舟

そもそもメコンデルタは、古くからクメール人の領域であった。2世紀頃に成立し、中国が扶南と呼んだ国である。シャム湾に面したオケオでは、中国の後漢鏡やローマ帝国の金貨も発見されている。扶南は古代国際貿易のセンターであり、オケオはその外港であった。

メコン川は、遠く中国雲南に源を発するが、南シナ海からの船での遡上は途中の数カ所の難所によって極めて難しく、またいくつかの山塊によってその流域は分断されている。今もいくつかの国の国境付近を流れており、いわば地勢的にまとまりがない流域である。それに比べ、メコン川河口から船で上り、プノンペン付近でシェムリアップ川に入り、トンレサップ湖に至るルートは、ほぼ一直線でカンボジア平原の真ん中を流れる。そして、そのトンレサップ湖の突き当たりで船を下りて、進路をまっすぐ北にとると、ジャングルの中にアンコール遺跡群、すなわちクメールの王が意図した神々の世界が広がるのである。

そのトンレサップ湖の突き当たりに位置する港の裏山には、アンコール王都を築いたヤショバルマン1世が9世紀末に残したヒンズー教寺院、プノン・クロムが残る。アンコールの成因を探る古い段階の重要な遺跡である。



写真8　プノン・クロムからみたトレンサップ湖

メコン川に通じたトンレサップ湖とシェムリアップ川は、水上の街道であり、王とその都を神格化するための演出された道、神々の世界への参道でもあったのである。

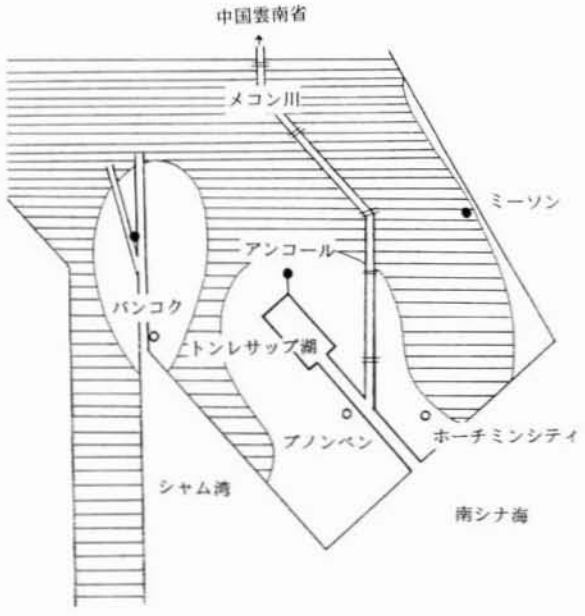


図4　アンコール遺跡群・トレンサップ湖・メコン川の配置概念図（メコン川の＝は難所）

15世紀に、トンレサップ川下流に遷都して以降のカンボジアは、メコン川に面した港に権力の中心を置き、そこでの交易の管理と統制を基盤とする港市国家であるといわれている[9]。領域の奥津城にある神格化された王とその都では、15世紀を境に南シナ海を通じてアジア進出を図る西欧諸国に対応できなくなっていたのである。

このことを、大和盆地から大和川下流域の河内平野に、5世紀のある段階でその権力の中枢を移し、瀬戸内海水路を通して、中国大陸や朝鮮半島と対応した倭王権に例えることができるかもしれない。

註

(1) 「アジア考古学研究機構調査報告1　ベトナム編」『人間文化』8号　滋賀県立大学人間文化学部　2000年
(2) 石井米雄『メコン』めこん　1995年　105頁
(3) 註(2)　5頁
(4) 三宅一郎「訳者まえがき」(ジョルジュ・セデス、三宅一郎訳)『アンコール遺跡』連合出版　1990年　8頁
(5) 註(2)　122頁
(6) 註(2)　123・124頁
(7) 吉良竜夫「トンレサップ湖－メコン川の巨大な遊水池」『増補改訂版　世界の湖』滋賀県琵琶湖研究所　2001年　102～103頁
(8) F.グロリエの「水力社会論」(註(2)　125頁)
(9) 石澤良昭『古代カンボジア史研究』国書刊行会　1982年
(10) 註(2)　132頁
(11) 本文は、「アンコール遺跡群とトンレサップ湖の史的意義」『滋賀考古』第22号　滋賀考古学研究会　2000年をもとにして、一部、書き改めたものである。

その他参考文献

土方美雄『アンコールへの長い道』新評論　1999年
ブリュノ・ダジャンス『アンコール・ワット』創元社　1995年
フーオッ・タット(今川幸雄編訳)『アンコール遺跡とカンボジアの歴史』めこん　1995年
石澤良昭編『おもしろアジア考古学』連合出版　1997年
石澤良昭『アンコール・ワット』講談社　1996年
レイ・タン・コイ著、石澤良昭訳『東南アジア史(増補新版)』白水社　2000年
中川　武「カンボジア・アンコール遺跡バイヨン北経蔵の保存修復」『世界の文化遺産を護る』(第15回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編)クバプロ　2001年

琵琶湖博物館研究調査報告　第22号　66～71ページ　2004年３月

イスラエルの琴湖と琵琶湖

用田　政晴※

Comparative Studies between the Lake Biwa Region and the Lake Kinneret Region in Israel

YODA, Masaharu※

1　琴湖・ガリラヤ湖

イスラエル北東部に位置し、東は有名なゴラン高原に接するガリラヤ湖は、東西12km、南北21km、周囲55kmを計るイスラエル最大の淡水湖である。

最大深度43m、平均深度25.6mで水量は琵琶湖の１/４程度であるが、この湖の標高は海面下209mと、世界で最低地にある淡水湖としても有名である。



図１　西アジアの琴

この湖の水はヨルダン川を南下し、死海へと注いでいるが、ここはイスラエル最大の水がめであり、古くから南の乾燥地帯へ送水が行われるなど、現在でも国内年間水需要の１/３をまかなっている。

ここではガリラヤ湖・ヨルダン川・そして死海周辺、いわゆるヨルダン川水系とでも言うべき地域を中心に、琵琶湖地域との比較の中で、その湖環境を紹介していきたい。

ガリラヤ湖には、「聖ペテロの魚」と呼ばれるテラピアの他、20種以上の淡水魚が生息し、漁業は観光と並んで重要な産業となっている。特にテラピアは、かつての日本の魚屋にもイズミダイと称して並んでいた馴染み深い魚である。

緯度が日本とほぼ同じ所に位置するこの湖は、『旧約聖書』の中では「キネレットの海」と呼ばれる。湖の形が竪琴（キノール）に似ているからだという。また、『新約聖書』では、イエスとその弟子達の活動の舞台としてたびたび登場し、キリスト教徒の巡礼には

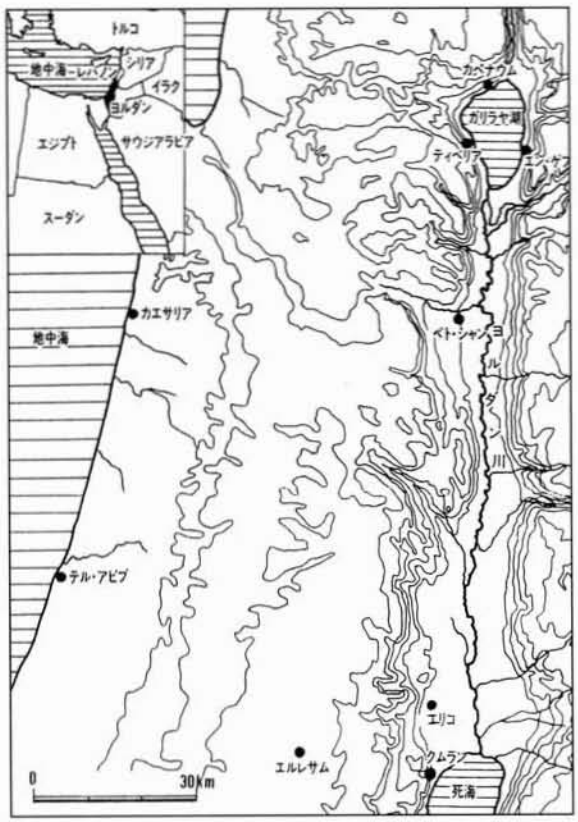


図２　位置図およびヨルダン川水系

欠かせない地域となっている。

先史時代以降、十字軍やトルコ時代までの遺跡も湖底や湖辺に多く、琵琶湖と同様にここでも発掘調査が行われている。

現在でもガリラヤ湖東岸では、エン・ゲブ遺跡の発掘調査が、日本のスタッフが中心になって継続的に行われている。

ガリラヤ湖と琵琶湖は、その位置、地域の中で果たした湖や水の役割、人間との関わりの歴史の酷似してい

※ 滋賀県立琵琶湖博物館　Lake Biwa Museum



写真1　観光船の港、対岸はゴラン高原（ティベリア）

ることが知られるが、一方で、全く異なる地理的状況、民族や周辺地域とのかかわりなど固有の歴史がある。

2　ヨルダン川水系の状況

(1)　観光

ガリラヤ湖に面したティベリアは、2世紀以降、ユダヤ教の聖都として栄え、今は行楽地としてのガラリヤ湖の中心地である。

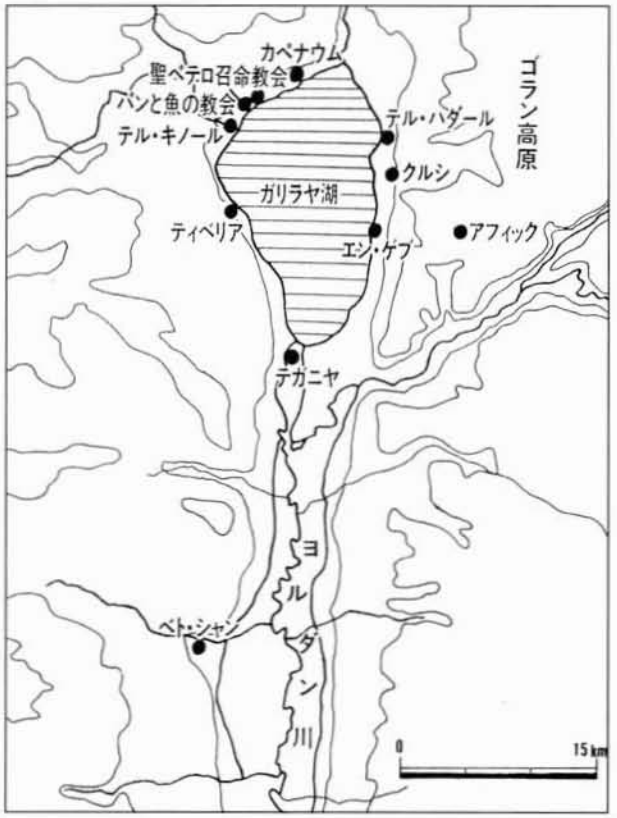


図3　ガリラヤ湖周辺図

大津にも似た景観を呈するこの町は、湖の西岸に位置し、古く紀元前後には人や魚、その他物資を運ぶ船が多く浮かんでいたというが、今では交通手段としての船はない。観光船乗り場はホテル、レストランが立ち並び賑わいを見せている。

観光船は、エン・ゲブ遺跡が所在するキブツ・エン・ゲブ、その経営になるキネレット・セイリング・カンパニーが運行しており、ティベリア、エン・ゲブ、カペナウムの3つの港を結んでいる。昼の遊覧船のほか、ナイトクルーズ、ディスコバー、レストラン、船上ショー等が行われている。集団農場とも訳されてきたキブツは、今では農業だけをやっているのではない。ただ、2001年以降、政治情勢の悪化とそれによる観光客激減のため、運行休止状態になっているようである。

(2)　漁業

ガリラヤ湖の漁業の歴史は古く、聖書にも漁師は度々登場し、古代の港も地元の研究者メンデル・ヌンによると、13個所以上確認されているという。

今では、先述のテラピア（セント・ピーターズ・フィッシュ：「聖ペテロの魚」）のほか、バルブスやキネレットのいわしと呼ばれる鯉の仲間、ヒレナマズ、ハクレン、ボラなど22種の魚を獲っており1940年代には4～



写真2　テラピアと鯉の仲間（エン・ゲブ）



写真3　小型の漁船（エン・ゲブ）

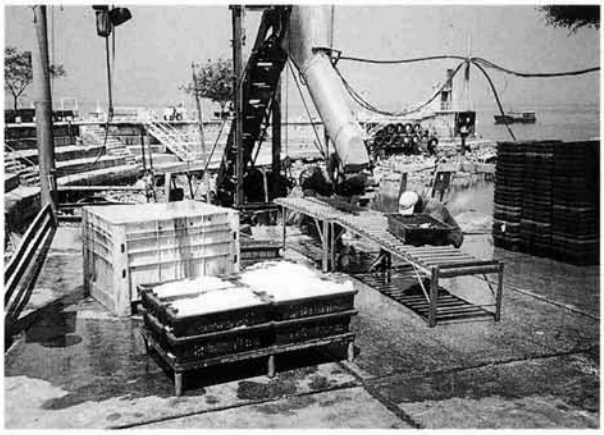


写真4　魚の水揚げ（エン・ゲブ）



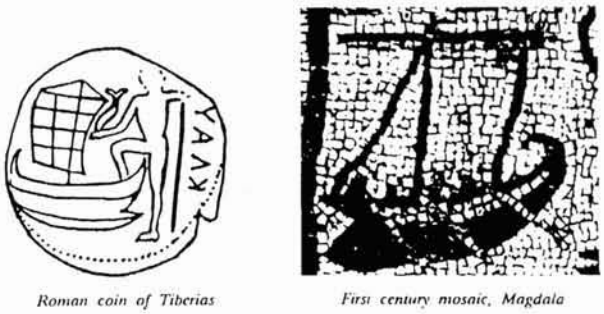
写真5　レストランでのテラピア料理（エン・ゲブ）

500トンであったものが1980年代には1800～2000トンの水揚げを誇るようになった。漁業従事者も300人以上いるようであるが、漁獲量は政府により厳しく制限されており、稚魚の放流も盛んである。

琵琶湖のそれよりなお小型の漁船も多く、船底には反りがあり、幅は長さに比べ広いずんどうな鉄の船体である。ガリラヤ湖は170平方kmと琵琶湖の1／4程度の広さであるため、早く航行する必要がないこと、もともと竜骨に肋材を並べ、外板を張る洋式船の特徴を引き継ぐからであろう。

ティベリア出土のローマ時代コインやマグダラで見ることのできる1世紀のモザイクの船でも、船底の反りが見えるが、興味を引くのはそれに見る船首の構造である。琵琶湖周辺では弥生時代のおわり頃になってから初めて出現する準構造船の船首構造と酷似しているからである。ガリラヤ湖のような内水面で、琵琶湖より200年も早い段階で、波よけとなる竪板構造が一般的であったことを知ることができる。

漁法は引網（dragnet）のほか、投網（cast-net）、刺網（trammel net, gill-net）、一本釣り（hook and



Roman coin of Tiberias　　*First century mosaic, Magdala*

図4　Mendel Nun "THE SEA OF GALILEE and ITS FISHERMAN in the New Testament" 1989

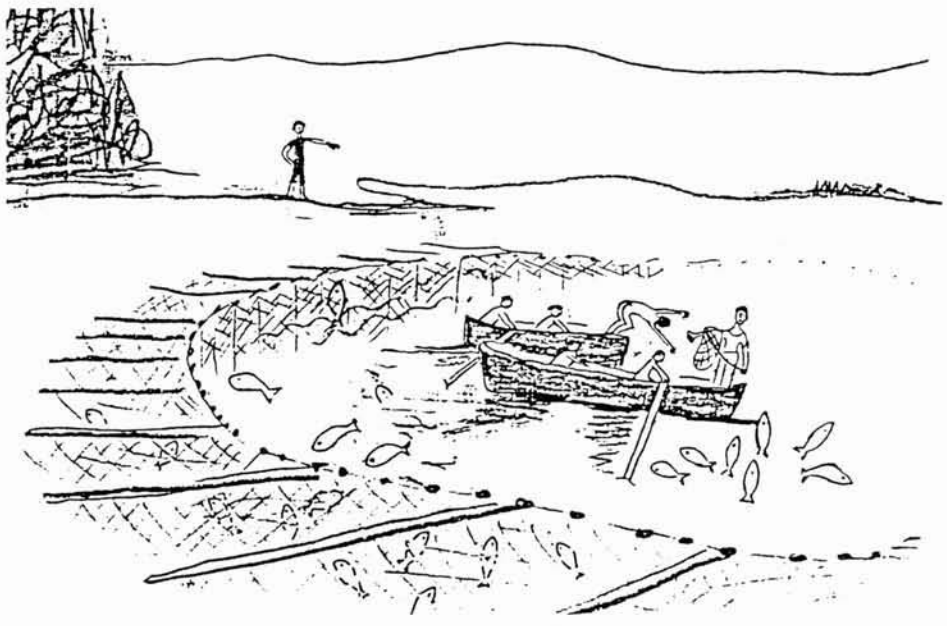


図5　ベランダネット漁の様子
（Mendel Nun "THE SEA OF GALILEE and ITS FISHERMAN in the New Testament" 1989）



写真6　船のモザイク（マグダラ）

line)、巾着網・巻網（purse-seine net)、それにベランダネット（veranda net）と呼ぶものが一般的である。ベランダネットは長さ2～3mの棒状のものに支えられた長い網を水面に跳ね上げるようにして獲る漁法で、琵琶湖では知られていない。

一方、刺し網の中でもthree-walled construction of trammelと呼んでいるものは、琵琶湖のフナサンマイなどど呼ぶものに似る。また、湖から見つかったという古代の碇石は、粟津貝塚近くの湖底で発見され、琵琶湖博物館の収蔵品になっているものとうりふたつである。

イスラエルは乾燥地帯というイメージが強いが、ガリラヤ地方は多量の降水、谷地域の平坦な地形、その赤色粘土質の土質により、かつては多くの沼沢地があった。そしてその余剰水と湿地帯でのマラリヤの発生は、この地方の悩みの種であった。これを解決したのが魚の養殖である。沼沢地の水を完全に管理することによって、マラリヤを克服したのである。

イスラエル全体の養魚場51平方kmのうち3/4はガリラヤの谷地域にある。主にガリラヤ湖の北のヨルダン川上流域、ガリラヤ湖出水口からヤルムク川合流地付近、それに少しヨルダン川を下ったベト・シャン付近の3個所に集中し、テラピアを中心に養殖が行われている。その景観は水を張った春先の水田のようである。

(3)　治水・利水

ガリラヤ湖は、砂漠地帯の端に位置するイスラエル唯一にして最大の水がめであり、ここから汲み上げられた水は導水管（モービル・アルツ：Mのマーク入り）で、南のネゲブ砂漠地帯などイスラエル全土に供給されている。

イスラエルの水資源は、一つの配水網に統合されており、その中心がナショナル・ウォーター・キャリアと呼ばれる国営水輸送網である。1964年に完成しており、その中心となるのがガリラヤ湖・ヨルダン川である。

先に「汲み上げる」と称したのは、ガリラヤ湖が海面下約209mに位置するからである。そしてここから流れ出た水はヨルダン川を南下して死海へと注いでいるが、死海の水面レベルは海面下約400mである。

ガラリヤ湖の水位は1932年にヨルダン川出水口付近



写真7　デガニヤ・ダム

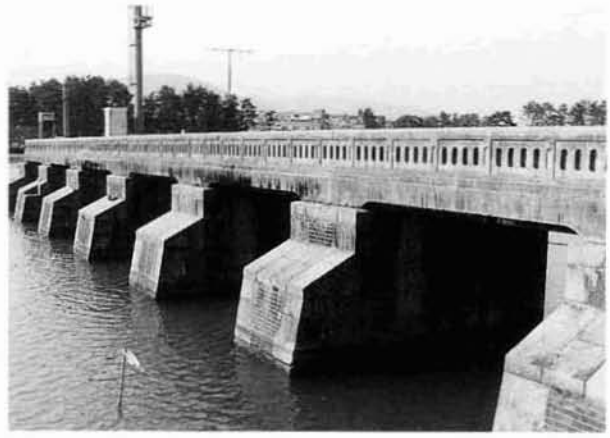


写真8　琵琶湖のデガニヤ・ダム、南郷洗堰



写真9　水位の下った湖（エン・ゲブ）

に築かれたデガニヤ・ダムによって人工的に管理されているが、通常、夏のおわりが最も水位が低く、春には高水位になる。湖の最深部は約43m、貯水量は約45億m^3であり、デガニヤ付近のヨルダン川流水量は4億5000万m^3と言われている。

現在のデガニヤ・ダムは琵琶湖で言う南郷洗堰や瀬田川洗堰に相当するが、思いのほか小規模で、ゲートを二つ備えて、その上部は道路となっている。川幅は15〜20m程度しかなく、琵琶湖の周囲に多くある逆水防止用の樋門の大規模なものという感じである。しかし、これがイスラエル国民の生命の水を握っている。

ちなみにイスラエルの年間水資源使用量は15億m^3であり、そのうち4億5000万m^3をヨルダン川から得ているわけであるから、地表水総計9億5000万m^3の約半分はガリラヤ湖の水をたよりにしているといってよい。

ヨルダン川とシリア国境から流れて出てくるヤルムク川との合流地点付近において、ヨルダン川はコンクリート三面張りの大型排水路状となっていたが、それより下流はヨルダンとの国境緩衝帯となっており近づくことはできなかった。ただ死海近くでは、聖書でいう「ユダの荒野」という表現がふさわしい茫漠とした平原の中に、1本の道だけがあるという景観の中で、道と平行する導水管だけが目立っていた。



写真10　ヨルダン川西岸の養魚場

場所や水系は異なるが、地中海に面したカエサリアでローマ時代の導水橋を見ることができた。カルメル山から20kmほど伸びている高架式のもので、二つの水路がセットであり、南禅寺境内の琵琶湖疏水のそれを思わせる。

(4)　遺跡

ガリラヤ湖周辺で、そのほとりに位置する遺跡のいくつかを3回にわたって訪れた。



写真11　デル・ハダールの遺跡とガリラヤ湖

デル・ハダールは東岸、テル・キノールは北岸に位置し、エン・ゲブと共に湖に面した都市遺跡である。テル・ハダールはヨルダン川からガリラヤ湖東岸を通りダマカスカスへ向かう要衝にあたり、テル・キノールもガリラヤ湖から地中海に面した古代の港町アッコに出る道筋にあたる。湖上交通と無関係にこれらのテルの立地を説明できないものである。

またガリラヤ湖東岸に位置するクルシもビザンチン時代の修道院で、現在は建物の壁や柱も復元され、訪れた時、露天の祭場では10人ほどの熱心なユダヤ教信者による儀式が行われていた。復元された遺跡が生きていた。

ガリラヤ湖北岸のパンと魚の教会、聖ペテロの召命教会は、キリスト教ゆかりの地である。前者は5世紀の魚のモザイクが床に残っており、ガリラヤ湖周辺のイエスの弟子はほとんど漁師であったという伝承、あるいはキリスト教と漁師のつながりの深さがうかがわれる。

ガリラヤ湖からヨルダン川を少し下ったところにあるのがベト・シャンの遺跡で、古来よりダマスカスへ向かう軍事的要衝の地であった。エジプト時代の神殿跡、ギリシャ・ローマ、ビザンチン時代のモザイクなどが残る大規模な遺跡で、今も発掘調査を進める傍ら修復・復元を行い、見学者を集めている。2・3世紀のローマ時代の円形劇場は、現在もコンサート等に利用されている。

さらにヨルダン川を下り、死海へと注ぐ手前の西岸のオアシスの町がエリコである。荒涼とした景色の中で緑に囲まれたエリコの町は、オアシスと呼ぶにふさわしい。考古学徒なら誰でも知っている新石器時代初頭のエリコの遺跡。日本では縄文時代早期に相当する

が、世界最古の都市といわれるその高さ９m、紀元前7000年頃の塔や壁の遺構に改めて驚く。『旧約聖書』で、ヨシュアが七つのラッパを吹いて難攻不落を誇っていた城壁を破壊した物語は有名である。

ヨルダン川は、最終的に死海へと至るが、その沿岸にクムランとマサダという大きな遺跡がある。前者は20世紀最大の考古学的発見と言われる死海文書が見つかったユダヤ教エッセネ派の遺跡で、後者はヘロデ王の要塞である。後に、イスラエル版白虎隊の舞台となり、ヨセフスの『ユダヤ戦記』も伝える、いうならば山城となった場所である。共通していえることは、大きな貯水槽とそこへ繋ぐ水路群の施設が充実し、漆喰をきっちり塗るなど、どちらも水に対する備えは目を見張るものがある。マサダの貯水総量は４万トンとも５万トンともいわれている。

1986年１月の雨不足で湖の水位が３～４m下がった時に、湖中から発見された紀元前後の木造船を観察することができた。この資料は、ガリラヤ湖西岸のイグアル・アロン・センターという博物館で保存処理され、一般公開されている。ここでは日本語のガイドビデオも手に入れることができ、その木造船発見の契機、発掘の様子が紹介されている。この船は、2000年に琵琶湖博物館で開催した企画展『湖の船』でも取り上げ、現地で復元した船を琵琶湖博物館に運び込み、展示した。

3　琴湖と琵琶湖

ガリラヤ湖と琵琶湖の比較は面白い。琴と琵琶という名前の付け方のみならず、水がめであり、観光地であり、信仰の地であり、一方で漁業が盛んで、古代から交通の要衝の地でもある。また、湖辺に遺跡も多い。

テガニヤ・ダムと南郷洗堰や瀬田川洗堰、導水橋と琵琶湖疏水、漁の方法、ティベリアの港と浜大津、かつての木造船や碇石。湖の水の色も同じで、滋賀県では琵琶湖のことを「ウミ」と呼び、ガラリヤ湖はSea of Galileeと呼ばれる。

しかし違いも際立っている。水の色は同じでも向こう岸の景色は全く異なり、訪れた３回はいずれも乾季だったからでもあるが、赤茶けており植生も違う。

水利用に対する執念は琵琶湖以上であり、多くの遺跡や今も生きる施設は我々に水の恵み、ありがたさを教えてくれる。

註

(1)　本文は、用田政晴「イスラエル考古事情(1)－琴の湖・ガリラヤ湖－」『滋賀文化財だより』No. 177、1992年をもとにしながら、その後の1996年、2001年の調査成果を踏まえて一部、書き改めたものである。

第３部
人類遺産の機能

Part 3
The Funcions of the Heritage of Humankind

琵琶湖博物館研究調査報告　第22号　72～85ページ　2004年３月

アジア文化遺産の諸相から
－日本の文化財保護・活用への視点を探る－

山本　一博※

Problems and Proposals Concerning Asian Cultural Properties
－Protection and Use of Cultural Properties in Japan－

YAMAMOTO, Kazuhiro※

1　日本の現状

(1)　文化財の保存・活用の新たな展開

文化財保護も今、変革を求められている。現に、国は広くこれを訴えている。その一つが、平成13年11月16日付けで文化審議会文化財分科会企画調査会（以下、「企画調査会」という）が報告した『文化財の保存・活用の新たな展開－文化遺産を未来へ生かすために－』（以下、「報告文」という）である。

筆者は、埋蔵文化財保護の対応通知などを代表例に、この分野の文化庁通知等は、従来より現状追認型が多いと感じている。今回の「報告文」も同様の感が否めない。したがって報告文の内容は、現場ではすでに進行している部分も少なくない。つまり、そこに記されている内容と展開しつつある現実との間に大きな乖離はなく、方向性としてはまさに現実そのものである。

したがって、我々のように職務としてそのことに携わっている者は、迅速かつ効率的にその方向に沿って具体的事業を展開していかなければならない。そこで本文では、この報告文の内容を踏まえ、過去、実見したアジアの文化遺産の現状を通して、わが国における文化財・文化遺産の保存・活用に有益な視点を探ろうとするものである。

(2)　報告文の概要

企画調査会は報告文をまとめるにあたって、二つのことを大きな柱としている。一つは「文化財の保存・活用方策の見直し」、もう一つは「新たな視点による文化財の保存・活用の積極的な推進」である。そして、検討結果として導き出された内容でも、二つのことが強調されている。１点目は、文化財保護活動の対象が拡大していること、２点目は、さらなる文化財の活用を進めることと、その活動に住民参加を求めていることである。

そこでこの２点について、もう少しみてみよう。

まず１点目の対象拡大である。報告文では、拡大した対象を「文化遺産」と表現している。ところで最近、「文化遺産」という言葉をよく耳にするが、その内容は定まっていない。いくつかの意味で使われているようだが、最も基本となるのは、ユネスコの世界遺産の一分野を示す用法であろう。

世界遺産とは、1972年11月ユネスコ総会で採択された「世界の文化遺産および自然遺産の保護に関する条約」に基づき、世界遺産リストに登録されたものである。ここに登録された遺産群は、自然遺産、文化遺産、その両方の要素を持つ複合遺産の三つで構成されている。すなわち、ユネスコの世界遺産の一部を「文化遺産」と呼んでいるのである。

しかし、報告文の文化遺産が、ユネスコの定義に照らした世界遺産を示すものでないことは明らかである。それでは、報告文の文化遺産とは、どのようなものを指すのであろうか。これは、報告文中次の一文で定義されている。

「今日の社会構造や国民の意識の変化を受け、有形・無形を問わず、歴史的な価値を有する文化的な所産を文化財を含む広い意味での文化遺産としてとらえ、…」（第３　総合的な視野に立った文化遺産の保存・活用　１新たな課題）

つまり、今までは顧みられることはなかったが、近年の急激な社会変化を背景に新たに歴史的価値を見出

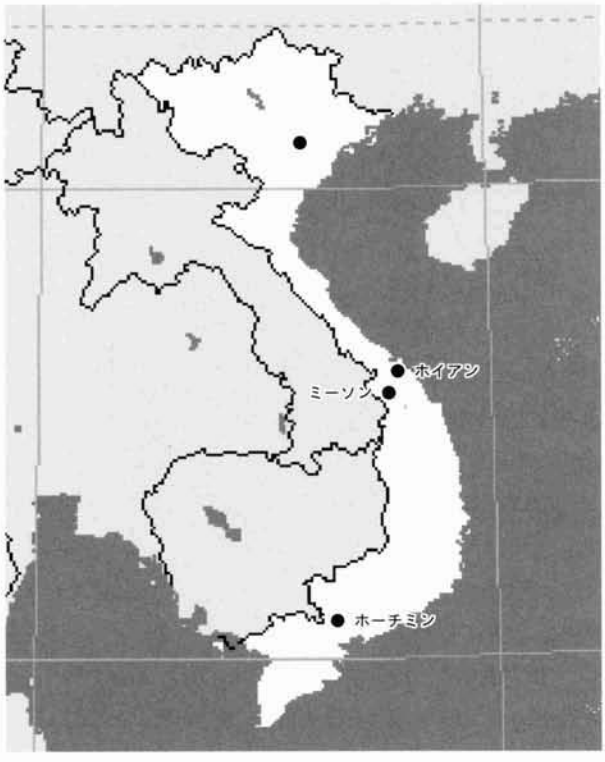
※ 能登川町立博物館　Notogawa Town Public Museum

された文化的所産を、従来の文化財も含んで文化遺産と呼んでいるのである。例えば、棚田や里山、近代の科学・産業遺産などは、従来の文化財という枠組みでは捉え切れないものであり、これらを含めるための概念である。

2点目は、より一層の活用と住民参加の強調である。活用については、従来から繰り返し提言されてきたが、なかなか成果が現れてこなかった。この現状認識の上に立ったさらなる提言である。そして保護偏重の施策を見直し、文化遺産を保護するためには、まずそれを活用して人々の興味を呼び起こす。その上で保護への関心を高める、という循環的手法の実施を求めている。

また住民参加は、文化財保護の分野に限らず、あらゆる行政分野での傾向と言えよう。しかし、この分野での経験や実績は不足しており、なかなか積極的に踏み込んで行けない状況にある。もしこれを進めるとすれば、我々関係者の大胆な発想転換が突破口になると考える。

2　アジア文化遺産の現状と分析



(1)　アジア文化遺産観察の有効性

本文の目的に対し、以下に述べる各アジア文化遺産は、有効な事例となるだろうか。これについては、以下の理由により有効と考える。

文化遺産の保護・活用は、文化遺産そのもののために行われるのではなく、人々のため実施されるものである。人々と全く接点を持たない文化遺産の保存など意味がない。人々と文化遺産との関わりこそが、最も重要なのである。



写真1　ホイアンの街並み

この視点に立てば、報告する各文化遺産はその国あるいはアジアを代表するものであり、文化遺産と人々との距離が接近している場合でも、あるいはそうでない場合でも、その距離感が何らかの現象として非常にわかりやすく現れていることが期待できる。またどれも、それを取り巻く自然・社会環境などから切り離されている度合いが、日本に比べ低いことも好条件になる。

なお、ここでいう文化遺産とは、世界遺産条約やその国の法で定められた特定のものではなく、当該国の歴史的文化的所産ということで使用している。また、検討の対象は文化遺産のみに限らず、それを活用する施設、例えば博物館などの文化施設の一部も含めている。

(2)　ベトナム

古都ホイアン　ホイアンは、ダナンの南約30kmにある。大河トゥボン川が東シナ海に注ぐ河口に立地し、16～18世紀貿易基地として栄えた歴史をもつ。かつて日本人町があったことや今も華僑の家屋が残るなど、貿易中継都市にふさわしい街並みが残っている。1999年、「古都ホイアン」として世界遺産に登録された。ちなみに、我々が訪れたときは、まだ世界遺産には登録されていなかった。

日本でいえば、伝統的建造物群の分野に入るのかもしれないが、歴史的街並みという雰囲気はなく、非常に日常的な感じが漂っていた。海のシルクロード資料館などを除けば、福建会館は集会所として、通りの家々の多くはみやげ物屋として機能しており、ほとんどの家屋が、日常生活そのものとして存在していることがその原因であろうか。そしてこのことが、うまく保全

と結びついているとすれば理想な歴史的街並みである。

ちょうど訪れた時、日本人によって架けられたという来遠橋、別名日本人橋には足場が組まれており、修復の最中であった。しかし、全体的には整備も始まったばかりという印象が強く、整然とした景観ではなかった。世界遺産に登録されたことで、今後整備が進められることだろう。小さな町であるため大きな建物はほとんどなく、その分、観光客をあてこんだ大型ホテルの建物が目についた。文化遺産との共生を願うものである。

ミーソン遺跡　西暦2世紀から15世紀、ベトナム中部にチャンパという国が存続した。チャンパはヒンズー教の国家で、インド的様相を持つ国であった。そして一時期、中国と西アジアを結ぶ海のシルクロードの中継基地として大いに繁栄した。この国の聖地として残るのがミーソン遺跡である。

チャンパの聖山マハーパルバタをはじめとする山々に囲まれたこの地には、4世紀末頃からヒンズー教のシバ神を祀る祠堂が建立された。現存する約70棟の祠堂群は、8世紀から13世紀にかけて建てられた。チャンパの建造物は、ミーソン遺跡以外にも遺存するが、ミーソンのものは、他と異なる要素を持っている。それは、その祠堂群が王族などごく一部の上層階級を対象とした聖地の建物であったことである。そしてこの遺跡も、フエと同じ1999年世界遺産に登録された。

ミーソン遺跡は、チャンパの経済都市ホイアン、王都チャキュウ、そしてミーソンと、ほぼ東から西へほぼ一直線に並ぶ所にある。ホイアンからは、直線距離にして約30km西方の山中にある。ダナンからは、車で2時間ぐらいの距離である。

遺跡入り口に到着後、我々の車から管理者側の車に乗り換え、さらに徒歩で山中へと入っていく。すると、赤茶けたレンガの祠堂群が目に飛び込んでくる。建物の所々に草が生え、建築部材の石材やレンガが散在する様子からは、とても整備が行き届いているとは言えない。上部が遺存する祠堂もあるが、それが失われ、内部中央部にリンガが野ざらしになっているものも少なくない。各祠堂群を巡る道はその部分だけ草がなく、人の歩く幅に曲がりくねって、獣道のように続いている。

また、ミーソン祠堂群中最大規模で壮麗な主祠堂を持ったA群は、1969年のアメリカ軍による爆撃でそのほとんどを破壊された。そして、今もほとんどそのままの状態にある。主祠堂の入口に使われていた大きな石材が放置されたままの光景は、実に痛々しい感じがする。今も残る大きな穴は、アメリカ軍の砲弾跡であるとの説明を受けた。我々が滞在していた1時間余りの間に、他の見学者が訪れることはなかった。ここに到着するまで近くに大きな集落を見かけることはなく、おそらく地元の人々が頻繁に訪れるということもない場所であろう。

遺跡についてある程度知識を持った人が、それを見学に来るというのが、今のミーソン遺跡の利用の位置付けではないだろうか。



写真2　ミーソン遺跡と聖山マハーパルバタ

ベトナム戦争　前記の2文化遺産は世界遺産に登録され、まさにベトナムの文化を代表するものである。ここでもう一つ紹介したいのは、ベトナム戦争に関わる文化遺産である。

ベトナムの歴史は、「反骨の歴史」と言われることがある。古来より中国の支配を受け、独立を勝ち取った後も中国の侵略・圧力を受け続けた。さらに、フランス、日本の支配下にも置かれた。太平洋戦争終結時に独立宣言したものの、南ベトナムが分離、アメリカとのベトナム戦争へと突入していく。そして1975年、サイゴン（今のホーチミン市）陥落で、祖国解放を勝ち取った歴史があるからだ。

この反骨の歴史を雄弁に物語るものが、ベトナム戦争関係の遺産である。この種の遺産は数多くあるが、旧南ベトナム大統領官邸は、その最もシンボリックなものの一つに違いない。現在は統一会堂と呼ばれ、一部国家行事に使用されているが、そうでない大半の時期は一般に公開されている。

この敷地の一角に、1台の戦車が野外展示されている。1975年4月30日、北ベトナム解放軍の戦車が鉄扉を踏み倒して官邸内に進入したシーンは、今も記憶している人も多いことだろう。サイゴン陥落を象徴するこの場面の主役が、展示された戦車である。



写真3　統一会堂

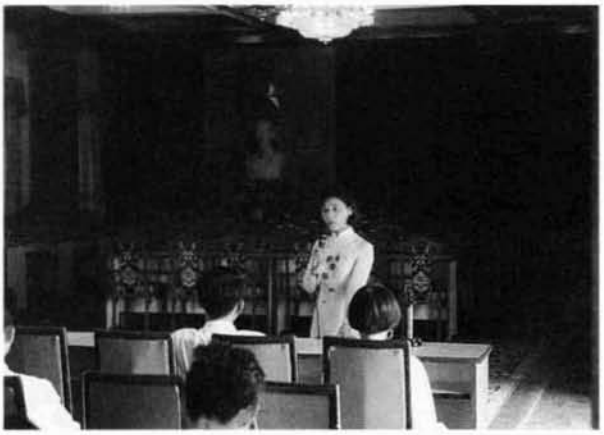


写真4　統一会堂内の女性ガイド

建物内部に入ると、大小様々な部屋を、南ベトナム政権当時の姿で見ることができる。大広間と呼ばれる部屋では、ベトナム国内の見学者らしい一団に、施設側の女性ガイドが説明を行っていた。統一会堂では国内の見学者が目立ち、国民用のガイド・説明板などのガイダンス設備も非常に充実しているように感じた。先に紹介した二つの世界遺産とこの違いは、各文化遺産に対する当局の思い・位置付けの違いに由来するものであろう。ベトナム戦争関係の文化遺産は、捉え方によっては「負の遺産」ともなろうが、ベトナムにとっては勝利の歴史、誇りとする反骨精神の象徴となる遺産群である。

(3)　カンボジア

アンコール遺跡群　カンボジアの文化遺産と言えば、誰もがアンコール遺跡群を連想するに違いない。文化遺産としてだけでなく、カンボジアのシンボルそのものでさえある。現に、カンボジア国旗の中心には、アンコールワットのシルエットがデザイン化されている。

遺跡群は、首都プノンペンの北西約300kmにあるシェムリアップ郊外、アンコール地方と呼ばれる区域に広がっている。大規模なものだけでも20数ヶ所、全部で69ヶ所の遺跡を含んでいる。



アジアを代表するこの文化遺産は、1992年、世界遺産に登録されている。アンコール遺跡群を残したのは、クメール民族の国、アンコール朝である。9世紀から15世紀まで存続し、最盛期は12〜13世紀だったと言われている。

このアンコール遺跡群は、長く世界の人々の記憶から失われていた歴史がある。しかしそれは、一般的に言われているように「熱帯雨林のジャングルの中に埋没してしまった」状況ではなった。王朝の衰退滅亡とともに、その存在を知る人が限られるようになっただけである。アンコールワット第一回廊の一部の浮き彫りは、16世紀半ばに製作されているし、落書きによって参詣が確認できる日本人森本右近太夫が、ここを訪れたのもこの時期に当たる。アンコール遺跡群は、けっして人々の前から消滅していたわけではない。しかし、広く世界の人々にその存在を再認識されるようになるのは、やはり1860年のフランスの博物学者アンリ・ムオーの紹介を待たなければならない。

アンリ・ムオーの紹介から時をおかず、カンボジアはフランスの保護領となった。これによって、フランスによるアンコール遺跡群の調査が開始された。さらに、極東学院・アンコール遺跡保存事務所の設置と続き、アンコール遺跡群の調査・修復が本格的に実施さ

れていった。この活動は、カンボジアの内戦が激化する1970年代中頃まで続くことになる。しかし、内戦終結後もポルポト政権下では、遺跡の調査や修復が行われることはなかった。この間に、内戦がアンコール遺跡に甚大な影響を与えた。そして、ポルポト政権終焉後は、ただちに調査修復が開始されたという。しかし、世界遺産登録の際には、内線がもたらした影響の大きさから、同時に「危機にさらされている世界遺産リスト」にも登録された。

現在では、日本やフランス、アメリカや中国などの国々が、保存修復作業に参加している。ちょうど我々が訪れた前日、「日本国政府アンコール遺跡救済チーム」によるバイヨン北経蔵の修復完成を祝う式典が行われ、その会場がまだ残っていた。このようにアンコール遺跡群は、世界遺産中の世界遺産の名にふさわしく、カンボジア国民自らの手はもとより、世界各国の援助のもと、調査修復が継続されている。



写真5　修復完成式典会場

アンコール遺跡群中最も有名なのが、王朝最盛期に建造されたアンコール・ワットとアンコール・トムである。アンコールワットは、12世紀前半に建てられた石造寺院である。東西1.5km、南北1.3kmの範囲を、幅約190mの堀が巡っている。日本の古代寺院であれば南が正面になるが、ここは西が正面となる。長く東に向かって延びる参道の行き着くところは、三重の回廊に囲まれた高さ65mの中央祠堂である。この壮大な建物は、クメールの世界観を現したものだといわれている。

また、アンコール・トムは12世紀末頃に築かれた都城である。一辺3km四方の都城域の中心には、観世音菩薩の四面仏で有名なバイヨン寺院がある。アンコール遺跡群を訪れる人で、この二つの遺跡を見学しない人はまずいないだろう。そして、多数の見学者が両遺跡を訪れるということが、両遺跡に多くの地元の人々を結びつけている。

アンコール遺跡群に関わる地元の人々は、大きく二つのグループに分けることができる。一つは遺跡と関わることで何らかの収入を得ている人々であり、もう一つはごく一般的な日常生活の場として関わる人々である。前者の一つに、みやげ物を売ってくる子どもたちがいる。Tシャツ・伝統工芸品の織物クロマー・民族巻スカートのサンポット・絵はがき・アンコール石造物の解説書・手作りの玩具など、様々な品物を抱えて売り込みにやってくる。これは、アンコール・ワットあるいはアンコール・トムに限ったことではない。人数の多少はあるが、ほとんどどのアンコール遺跡で、この種の子どもたちが駆け寄ってくる。場所によっては、扇子で風を送ることで報酬を得ようとする子どもたちもいる。移動中の車から見かけた農村の子どもたちの中には、裸で遊んでいた子も多かった。これとは対照的に、みやげ物を売る子どもたちの服装はずっと整っていた。子どもたちの商売は、シェムリアップのオールドマーケットのみやげ物屋に負けない収入があるのかもしれない。



写真6　物売りの子どもたち

アンコール・ワットは西を正面としている。したがって、東の空を染める日の出をバックに、幻想的なアンコール・ワットのシルエットを見ることができる。これは、アンコール・ワット観光の大きな魅力となっており、早朝より多くの観光客が、アンコール・ワットに足を運ぶ。この時、薄暗い参道の両脇に、まるで測ったように一定間隔で座り込む人の影が並ぶ。物乞いをする人々である。しかし、太陽が昇ってしまうと、午前中は逆光となり写真撮影には適さなくなる。このため一般的な観光スケジュールでは、早朝、夜明けのアンコール・ワットを見学した後は、午前中にアンコー

ル・トムのバイヨン、午後は再びアンコール・ワットという順番になる。物乞いの人々もこのことは充分心得ており、午前午後とも、それぞれの遺跡で見かけた人も多かった。

我々が訪れたときは、関西空港からシェムリアップ直行便はなく、いったんプノンペンでシェムリアップ行きの国内線に乗り換えたが、今は直行便が発着している。確かその当時、直行便を迎えるために、シェムリアップ空港が改良工事中であったことを記憶している。



写真7　記念写真の撮影風景

さらに郊外にいくつも工事現場があり、その多くがホテルであるとの説明を受けた。このように、アンコール遺跡群に関わる観光産業は拡大の一途をたどり、ホテルマンやガイドはもちろん、ホテル建設に関わる人々も観光を通じてアンコール遺跡群に結びついている。大半は国外からの観光客のようだが、国内から訪れた人も時折見かけた。

国内観光者を対象に、記念撮影を請け負うカメラマンがいた。背中に「Konica」と書かれたTシャツを着て、四面仏をバックにポーズを取る祖母と孫を一眼レフカメラで撮影していた。カンボジア国民にとって、カメラはまだまだ贅沢品である。同じくバイヨンで、国内の若い女性観光客相手に、占いをしている場面も目撃した。

先に紹介したように、アンコール遺跡群には百年以上続く調査・修復の歴史がある。そして、今もそれは続けられている。こういった修復作業でも、地元の人々が作業員として働いている。また、修復だけでなく、遺跡群の除草作業、参道掃除などの保守管理作業も、地元の人々に現金収入をもたらす仕事となっている。

直接収入をもたらす遺跡との関わりのその一方で、今も遺跡は現役の寺院であり、祈りを捧げに来る人々もいる。また、アンコール・ワットの堀で水浴びをする若者や境内の草を牛に食べさせている男性を見かけることもあった。世界遺産あるいは文化遺産ということとは別に、人々のごく普通の生活の場としての遺跡も存在していた。

ポルポト政権時代の記憶　アンコール遺跡群は世界遺産登録と同時に、危機に瀕した世界遺産にも登録された。カンボジアで長年続いた内戦の影響が甚大であったためである。その危機を脱する一つの方策に、研究・修復のカンボジア人指導者育成がある。これは、1970年代後半、ポル・ポト政権時代に極端な社会主義改革が推進され、これに抵抗する勢力は反動分子として大規模な粛正が行われ、多くの分野で熟練した人材を亡くしたことが大きな原因の一つとなっている。この時代は、アンコール遺跡に限らずカンボジア全体にとって不幸な時代であったと言わざるを得ない。これを語り継ぐため、カンボジアにとっては負の遺産としての文化遺産がある。トゥールスレン博物館とキリング・フィールドである。

トゥールスレン博物館は、ポルポト政権時代、反革命分子として捕らえた人々を収監する刑務所であった。もと高校の校舎であったこの施設は、今もプノンペン市内の住宅街の一角にあり、注意していないと通り過ぎてしまいそうなところにある。しかし、今もよく見ると周囲を塀で囲み、その上部には有刺鉄線が張り巡らされており、当時の様子を窺わせている。



写真8　有刺鉄線のある塀

ここには延べ2万人を越える人々が収容されていたが、次々と拷問を受け処刑されていった。ベトナム軍が首都プノンペンを解放したとき、ここで発見された生存者は、なんとわずか6名であったといわれている。拷問室に残る鉄製のベッドと拷問具、レンガで細かく仕切られた独房、ここで処刑された人々の顔写真、当時の様子を描いた絵、今身をおく部屋で、床の上でそ

の行為が行われていたという本物の迫力が体全体を圧迫するようである。ホールに展示された天井まで達するカンボジア地図は、なんと頭蓋骨で描かれていた。言葉の発しようがない。

館内に響く声はなく、見学者もわずかな外国人に限られていた。

もう一方のキリング・フィールドは、プノンペンから南西に10km余りの郊外のある。周りを木々で囲まれた草地状の広場に、白い塔が建っている。この塔の四方に配された大きなガラス張りの窓をよく見ると、中に整然と並べられているのは、人の頭蓋骨である。先のトゥールスレン刑務所に収容された人の多くは、ここキリング・フィールドで処刑されたのだ。

ポルポト政権崩壊後、遺骨が掘り出され、この塔で

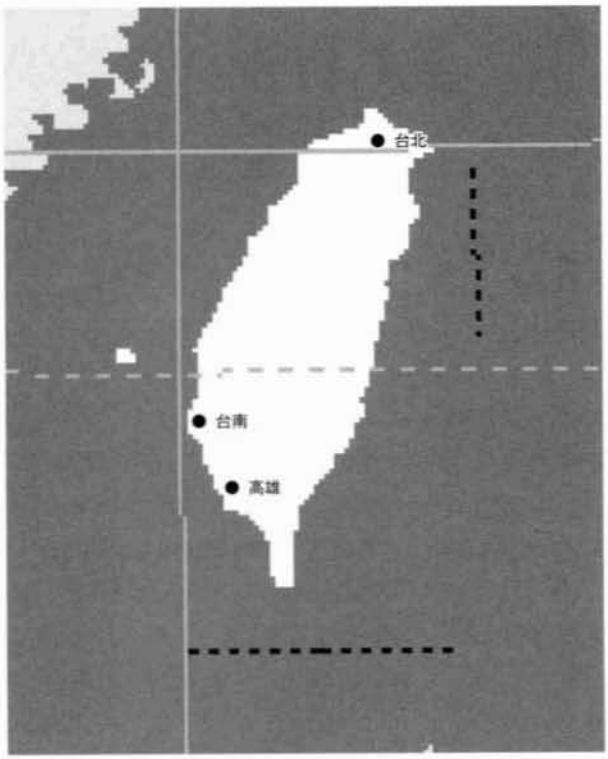


写真9　キリング・フィールドの供養塔

供養されている。区域内で見られる大きな穴は、その跡である。今も現地では、足下の土の中から、遺骨や亡くなった人の衣服が顔をのぞかせている。

トゥールスレン博物館同様、言葉を発する気にも写真を撮影する気にもならない。それぞれの施設で、我々は入場料を支払ったが、カンボジア国内の人にその必要があるのはどうかはわからない。たとえそれが無料としても、カンボジアの人々が数多く足を運ぶとは考えられない。負の遺産として、まだまだ生々しい記憶に違いないと思うからである。沖縄の戦闘体験者や広島の被爆者が、自らその経験を語るまでに多くの時間がかかったことを考えれば、うなずける話ではあるまいか。

(4)　台湾



故宮博物院　台湾には世界遺産に登録されているものがない。世界の主要国は台湾を国家とは認めておらず、国際連合にも加入していない。そのため、国連の関連組織であるユネスコとも関係がなく、当然「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」も締約していないからである。

現在、中華民国が統治しているのは台湾に限られているが、建前上は中華人民共和国を含む全中国を統治するとの主張がある。このような国家の基本思想を表現するものの一つに、故宮博物院がある。それは、どのような経緯があったにせよ、清朝から受け継いだ中国歴代王朝の至宝の多くが、ここ台湾の故宮博物院に現在保管されていること。そのことは、台湾政府が正



写真10　故宮博物院の団体見学者

統な中国の後継政府であることを証明しているという主張である。

台湾を初めて訪れる外国人観光客のほとんどが、故宮博物院を訪れる。また、国内観光客も相当数いるだろう。博物院入り口付近や駐車場は、見学者でごった返している。特に、台湾国内の子どもたちが、団体で次から次へと見学に訪れていた。入場してすぐのホール正面には、巨大な孫文の銅像がある。その前で、子どもたちがきれいに並んで、見学前の説明に聞き入っている様子が印象に残った。

先住民族　台湾に福建省から漢民族が移住してきたのは、17世紀初めごろといわれている。それまでは、マライ・ポリネシア系先住民が住む島であった。かつて日本の統治時代、「高砂族」と呼ばれた人々である。当然彼らの生活様式は、漢民族のものとは全く異なっていた。現在では、漢民族が98%原住民が２%弱という比率になっているが、先住民のアイデンティティーはしっかりしている。

ホテルのテレビで、有望視されている陸上選手が、「先住民の誇りにかけても頑張る」と、力強く語っているのを見た。こうした先住民意識の高揚の背景には、国民の間における台湾人あるいは台湾という国家意識の高まりがあるらしい。長年国民党支配の中で大陸との統一が叫ばれてきたが、その可能性があまりに現実離れしていることが徐々に認識されてきた結果である。すなわち80年代以降の政治的民主化の影響の中で生まれた台湾のアイデンティティーの一つに、先住民の文化があるのだ。



写真11　不十分な管理の民俗村復元家屋

先住民に関わる施設は台湾各地に見られる。その中には、故宮博物院のすぐ近くにある順益台湾原住民博物館のように小規模ながら近代的な展示設備を備えた施設がある一方で、先住民文化を題材にしたテーマパークも少なくない。

このうち我々が訪れたのは、台南の南西15kmにある台湾民俗村と高雄の東35km三地門にある台湾原住民族文化園区である。前者は先住民だけではなく、漢民族の文化も交えて紹介している。村内には、農具・鍛冶場・麺づくり・樟脳づくりなど各種の民俗展示をはじめ、遊園地・レストラン・ホテルまで完備されている。そして、一番奥に先住民住居が何棟か復元されていた。しかし、見学者は誰もおらず、雑草が生え放題で、復元住居も破損が目立った。到底、展示としては成り立っていない状況であった。また、付随するみやげ物屋なども付近にはなく、集客の工夫もない。

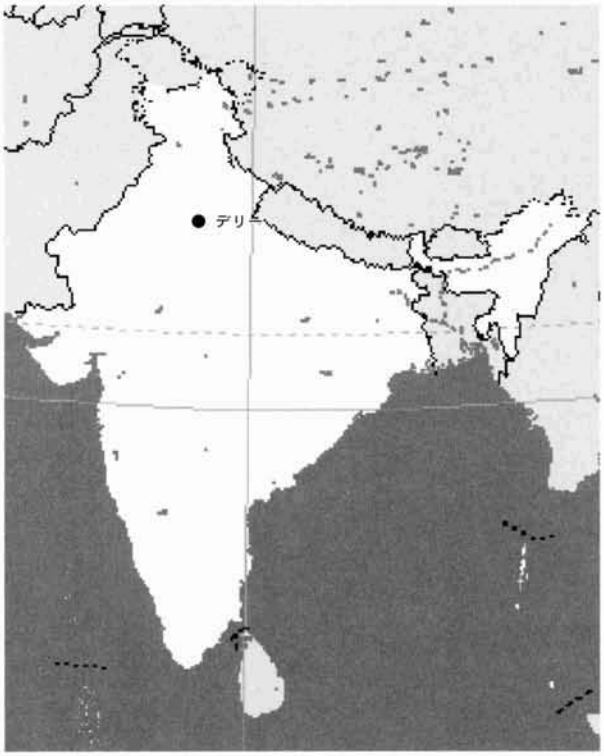
一方、後者の台湾原住民族文化園区は、広大な敷地内にジオラマなどを使った展示のある文化陳列館・生活形態展示館、民族舞踊が見られる劇場、レストランなどが点在している。徒歩で廻るには広すぎて、見学用無料バスが周遊している。ここにも、敷地内のある一角に、先住民の住居が復元展示されていた。前者と比べると、規模も大きく、先住９民族別にかなり内容の充実した展示であった。しかし、前者同様見学者はほとんどなく、復元住居も痛みが目立っており、充分な管理は行き届いていなかった。さらに、谷を降りたり登ったりする見学コースも、相当の体力を必要とし、容易に見学できる状況にはなかった。

台湾南部の山中に分布したパイワン族の天然スレートを使った復元住居前では、数人の男女が作業をしていた。植物を使って籠や敷物を作ったり、木工細工を披露していたこの人たちは、一見して先住民と分かる顔立ちである。おそらく、パイワン族の伝統工芸品製作の実演であろう。気がつけば、ここで働く人は先住民の人が目に付く。先住民に雇用の場を提供することも、ここの目的の一つになっているようだ。先に紹介した台湾民俗村では、感じなかったことである。



写真12　復元家屋前で行われていた民具製作実演

(5) インド



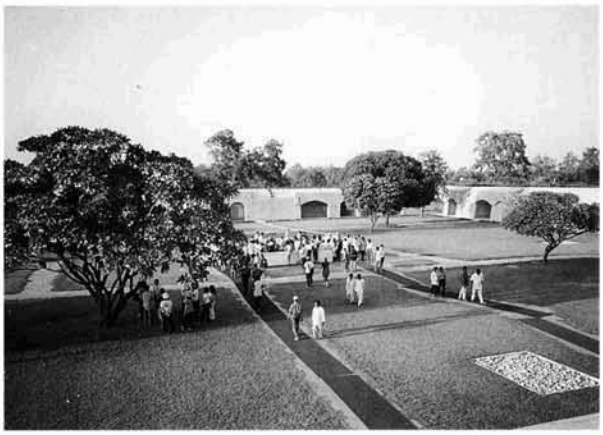


写真13　ラージ・ガート

ガンジー関係　インドでたくさんの見学者を見かけた場所に、ラージ・ガートがある。位置的には、デリーでもオールドデリーの南西角辺り、ヤムナー川近くにある。広い敷地には緑の芝生が広がり、石敷きの歩道も広い。周囲はきれいに石壁で囲まれて、整備・管理が行き届いている。

実は、ここでインド独立運動の指導者マハートマ・ガンジーが、荼毘に付されたのである。それは1948年のことで、1月30日に極右青年の手で暗殺され、翌31日火葬された。その後、建国の父を偲ぶ記念の地として、公園化されたものである。入口で靴を脱ぎ、素足となって荼毘台へと進む。黒光りするその周囲を巡り、手を合わせ、再びもと来た道を帰る人の列は途切れることがなかった。

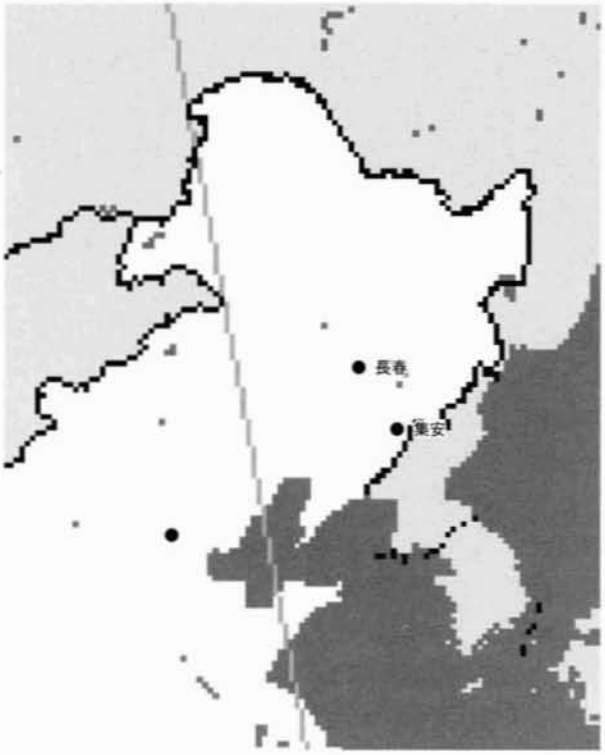
交差点を挟んでラージ・ガートの斜め向いに、彼が暗殺されたとき身につけていた衣服などが展示された



写真14　ガンジー・スミリティー博物館

ガンジー記念館がある。残念ながら、我々はここを訪れることは出来なかったが、ガンジー・スミリティー博物館へは立ち寄ることができた。ガンジー・スミリティー博物館は、ガンジーがデリーでの生活を送った住居跡である。ここの展示は、日頃から質素であった彼の生活を教えていた。衝撃的であったのは、暗殺の瞬間の場所が、明示されていたことである。邸内に設けられた祈りの場に向かう途中ガンジーは凶弾に倒れたのであるが、その祈りへの歩みを足跡で表現し、それが尽きたところに記念碑がある。この場所こそ、マハートマ・ガンジー最期の地である。見る人の心の奥まで何かを訴える、実に演出的な展示手法である。暗殺現場と荼毘の場所の違いが原因なのか、ラージ・ガートほど多くの見学者はなかった。

(6) 中国東北部



高句麗の古墳と好太王碑　中国東北部とは、黒竜江省・吉林省・遼寧省と内蒙古自治区東部を含む地域である。そして、吉林省集安は国境の町である。国境を接しているのは北朝鮮であり、鴨緑江を挟んで見る対岸の山はほとんどが禿げ山で、最近よく報道される北朝鮮の現実を実感する光景であった。さらに集安には、高句麗の都であったというもう一つの顔がある。

紀元前1世紀後半から7世紀中頃まで存続した高句麗は、209年から427年まで集安を都と定め、政治経済の中心地とした。当時、街の周囲を取り囲んだ城壁（国内城）が、今は集合住宅と沿うようにして残っている。

また、集安には洞溝古墳群と呼ばれる総数一万基を超える高句麗時代の古墳がある。このうち五盔墳と将軍塚は比較的整備され、見学者も多い古墳である。五盔墳は5基の高句麗後期古墳からなり、四神の壁画がある5号墳石室が公開されている。それは、朝鮮族集落の狭い地道を進んだところで、多少厳めしい門扉のある塀に囲まれていた。駐車場は完備されていなかった。また、石室内部の照明は、係員が電線を引いてきて裸電球で照らすという具合である。ある程度整備はされているものの、古墳も含め敷地全体に雑草が生い茂っており、管理が行き届いている状況ではなかった。



写真15　将軍塚

一方、将軍塚は代表的高句麗積石墓として、集安にある古墳の中で最も有名な古墳である。一辺約32m、高さ12m強を測り、見る者を圧倒する規模を誇っている。整形された切石をピラミッド状に積み上げたその上部に登れば、集安の町が一望できた。五盔墳に比べ整備も行き届いている。

さらに集安には、日本史の教科書で知られた好太王碑（広開土王碑）がある。しかし、筆者の記憶にある教科書掲載の好太王碑写真と、現物とはかなり異なるものであった。碑のある敷地は高い塀で囲まれて、外からは見ることができない。敷地内に入ると正面に寄せ棟の大きな覆い屋があり、その中に碑は建っていた。風雨を凌ぐことができ、碑にとっては良いことであろう。切石を敷き詰めた道、手入れされた植栽もあり、よく整備されていた。覆い屋を囲む鎖の中へ入ることは許されず、写真撮影はさらに外側のブロック塀の外側でないと許可されていなかった。我々の隣で、女性



写真16　好太王碑

の係員が、男性数名のグループに説明をしていた。見学者は中国人らしかった。我々が訪れたのは夕方の閉門間際で、見学者も少なかったが、ここへの見学者は先の古墳より多いのかもしれない。見学者の多少が、整備の差になるのだろうか。施設内部の出入口付近で



写真17　偽満皇宮博物院

は、見学記念のみやげ物も販売していた。

旧満州国建造物群　中国東北部はかつて満州と呼ばれ、実質的に日本の占領地となっていた地域である。現在の吉林省長春は、当時、満州国の首都で新京と呼ばれた。このため、今も長春の街には、満州国時代の建物が数多く残っている。特に満州国の国家機関として機能した大型の建物は、現在は大学施設など新たな用途に使用されているが、当時の様子を伝えるため、その一部が公開されている。中国は満州国を正式の国家とは認めていない。そのため、これらの施設は「偽満州国何々」と表現されている。中国にとって、満州国は清朝最後の皇帝溥儀を担いで、日本が成立させた傀儡国家なのである。

偽皇宮には、西院と東院とがある。前者は偽皇宮陳列館、後者は吉林省博物館として公開されている。さらに西院の方には、緝熙楼と勤民楼という二つの建物がある。緝熙楼は皇帝溥儀の居住区であったことから、溥儀やその関係者の生活が復元展示されている。一方の勤民楼には、満州国内の様子や日本軍の残虐行為を示す資料が展示されている。



写真18　緝熙楼玄関前広場の石碑

偽皇宮で、この施設を印象づける記念碑があった。緝熙楼玄関前広場にあった石碑である。黒っぽい色の石碑には、「勿忘“九.一八”」の文字が刻まれていた。1931年９月18日に起こった柳条溝事件（満州事変）のことを忘れてはならないという意味である。つまり、満州国建国、実質的には日本による中国東北地方支配の発端となったこの事件を、中国人は忘れてななならないというメッセージである。さらにこの書は、前国家主席江沢民によるもので、国家あげてのメッセージであることが分かる。

3　文化遺産と人々の関わり

前章では、世界遺産３件を含む５ヶ国15件の文化遺産について概観した。次に本章では、「見学者数」と「日常と非日常の関わり」という二つの視点から、これらを分析してみたい。

(1)　見学者数

人々と文化遺産の関わりの大きさを見るとき、先ずそこを訪れる人の数が大きな指標となる。そこで、今紹介した文化遺産を、見学者の多寡で大きく三つに分類してみる。（表１）ただし、ここで言う見学者とは、我々のような海外から訪れた者は除き、自国の人々を対象とする。

a　非常に多くの見学者を見かけた文化遺産
b　ほとんど見学者を見かけなかったか、居ても僅かであった文化遺産
c　ａｂ中間的状態の文化遺産

15件の文化遺産をａｂｃに分類一覧にすると以下のようになる。

分類	文　化　遺　産　名
a	統一会館・故宮博物院・台湾民俗村・台湾原住民族文化園区・ラージ・ガート・偽皇宮館
b	ミーソン遺跡・トゥールスレン博物館・キリング・フィールド・五塁墳・将軍塚・好太王碑
c	古都ホイアン・アンコール遺跡群・ガンジー・スミリティー博物館

表１　見学者数の分類

ａに分類された６件は、その性格からさらに二分される。台湾先住民関係の二つと、それ以外である。前

者は、台湾先住民族文化を題材としているものの、その比重は娯楽、アミューズメント・パークにあるため、他のものとは異なる点が多い。しかし、文化遺産と人々の接点を増加させ、文化遺産をおおいに活用するという面では、評価すべき点も多い。

多くの自国民が訪れる残る4件に、共通点を見出そうとしたとき、二つの共通点が指摘できる。先ず1点目は、どれも近過去の遺産であること。2点目は、どれも対外国を意識させることである。

この2点について、それぞれ検討してみる。

統一会館は、今から28年前、1975年のサイゴン陥落の象徴である。我々の年代ですら知っている近過去の証人である。ベトナムにとって、サイゴン陥落とはベトナム戦争の勝利を意味しており、意識させる外国とは、戦争相手国アメリカ合衆国である

故宮博物院には、清朝滅亡後、中華民国が清朝から受け継いだ中国歴代の文物コレクションが保管展示されている。しかし、そう単純に今日に至ったわけではない。1925年北京紫禁城に故宮博物館が設立されたのもつかの間、1937年、日中戦争の戦火を逃れるためコレクションは南京へ移送された。その後も戦火の広がりとともに、四川省方面に疎開を余儀なくされている。1945年、日本の敗戦とともに南京へ戻されたが、今度は国共内戦で国民党敗戦と同時に、1949年、蒋介石率いる国民党とともに台湾へ移ってきた。そして、現在の地で資料公開が始まったのは、今からわずか38年前の1965年のことである。

一方、故宮博物院の説明文は、この間の推移を「当時、中央政府が即刻これらの宝物を台湾に移していなければ、故宮の文物は恐らく日本軍による略奪や中共の「文化大革命」で徹底的に破壊されていたに違いありません。」と記述している。このように、故宮博物院が意識させるのは、中国と日本である。

ラージ・ガートでマハートマ・ガンジーが荼毘に付されたのは、前述のとおり1948年、今から55年前のことである。ガンジーはインド独立の父であり、インドの英雄である。そして、インドを植民地としていたのはイギリスであった。ラージ・ガートには、半世紀前、インドがイギリスから独立したという国家的出来事を象徴する要素がある。

現在偽皇宮陳列館となっている建物に、満州皇帝溥儀が暮らしたのは、1932年から1945年までで、今から58年前である。敷地内にある「勿忘“九.一八”」の石碑は、日本の占領を非難しているものにほかならない。

さらに踏み込めば、故宮博物院を除く3件は、全てが外国との戦いに勝利した記念碑として位置付けることができる。その結果を得るまでに血を流すことがあっても、最後に得た勝利はその国にとって誇り以外の何物でもない。故宮博物院については、現在はその主張も変わりつつあると聞くが、その存在こそ台湾政府が中国の歴史を引き継ぐ正式の政府である証拠と訴えていると解釈できる。この主張の背景にも、やはり誇りがある。

また、どれもが半世紀程度前の歴史的象徴であることが確認できた。つまり、現在の国民と時間的に掛け離れた遠い過去のでき事ではないのである。中にはそのことが、自分の歴史の一部になっている人さえ、まだ多数生存している。たとえ本人が直接体験していなくても、周囲にいる人からその体験を生々しく聞くことのできる過去である。

時間的に非常に身近にあること、そして、それを誇るべき理由が、誰にでも簡単に理解できるということが、多くの人が訪れる文化遺産の大きな要素であることがわかった。

反対に、bに分類した文化遺産を上の視点でみてみると、これを肯定する結果となる。ミーソン遺跡も五塩墳・将軍塚・好太王碑も、地元の人々にとっては遠い過去の歴史である。顔を知っていたり、話で直接聞くことのできる先祖が遺した文化遺産でない。そして、いかにその文化、歴史性あるいは芸術性が優れていようと、今の国民がa類のように強い誇りを持つ対象でないのも事実であろう。ちなみに、3件の世界遺産はa分類に入れることができなかった。

また、同じ戦いに関わることであっても、トゥールスレン博物館・キリング・フィールドは内戦の文化遺産である。勝者も敗者も自国民であり、対外的に勝利を歓喜するものではないことが、ベトナムや中国の戦争遺産と決定的に異なっている。

(2) 日常と非日常の関わり

先の分類で、アンコール遺跡群をc類とした。アジアを代表する文化遺産が、どうしてc類なのかという意見もあろう。これは先述のとおり、分類の対象を文化遺産見学に訪れた自国民に限っているからである。まず、海外からの見学者を除き、つぎに、それぞれの生業として遺跡内にいる人も除外した。遺跡のガイド、物売りの子ども、遺跡の修復や管理に携わる人々などである。そうすると、アンコール遺跡を単純に見学や

観光目的など非日常的活動で訪れているカンボジア人は、案外少ないと考えたのである。古都ホイアンの分類結果も、これと同様の理由による。

これに対して、分類上除外した日常的活動で文化遺産を訪れる人は、アンコール遺跡群が他を圧倒している。さらに、直接遺跡を訪れないものの、アンコール遺跡群の見学基地シェムリアップで、ホテルや食堂、みやげ物屋を営む人々を加えれば、アンコール遺跡群に関わる人の数は膨大なものとなるだろう。アンコール遺跡群の観光事業は、カンボジアにとって大きな外貨獲得手段であり、国家の主要産業となっている。また、忘れてはならないのが、そこが文化遺産であることとは無関係に、ここを訪れ、暮らす人がいることである。例えば、堀で沐浴する人や牛の放牧をする人、祀られた神像に祈りを捧げに来る人などである。今回紹介した文化遺産の中で、自国民の日常生活と最も結びついていたのは、アンコール遺跡群である。過去の遺産であると同時に、現在の生活にも不可欠な存在となっている。若干異なる意味となるかも知れないが、最も活用されているのがアンコール遺跡群であると言えるかもしれない。

このように文化遺産と人々との関わりには、日常的と非日常的という二つの関わりがあることがわかる。このことは、文化遺産の活用を考えるとき、非常に重要であるにもかかわらず、見落とされがちになっている事柄である。

4　地域の文化遺産継承への提言

今まで見てきたアジア文化遺産の諸相を参考に、日本の文化財・文化遺産の保存と活用に対し、以下に提言を記してまとめとする。

(1)　高度経済成長期以前の個性

冒頭に示した報告文は、社会の急激なグローバル化進行の前で、地域の個性確保の重要性を訴えている。しかし、地域の個性はどんどん失われている。特にそのことが大きく進行したのは、高度経済成長期を境にしてである。それ以後消滅し続ける地域の個性こそ、新たに生まれた文化遺産という概念の大部分と言ってもいいだろう。まず、この個性を再発見することが肝要である。

すでに、この時期への注目は始まっている。高度経済成長期をテーマにした各種の展示会が、あちこちで開催されており、どれも好評を博している。一方、学校教育で取組中の総合学習による地域学習でも、この時期の内容掘り起こしが多くを占めている。

高度経済成長期以前の個性は、いまだ切り離されていない近過去の文化遺産である。アジアで見たように、これに対する人々の関わり、関心には高いものがある。また前節の検討を当てはめ、外国を他地域に、戦いでの勝利を地域の特性に置き替えれば、人々が誇りとすることは間違いはない。また、それを遡れば、地域の個性が縄文・弥生の時代にまで到達することも可能である。例えば、耕耘機・トラクターが導入される以前、その地で使用されていた鍬や鋤といった木製農具の特性・変遷などは非常に理解しやすい事例である。

大袈裟かもしれないが、連綿と続いてきた地域の文化に、高度経済成長期以後の行為が終止符を打ってしまったのである。しかし、今ならそれ以前の文化を知り、体験した人も存在する。高度経済成長期以前の個性は、今現在、最も保存・活用しやすく、保存すべき文化遺産ではなかろうか。

(2)　現代的価値の付加

文化遺産の個性のみでは、それを継承するための人々の理解は得にくい。学問的にその歴史性や芸術性などの価値を強調しても、興味ある人々やその方面に知識を持った人々には受け入れられても、広く一般から多くの支持を得ることは難しい。現在の生活にそれがどうか関わるのか、どういう役割を果たすのかを理解してもらう必要がある。それが、今の日常生活に必要であること、あるいは有効であることを訴えなければならない。つまり、文化遺産を日常生活の延長上に位置付けることである。

しかし、文化遺産が現代生活と直結することは、そうあることではない。このために、時には、文化遺産と現代的課題の解決策とを多少無理をしても関連づけることも必要となろう。さらに、文化遺産の保存、活用、そしてそれとは無縁な日常生活的な機能、この三者に優先順位をつける決断を迫られるかもしれない。

例えば、史跡公園整備で、遺構から推定される復元などは一切行わず、説明板程度にして、桜公園や芝生公園、森林公園にすることも、場合によっては必要ではなかろうか。平城宮跡を地元の人が利用する目的は、休養が最も多いという調査結果もある。極論すれば、人々に一番ニーズのある日常利用の目的にかなう整備を進めることも、一つの方法である。史跡といえども、現代的ニーズに合わせて、多様な整備をする時期に来

ているように思う。土地の有効利用にもなるし、史跡への一般的理解も、この方が深まる可能性があると考える。それは、まずその場所に足を運んでもらうことが理解への第一歩であるからだ。新たな史跡整備について、文化庁史跡等整備の在り方に関する調査研究会報告の『史跡等の保存・整備・活用事業の在り方について』なども示されているが、これを踏み台にして、さらに踏み出すことが我々には必要である。

参考文献

鈴木博之「指定制度と登録制度　文化財保護の新たな展開」『文部時報』No.1425　1995年
中村　康「文化財の保存をめぐって」『京都国立博物館だより』110号　1996年
網野善彦・後藤宗俊・飯沼賢司編『ヒトと環境と文化遺産』山川出版　2000年
「兵庫県文化財保護審議会からの建議－次世代への継承と新しい文化の創造のために－」『兵庫県教育委員会平成12年度記者発表資料』発表日平成12年10月19日（http://www.hyogo-c.ed.jp/board-bo/kisya11/siryou69.html）2003．6．6．取得
端　信行「グローバル時代の地域文化」『流動化する日本の「文化」』日本経済評論社　2001年
京都橘女子大学文学部文化財学科編『文化財学概論』京都橘女子大学　2003年
河野　靖『文化遺産の保存と国際協力』風響社　1995年
石澤良昭編『文化遺産の保存と環境』朝倉書店　1995年
世界遺産研究センター編『世界遺産ガイド　－アジア・太平洋編－』シンクタンクせとうち総合研究機構　1999年
奈良大学文学部世界遺産を考える会編『世界遺産学を学ぶ人のために』世界思想社　2000年
世界遺産研究センター編『世界遺産Q&A　－世界遺産の基礎知識－2001改訂版』シンクタンクせとうち総合研究機構　2001年
重枝　豊・桃木至朗編『チャンパ王国の遺跡と文化』財団法人トヨタ財団　1994年
山本一博「ベトナムの人々から」『人間文化』vol．8滋賀県立大学人間文化学部　2000年
『ユネスコ世界遺産年報2003　No．8』日本ユネスコ協会連盟　2002年
石澤良昭・内山澄夫『アンコール・ワットへの道』JTB　2000年
山本一博「アンコール遺跡に関わる人々」『滋賀考古』第22号　2000年
『文化遺産ニュースvol．6』ユネスコ・アジアセンター文化遺跡保護協力事業所　2002年
石澤良昭「文化遺産を科学する」『歴史評論』通巻633号　2003年
「アンコール遺跡群」『ACCU NARA　アジア太平洋地域文化保護遺産関連データベース』（http://www.nara.accu.or.jp/chdb/heritage/anchol.html）2003/9/16取得
「故宮博物院について」（http://www.npm.gov.tw/japan/introduction）2003/9/25取得
「三国時代　高句麗文化　墓」『Koreainfogate』（http://japan.Koreainfogate.com/museum/sankoku/sankoku-kokuryo3.asp）2003/9/30取得
「吉林省ユーラシアルート」（http://www.ne.jp/asahi/overland/japan/jilinhigashieurasia3.htm）2003/9/30取得
稲垣栄三『文化遺産をどう受け継ぐか』三省堂　1984年
内田和伸「遺跡の環境整備と歴史認識」『歴史評論』通巻633号　2003年

※文中の地図は『世界地図を作ろう』（http://homepage1.nifty.com/ptolemy/）から取得し加筆したものである。

琵琶湖博物館研究調査報告　第22号　86～90ページ　2004年3月

琴湖・ガリラヤ湖の遺跡保護と発掘調査

用田　政晴※

General Introduction to the Excavation and Cultural Properties of the Lake Kinneret Region in Israel

YODA, Masaharu※

1　イスラエル考古学事情

イスラエルの建国・独立の経緯からわかるように、その民族の歴史と前史は、イスラエル国民のみならず世界のユダヤ人にとって最大の関心事の一つである。このため文化財の調査と保護は、中国やヨーロッパ諸国にも増して活発である。

工事を中止してあるいは工事に先立ち緊急発掘調査を実施するのは、国の機関の一つ、イスラエル古物局（Authority of Antiquities）である。ここでは地表下50cm以下の埋蔵文化財には規制がかかり、これはイギリス統治時代から受け継いだ法律に基づいている。古いデータではあるが、1992年にイスラエル古物局が出した発掘調査許可は240件にのぼっていた。また、地勢上、ヨーロッパ・アジア・アフリカの接点に位置しているため、国内のみならずヨーロッパ・アメリカ・日本などからの調査団にも発掘調査の門戸を開いており、こうした成果もイスラエルの文化財保護と考古学研究に果たす役割は大きいようである。

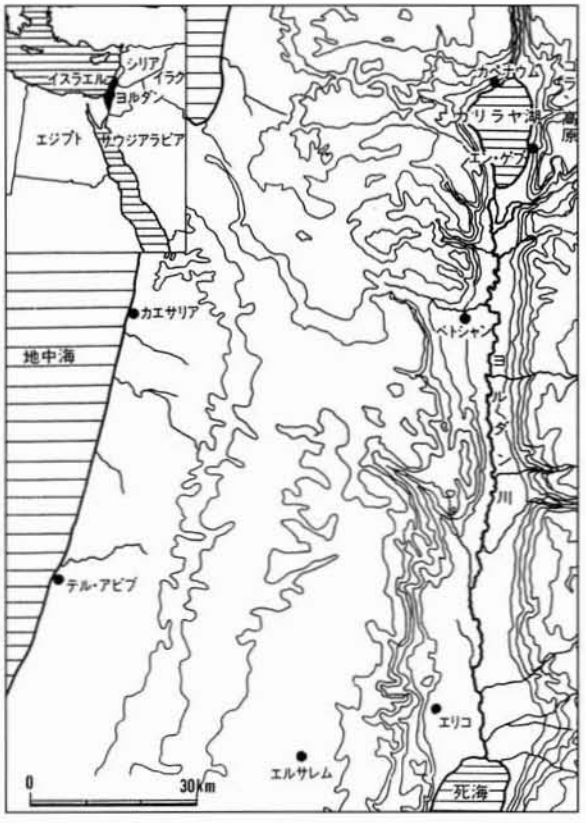


図1　位置図

調査された遺跡は、特にこの国の成立事情から歴史公園として都市計画の中に組み入れられて保存・活用が図られることが多く、古物局の予算規模も大きいようである。

ガラリヤ湖東岸では、鉄器時代エン・ゲヴ遺跡の発掘調査が、日本とテルアビブ大学の調査団により実施されている。この調査に1992年と2001年に参加し、テルと呼ばれる遺跡丘での発掘調査方法の一端を知ることができた。また、1996年には、イスラエル古物局を訪ね、その仕事ぶりを見学する機会を得たので、ここでその一部を紹介する[1]。

2　エン・ゲヴ遺跡発掘調査

(1)　位置

エン・ゲヴ遺跡は、ガリラヤ湖東岸のキブツ・エン・ゲヴの中に所在する遺跡丘（テル）である。

南北約250m、東西約120mの細長い楕円形の小丘を呈し、丘の高さはわずか数mしかないこのテルは、その丘端から湖まで最も近いところで約20mのところにある。

※ 滋賀県立琵琶湖博物館　Lake Biwa Museum



写真1　エン・ゲブ遺跡から見たガリラヤ湖

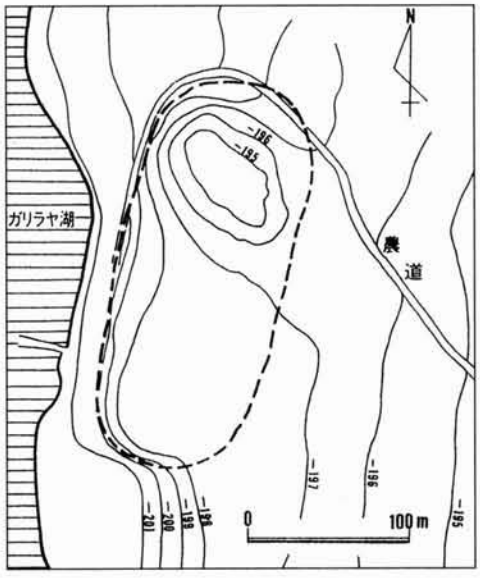


図2　エン・ゲブ遺跡位置図
（小川1989挿図を一部改変、破線は遺跡の範囲）

(2)　組織

調査は、テルアビブ大学モシュ・コハヴィ教授を代表とするゲシュル・プロジェクトの一部として行われたのがきっかけである。



写真2　エン・ゲブ遺跡（向こうはゴラン高原）

日本聖書考古学発掘調査団（団長：金関恕天理大学教授・大阪府立弥生文化博物館館長のち月本昭男立教大学教授）は、エン・ゲヴ遺跡の、主として鉄器時代都市遺構の検出を目指した調査を継続して行っている[2]。

約10名の考古学・宗教史・言語学等を専攻する大学教官を中心とする団員と約20～30名の日本人学生を主体とするボランティアに加えて、フィールドアシスタントとしてテルアビブ大学のギル・コボ氏が参加していた。

以下、この調査での特に方法論的な部分について、日本でのそれと異なる、あるいは極めて特徴的な工程・作業等に限って紹介する[3]。

(3)　方法

発掘調査は、1名の団員と数名のボランティアが1単位として、各グリッドに配置されて、当地での調査方法にのっとり実施されている。

5m四方のメッシュでグリッドを設定し、各杭はその基礎をコンクリートで固め、その上部に絶対高を記入しておく。各グリッドの壁はボルクと呼び、幅1mほど堀り残して発掘を行っていく。もちろん調査の最終工程でこれらは取り外すことになる。



写真3　調査用杭（基準高マイナス196.388とある）

発掘作業は、測量・写真器材、文房具等を除いて現地調達された道具を用いて行う。ここでの土は乾燥して極めて固く、通常、日本で使用しているツルハシ、移植ゴテなどはすぐに使用不能になってしまう。イスラエルのものは全てにおいて厚く、重く、頑丈である。一輪車もそのバケットは深く、土砂の運搬には想像以上の力を要する。

発掘は、ローカス（Locas）と呼ぶ概念を基本に行われる。

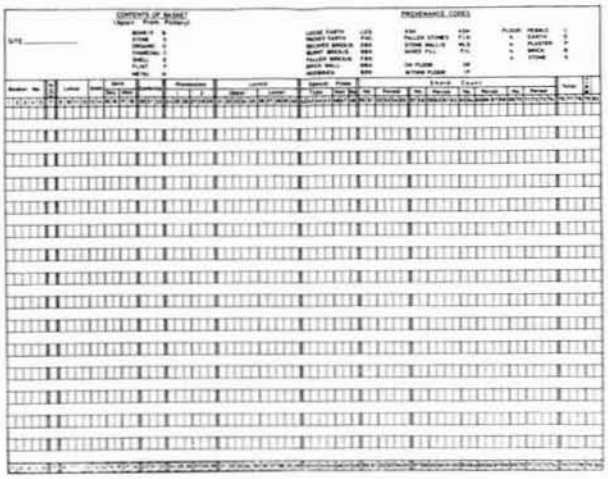


図3　ローカス・シートの一例

遺構あるいはグリッドのセクションなど、本来の遺跡を構成する部分や調査用の地区割等に基づくもの全てを含めてローカスとして捉え、それぞれにローカス・ナンバーを付し、作業を進め、遺物を取り上げる。これを担当するのが記録係あるいは登録者とでもいう担当であり、ローカス日誌や略図付き出土物用バスケットリスト等に順次書き込みを行い、各担当に指示を出す。

こうした一連の調査方法は、早く掘ることができ、遺跡の全容を早く掴むことが可能であると1992年に金関団長に教えられた。



写真4　発掘中の写真撮影

(4)　整理

朝5時に宿舎を出発し、すぐに作業を開始する現地での発掘作業は、午前中に終了する。昼食・午睡をはさんで午後4時ごろから遺物洗浄や復元・実測を行い、その後、検討会を全員で行う。

土器洗いは靴磨きのブラシに似たブラシで行われ、とにかく泥や石灰分を全て除去するようゴシゴシ洗う。紀元前の土器とはいえ、日本とは異なり瓦質あるいは陶質に近いため、ある程度こうした作業に耐えられる土器ではあるが、ブラシの毛部分で取れない部分は背面の木質部分で擦り取るため、木もすり減り角が丸くなってしまっていた。

検討会は団長によるその日の成果と今後の課題についての解説・検討に始まり、フィールドアシスタント（現場指導者）とレジストレーター（記録者）を中心としたソーティング（検討作業）に移る。前日の出土品をローカス別に検討し、復元品（R）、実測・保存用（+）、廃棄（−）に分ける。整理作業場の脇には、マイナスとされた土器の胴部片が散在している。



写真5　現地での土器実測

こうした作業の中で、土器1点ずつの帰属年代やその特徴をつかむための質疑応答も行われ、ボランティア学生の教育の場ともなっていた。また、夕食をはさんで夜8時ごろから週に一度、特定のテーマで研修が行われている。

3　埋蔵文化財行政

基本的にイスラエルの遺跡は、日本の、例えば琵琶湖岸の平野部のように、いたる所に遺跡が所在するという状況とは異なり、人類が痕跡を残すところは限られているようである。特に集落は水、交通路を中心とした立地・位置条件により、また以前に使用された城壁が新たな城壁の基礎部として利用されるために、同一場所に築かれていき、結果的に丘状を呈する。従って、遺跡であることの把握が容易で、範囲もある程度明確なものとなっている。

このため特にテルなどは、発掘され、政府直属の古物局の土地となり、どこもフェンスと看板により管理されている。エルサレムにある古物局は中央官庁街の一角にあり、入口はIDカードで厳重に管理されている。しかし、中に一歩入るとそこは、日本でよく見る



写真6　イスラエル考古局（エルサレム）の整理室

埋蔵文化財センターそのものであり、復元中の土器や石器がゴロゴロしている。およそ国の中央官庁内には見えない。

日本的な規模での緊急発掘調査も近年増えているが、学問あるいは国家にとって必要な動機により、国が大学や研究所に指示して実施する発掘も多い。

考古学の分野は先史学、聖書考古学、古典考古学に大別され、それぞれの分野は互いに無関心に近い状況である。

また、大学の中心的な存在であるヘブライ大学とテルアビブ大学もそれぞれ考古学の学風に特色があり、聖書の記載を辿るのが前者のようである。また、互いに外国と結びついて調査・研究を進めているようで、例えば、1992年当時はヘブライ大学のベントール教授はスペイン系、テルアビブ大学のケンピンスキー教授は主にドイツ系、コハヴィ教授は日本、アメリカ、フィンランドとの結び付きが強いといわれていた。

調査はボランティアを専門雑誌などで募って行い、ほとんどの場合は参加費を払わなければならない。中には、大学の単位認定を受けられるものもある。ある雑誌には10件以上のボランティア募集の記事が一覧となって載っていた。

こうして実施された発掘後の多くの遺跡は埋め戻すことなく、むしろ部分的にあるいは全面的に遺構を補強したり復元したりして活用されている。ガリラヤ湖畔のカペナウムの平面八角形を呈する4世紀の教会跡などは、それを管理する教会が遺跡を保護するため、形態的には宙に浮いた建物となっていた。一方では、エルサレムの旧市街ヤッファ門入り口付近の建設工事現場では、遺跡発見と発掘調査によって、工事は予定より遅れているといわれていた。

4　発掘方法と文化財の活用

日本の発掘調査方法とイスラエルのそれはかなり異なるという話を聞いていたが、本質的には変わりはない。もちろん日本の行政が行っているいわゆる緊急発掘調査と称する開発に伴う事前調査は、多くの場合平地で、広大な面積を短期間に堀り上げなければならないため、手順や調査の形態においては多少異なるが、例えば日本の大学等において行う学術調査と比較すると全く違和感はない。おそらく日本においてテルのような種類の遺跡を、同じような状況下で私自身が発掘するなら、イスラエルのような方式を取るかもしれない。



写真7　遺跡を保存するための構造を持つ教会（カペナウム）

ローカスという概念も、日本で行っている遺構、層位、グリッド等という単位で遺物を取り上げ、遺物と遺構の諸関係を認識するということとレベルや内容の差こそあれ同じである。ディレクター、スーパーバイザー、レジストレーター（記録係）、写真係なども、日本では通常、一人でこなしていることにすぎない。

異なるとすれば、例えば遺構の堀り方、石の抜き跡を土層に追い求めるかどうかということや、出土した土器をすでに存在する型式名の中で分類してフィールド記録としていくか否かということだろう。更に、グリッド内の土層に従い平面的に掘り下げ、グリッド間に残したボルグを層位の断面記録としてのみならず、グリッドボーダーラインとして強く認識し、出土遺物の整理に援用して従来の型式ではなく、形式・器種分類の中で作業を進めていくなら、いわゆる現時点における発掘は理想に近くなるだろう。特に、後者の認識は遺構が平面的になればなるほど、先史時代になればなるほど必要になってくるだろうし、その結果、土器のみならず様々な時代区分としての型式認識も緻密になり、ひいては遺構間、遺跡間の諸関係の認識、歴史

的解釈も進む。

そうした意味で、日本とイスラエルあるいはテルの調査法の両方を経験することは、私たちにとって発掘調査技術の向上につながると考えられる。

日本の1/4という狭い国土とはえ、遺跡の保存・活用のための発掘調査中の現場をいくつか見た。国の成立事情なり、聖書や信仰との関連を抜きにしては考えられないが、国の明確な方針があり、一括して国が管理しているならではのことである。国立公園として位置付け、統一したマークと説明板、多くの場合、ゲストは有料ながら公認ガイドは無料。ガイドの飲み食いも無料と言う徹底ぶりは、文化財としての活用以上の意図があるが、本来、文化財とはそれほどの資源を有するものである。

註

(1) 本文は、用田政晴「イスラエル考古事情(2)－発掘調査と埋蔵文化財行政－」『滋賀文化財だより』No. 178、1992年をもとにしながら、その後の1996年、2001年の調査成果を踏まえて一部、書き改めたものである。

(2) イスラエル考古学の発達史とテル・ゼロール遺跡の発掘調査成果からエン・ゲヴ遺跡調査に至る経緯や概要に関しての日本語文献の代表として、小川英雄『イスラエル考古学研究』1989年があげられる。

(3) エン・ゲヴ遺跡調査の主な成果は、下記で紹介されている。
金関恕「旧約聖書時代のエン・ゲヴ遺跡」『文明発祥の地からのメッセージ、メソポタミアからナイルまで』(第4回大学と科学公開シンポジウム組織委員会編)、1990年
金関恕「エン・ゲヴ遺跡の発掘調査」『古代文化』44－2、1992年
小川英雄「聖書考古学発掘調査団の活動について」『ユダヤ・イスラエル研究』13、1992年
牧野久実「ヘレニズム時代のエン・ゲヴとその周辺－人々の営みと湖－」『史学』65－1・2　1995年
牧野久実「ペルシャ時代のエン・ゲヴ」『史学』66－2、1997年
小川英雄「エン・ゲヴ出土の列柱付き建造物について」『オリエント』41－1、1998年
置田雅昭・日野宏「イスラエル　エン・ゲヴ遺跡」『考古学研究』45－3、1998年
山内紀嗣「イスラエル　エン・ゲヴ遺跡の発掘調査」『世界の考古学』2000年
置田雅昭「イスラエル国エン・ゲヴ遺跡列柱式建物の規格」『西アジア考古学会』2、2001年
牧野久実「ペルシャ時代から初期ヘレニズム時代のキンネレット湖地域における交易活動」『西アジア考古学会』2、2001年

(4) イスラエル考古学の概要と発掘調査方法等の紹介は、小川英雄『聖書の歴史を掘る－パレスチナ考古学入門』1980年が詳しい。また、ユヴァリ・ポルトガリ著・牧野久実　訳『イスラエルの遺跡』("The Phenomenon of Tell, The Form of Tell Site")、埋蔵文化財天理教調査団研究会シリーズⅠ、1989年も判りやすい。
その他、牧野久実「イスラエル　考古学事情」『月刊文化財発掘出土情報増刊号－最新海外考古学事情－』134、1994、桑原久男「イスラエル考古学との出会い」『西アジア考古学』2、2001年などがある。

第４部
アジアにおける博物館の意味

Part 4
Role of Museums in Asia

琵琶湖博物館研究調査報告　第22号　91～95ページ　2004年３月

ベトナムの地域博物館

用田　政晴※

Local Museums in Vietnam

YODA, Masaharu※

1　海外調査

(1)　ベトナム事情

ベトナム（ベトナム社会主義共和国、以下、ベトナムという。）は、インドシナ半島の東側、南シナ海に面して南北に長いこの国で、日本と同じくらいの国土を持つ。そしてこの国の歴史は、北で接する中国文化の影響を少なからず受けてきた。

特にベトナム中部のホイアンは、かつて東南アジア地域における海上交通の基地で、16～17世紀にかけてはマニラやタイのアユタヤと並んで日本人町も形成されていた。今もその町並は、中国あるいは日本の伝統的なそれを思わせ、細い路地に瓦葺きの家が続いている。

またその後、グエン（阮）王朝は、都をベトナム中部のフエにおいたが、王宮の中心太和殿は、中国の紫禁城をまねたといわれ、その構造も都城そのものであった。現在のベトナムでは54の民族が知られているが、その１割強は漢族でもある。

このように東南アジア諸国の中では、最も中国の影響下にあった国がベトナムである。ベトナムと日本は、歴史的に中国の影響を受けてきた同じアジアの国であるという共通の視点から、今回、我々の調査対象とした。

余談になるが、ベトナムではフランス植民地時代に在来言語をアルファベット表記して「クオックゴー（国語）」に変えて以降、漢字は使われていない。ベトナム語で「リクス」は「歴史」、「カムオン」は「ありがとう」を意味するが、漢字で書けば「感恩」となる。また、博物館は「バオタン」と発音し、漢字では「宝蔵」と書く。

こうしたことを背景に今、伝統的な博物館も新しく



図１　ベトナム位置図

変わろうとしている。そうしたいくつかを紹介していくことにする。

2　博物館

(1)　フエ宮殿美術博物館

ベトナム中部のフエは、ベトナム最後の王朝であるグエン（阮）朝（1802～1945）の都が置かれ、落ちついた雰囲気のある町である。フォン川下流域のこの町は、その水を引いた濠によって囲まれた旧市街と新市

※ 滋賀県立琵琶湖博物館　Lake Biwa Museum



図2　ベトナム中部ホイアン周辺

街に分けられるが、旧市街の王宮のすぐそばにフエ宮殿美術博物館はある。

グエン（阮）王朝の宮廷で用いられた調度品や美術品を中心に展示しているこの博物館は、1845年にティエウ・チ帝期に建てられた。2000m²ほどの迎賓館だった木造瓦葺きの建物を1923年に改装したものである。

ベトナムの朝は早く、6時にもなると人々は買い物や運動のため町を歩き出す。このためか、この博物館は朝7時から開いている。入場料は2万2千ドン（漢字では「銅」と書く。約220円）。写真撮影をする場合は、別に1アメリカドルか1万ドンを支払う。この写真撮影料を別に支払う方法は、ベトナムでは一般的なようであるが、我々のような外国人は最初からそれを含んだ金額を入場料として払ってしまう場合も多く、気づかないこともあった。

磁器、銅鼓、銀の剣、王座、寝台、衣装や靴、ランプなど宮廷の調度品が多く、宮廷楽器や中国・日本の陶磁器も展示されていた。また前庭には、銅製の鐘や銅鑼、大砲などの他に、先の戦争に使われた戦車や高射砲なども置かれていた。

もともと博物館として設計された建物ではないため、保管状況が良好とはいいがたいが、極力、ガラスケースを用い、スポットライトを使用するなど展示効果を上げるための工夫がなされていた。またベトナムの博物館としては珍しくエアコンが設置されるなど、それなりの設備も整っていた。

この博物館では献金を募っており、「文化遺産の保存のための献金に心より感謝します」という添え書きは、大英博物館を思い出させるものであった。

(2)　チャム彫刻美術館

ダナンのハン河畔に立つこの美術館は、チャンパ王国の遺跡から発見された、主に7世紀から15世紀までの石造彫刻だけを扱う博物館である。チャンパ王国を築いた民族がチャム族である。

もとはチャンパの研究に力を注いだフランス人アンリ・パルマンティエが、その調査の際に発見した遺物を中心資料として、1916年、フランス極東学院によって設立されたものである。その後、いくつかのコレクションを加え、1939年に正式に博物館として発足した。窓もケースもなく、吹き抜け空間が多いフランス植民地様式のこの建物は、その設立事情をよく物語っている。

チャンパ芸術とも呼ばれる約300点の石造彫刻の多くは砂岩製で、神像としてあるいは建物の装飾に用いられていたものである。時代によって南インド美術、クメール美術、大乗仏教、インドネシア美術などの影



写真1　フエ宮殿美術博物館



写真2　チャム彫刻美術館



写真3　チャンパ王国ミーソン遺跡

響を受けており、600m²ほどの展示室で彫刻の変遷を見ることによって、中部ベトナムの歴史がわかるといっても過言ではない。入場料は2万ドン（約200円）で、ここも朝7時から開館している。

タイルの床、黄色に塗られたコンクリート造りの建物は開放的であるが、逆に風雨の影響を直接受けてしまう。資料も壁や天井に直接埋め込まれたものが多く、庭にも多くの資料が展示されている。砂岩製だけに資料の保存という意味では疑問が残るが、展示効果は抜群である。ちなみに展示サインは、資料名がベトナム語、仏語、英語で記され、出土遺跡名と時代が世紀で示されている。また、展示室は9つに分かれ、それぞれミーソン、チャキュウ、ビンディンといった遺跡名に代表される様式別となっており、チャンパ彫刻のすべての様式が紹介されている。またアート・ギャラリーも設けられている。

中庭では、資料整理を数人のスタッフが行っていた。破片を1点ずつ黄色のペンキで注記し、重さと寸法を測っているさまは日本と同様であったが、注記された字は日本のそれより大きめであった。

このチャンパ王国の資料は、1994年から95年にかけて『チャンパ王国の遺跡と文化』という日本での巡回展で紹介されたことがある。この時に作られたミーソン遺跡の模型が展示され、日本語の図録[1]もこの博物館で販売されていた。

我々が訪れた時、ハノイ総合大学で博物館学を学ぶという学生が100人ほど見学に来ていた。博物館学というものがベトナムにあり、しかもそれを学ぶものが一つの大学で100人もいるということは、将来のベトナムの歴史研究と文化財の保存、あるいは博物館にとって頼もしさを感じさせてくれた。

(3)　ホーチミン市歴史博物館

この博物館は、以前、ブランシャルド・デ・ラ・ブロス博物館と呼ばれ、インドシナ・エチュード協会の協力で1927年に開館した歴史ある博物館である。1956年からはサイゴン市ベトナム国立博物館と名付けられ、アジア各国の古代美術品を展示していたが、1979年にベトナムのための歴史博物館として生まれ変わった。



写真4　ホーチミン市歴史博物館

大きく2つのゾーンに分かれ、第1エリアは約30万年前の人類の痕跡から1930年のベトナム共産党の誕生まで、時代を追って展示している。第2エリアは、特にベトナム南部地域の民族と文化、芸術を紹介している。毎朝8時から開館しており、料金は1万ドン（約100円）で年中無休である。

建物は、チャム彫刻美術館と同じ黄色に彩色された瓦葺きコンクリート造りである。入り口吹き抜けのホールには、大きな銅鼓が置かれ、さらに進むと石器などの資料展示からはじまる。フン王建国期、李朝、チャン朝からグエン朝へと続き、第2エリアではチャンパ美術の他、ベトナムとアジアの仏像や少数民族関係の民具も展示されている。アジアの陶磁器のコーナーでは、古伊万里もある。

また2世紀ごろのメコンデルタの中心であったオケオ文化の遺跡からは、ローマ皇帝アントニヌス・ピヌス（在位138～161年）およびマルクス・アウレリオウス（在位161～180年）の金貨も出土しているという。ベトナムで発見されている後漢の銅鏡も福岡県須玖岡本遺跡のそれと同型式である。2000年も前から国際貿易都市を備えていたベトナムは、侵略する他民族への抵抗と戦争の歴史であったことをこの博物館で知った。

窓から自然光が入る建物ではあったが、資料はほとんどガラスケースに納められている。最近の日本では、実物の露出展示が一部では流行し、あたかも時代の先

取りのように言われることもあるが、日本や他のアジアでは総じてこうした学術資料や美術品に手を触れないという道徳あるいは慣習が浸透していない。このことはヨーロッパの有名な博物館をいくつか見ているとよくわかる。手を触れているのはたいてい日本をはじめとする東洋人で、注意するのは欧米人である。筆者は、現在の日本の博物館において、貴重な資料は当然のようにケース越しに観察せざるをえないと、今だに考えている。

(4) 海のシルクロード博物館とホイアン歴史博物館

ホイアンはダナンの南約30km、トウボン川河口近くの三角州に築かれた町で、チャンパ王国時代以来、国際貿易都市として繁栄した。17世紀には日本人町が形成され、一説には300人とも1000人以上ともいわれる日本人が住んでいた。後、華僑の移住によって現在の町並みができあがったためか、約450軒の赤瓦木造建築群からなるこの古い町並は、中国南部の色合いが濃い[2]。ただ、最近の日本人による日本人町を探るためのホイアン・チャンフー通りでの発掘の結果、18世紀より前の遺物は出土せず、そこには17世紀の町はなかったともいわれている。

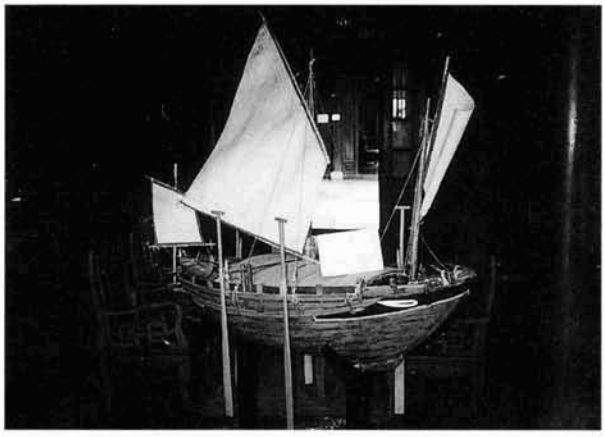


写真5 海のシルクロード博物館

この古い町並自体が一種の博物館であり、点在する歴史的建造物群や海のシルクロード博物館（貿易陶磁博物館）、ホイアン歴史博物館などの入場券は、町に4個所あるチケットセンターで購入する。チケットは4枚綴りになっており、料金は5万ドン（約500円）である。

海のシルクロード博物館は、1995年9月に開館したもので、ベランダ付きの2階建木造建物を利用している。周辺の沈没船から引き上げられた陶磁器を中心に約100点が展示され、古伊万里やペルシャの土器を見ることができる。一説によると、近くの島、クーラオチャム沖合だけで沈没船の遺物は24万点にもなり、大半が15〜17世紀のベトナム陶磁という。



写真6 ホイアンの町

また、ホイアン歴史博物館は、チャンパ王国の時代からベトナム戦争中部攻防戦の拠点であったホイアンの町の歴史が紹介されている小さな博物館である。これらの博物館は、ともに朝7時から開館しており、町全体を博物館の一部として利用している。ただ、この町の大部分を構成する木造建築をむしばむ高温多湿の気候やシロアリの害、生活による劣化なども最近、問題化していると聞いた。

3 博物館の欲求と要求

見せたいという欲求と見たいという要求が合致してこそ、博物館として本来成り立つが、ベトナムの博物館はどれもそうした欲求と要求が感じられる。言い換えるならば、あるべくしてそこに博物館がある。もちろん資料の保存のための設備や施設といった点では、まだまだであるが、それもルーブル美術館や大英博物館が直射日光がどんどん入っている展示室を備えるなど自慢できたものでないことは確かである。こうした点はベトナム博物館のこれからの課題であるが、現代のベトナムは、こうした博物館も国づくりには必要だという熱意が感じられる。いずれの国の博物館づくりでもこうした過程を経るものだろうし、日本もそうした時代はあった。

特に、博物館を作るという発案がしばしば最初に起こる日本の、特に地方での現状を見る時、ある意味ではうらやましくもある。ホイアンの町全体が丸ごと博物館で、実際にそこに多くの人が暮らしている様子を肌で感じた時にはなおさらであった。ただ、ここでも多くの問題点があるようで、日本人技術者も参画しながら文化遺産の保存がはかられつつある[3]。

註

(1) 重枝　豊・桃木至朗編『チャンパ王国の遺跡と文化』財団法人トヨタ財団　1994年

(2) 菊池誠一「ホイアン日本町の調査と博物館建設」『月刊文化財発掘出土情報』195号　1998年に、ホイアンの建物群の保存と博物館建設、日本町の発掘の現状がまとめられている。

友田博通「ベトナムの民家調査と保存修復」『世界の文化遺産を護る』(第15回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編) クバプロ　2001年

菊池誠一「ベトナム　ホイアン日本町跡」『東南アジア考古学最前線』(第15回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編) クバプロ　2002年

(3) 本文は、1998年の調査報告「ベトナムの博物館」『人間文化』8号　2000年をもとにしながら、翌1999年に再び訪ねた成果を含めて、一部、書き改めたものである。

チャンパ王国の遺跡群をはじめとするベトナム考古学に関するもので、日本語で書かれた入手しやすい主な文献には下記のものがある。

チャン・キイ・フォン、重枝　豊『チャンパ遺跡　海に向かって立つ』連合出版　1997年

重枝　豊「チャンパが危ない－ベトナム最新文化財事情」『おもしろアジア考古学』連合出版　1997年

新田栄治他『東南アジアの考古学』(『世界の考古学』8) 同成社　1998年

山形眞理子「2～3世紀の国家様相について～ベトナム中部～」『最新海外考古学事情II　アジア編』(『月刊文化財発掘出土情報』増刊号)　1997年

重枝　豊「ベトナム・フエ王廟の保存修復」『世界の文化遺産を護る』(第15回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編) クバプロ　2001年

山形眞理子「甕棺から王国へ－ベトナム中部、チャンパの誕生－」『東南アジア考古学最前線』(第15回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編) クバプロ　2002年

琵琶湖博物館研究調査報告　第22号　96～100ページ　2004年３月

イスラエル事情と博物館

用田　政晴※

General Introduction to the Museum Situation in Israel

YODA, Masaharu※

1　博物館の事情

(1)　「博物館の国」イスラエル

琵琶湖博物館の「人と琵琶湖の歴史」展示室では、湖底遺跡、湖上交通、湖や水の祭、漁労、治水・利水を展示項目の大きな柱として構成しており、広く世界に目を向けた展示や活動を行っている。また、「世界の湖と人びとのくらし」展示コーナーでは、世界の湖を紹介して琵琶湖を見つめ直すことも意図している。

ここでは、「博物館の国」ともいわれるイスラエルの展示手法を学び、現在のイスラエル事情と大きくかかわる博物館の様子をかいま見ることにする。



図１　イスラエル博物館の「お急ぎの人」向きの案内パンフレット

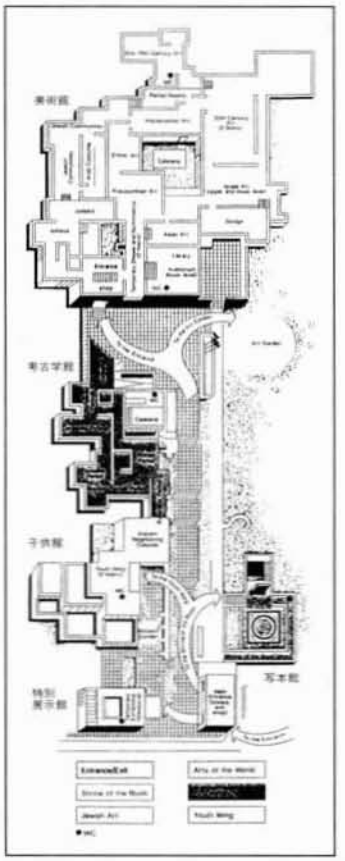


図２　イスラエル博物館見取図

(2)　イスラエル博物館

「博物館の国」ともいわれるイスラエル最大の博物館が、エルサレムにあるイスラエル博物館である。建国以前からあったベツアレル民族美術館を引き継ぎ、1965年に国立博物館としてオープンした。大きく５つのテーマ建物からなり、それぞれ異なった意匠と構造をとっており、それぞれの特色を出している。また、各館（ウィング）の展示方法も様々であった。

ゲートを入ってすぐにミュージアム・ショップがあり、各館にもショップが備わっている。死海写本館は、死海を望むクムラン遺跡の写本だけを展示する建物で、資料の光による劣化を防ぐため内部はかなり暗いが、ケースごとにボタンを押せば１分間だけ照明がつく工夫がなされていた。国宝級で、見ただけでよくわからないものを如何に意味ありげに見せるかという意味では参考になる。

聖書・考古学館は中世十字軍までの歴史について展

※ 滋賀県立琵琶湖博物館　Lake Biwa Museum

示しており、大きな順路はありながらも展示ケースはフリー動線的配置であった。ただ、ケースごとに番号が付けられており、時代を細かに追えることは便利である。今でも随時、資料の入れ替えを行っているようで、新たな発見資料もいくつか見られた。

ルート・ユース・ウイング（子供館）はいくつかのコーナーからなり、鏡、リサイクリング・ルーム、工作コーナー、本のコーナー、ミニチュアルーム、模型の滑り台とかたつむりのトンネル、玩具の野菜を畑に植えるコーナーなどがあり、主として幼児を対象としたものである。リサイクリング・ルームは120m²ほどの広さの部屋で、家庭から持ち寄った箱や牛乳パックなどで工作をしていた。

その他の特別展示として、1930年代のイスラエルおよびベト・シャンの展示があったが、縦5m、横1mの垂れ幕を約1m間隔で並べて1枚のベト・シャン全景写真に見せる手法は、簡易なものでありながら迫力があった。日本ではめったに見ない展示である。

パネル説明は、英語とヘブライ語である。車椅子用の斜路などはなく、全ての階段にリフトと係員がいる。多くの戦禍による身障者への対策が行き届いているように思う。

館ごとにあるいはコーナーごとに、床の色、天井の高さ、壁の処理、展示手法など様々であり、色々な方法を試しているかのような感じであるが、広い展示面積でありながら飽きはこなかった。

イスラエル博物館のほか、エルサレムの博物館の催しやイベントは、週末のエルサレム・ポスト紙に掲載され、また観光省の月刊パンフレット等にも紹介されるなど、博物館の広報活動が活発である。

(3) ヤド・バシェム

第二次世界大戦中、ナチス・ドイツにより虐殺された600万人のユダヤ人の記憶を継承するためのメモリアル博物館である。もう今年で50周年を迎えるという。世界にはこうした博物館が3つある。ワシントンのスミソニアンにある国立ホロコースト記念博物館、ベルリン・ユダヤ博物館、それに、このヤド・バシェムである。

建物正面には高さ30mの円柱が立っており、「zkor（忘れるな）」とヘブライ語で刻まれている。

ホロ・コーストに関する公文書、フィルム、記念品、遺品を中心に展示するが、大量に並べるのではなく、実物は少なくして、それを中心に演出する方法が主体



写真1　1枚の収容所の写真を効果的に展示（ヤドバシェム）



写真2　150万人の子供が死んだという展示（ヤドバシェム）

である。一つの部屋に、殺された人の数が記された柱が幾つか並ぶだけであったり、夜空をイメージした天井以外は真っ暗で、死んだ子供の名前を次々に読み上げていくだけの建物もある。有名な「記憶のホール」では、ガス室の悲劇を永遠に象徴する青白い火と強制収容所の名前を見るだけであったが、訴えるものがあった。

広い庭園には、ヨーロッパのユダヤ人をナチからかくまった「異邦の義人」の名を記念した植樹があり、リトアニア領事代理として、多くのユダヤ人の命を救ったとされる杉原千畝を顕彰する碑とその記念樹を見ることができた。

(4) ロックフェラー博物館

イギリス委任統治政府により1938年に建設されたものであり、元はヨルダンの管理にあったものである。イスラエルにおける最も重要な博物館といわれていたが、地下室がないため、戦禍を避けるべく重要な資料はイスラエル博物館に移管されてしまっている。

ここは聖跡考古学博物館として知られ、アメリカの工業王J. D. ロックフェラーの遺産によって発足した



写真3　ロックフェラー博物館

ものである。イスラエルで見た博物館の中で、唯一古典的な博物館で、東京国立博物館のように、展示手法より資料の価値で見せるというものであった。逆にいえば、玄人受けする博物館であった。

ここでは筆者の大学時代、考古学外書購読の教科書挿し絵でみたエリコ遺跡出土の、目に貝をはめ込んだ人骨を見ることができた。

(5)　ハアレツ・イスラエル博物館

テルアビブにある国立博物館で、ユダヤ教の安息日に唯一開館していた博物館である。

イスラエル博物館と同様、テーマ別に、石器時代館、銅館、ガラス館、生活館、ユダヤ館等、11のパビリオンに分かれて展示館が建ち、屋外にもオリーブしぼりや民俗資料としての農具などが展示されている。

石器時代をテーマとした建物では、入り口で説明書を借り、出る時に返すというシステムを取っている。人に追われた鹿などは絵、矢や槍は実物を壁面に展示したものがあり、日本でもこうした方法は流行している。遺物は個々に説明を加えず、手元で一括して説明



写真4　過去にふれる館



写真5　視覚障害者のための展示



写真6　手すりを利用したリフト

するキャプションはすっきりして見やすかった。

特筆すべきは、触る考古学館とでも言うべきA Touch of the Past, Hands on Archeologyと銘うったもので、視覚障害者が手で触れる比較的大形の考古資料が、スペース的に余裕をもって展示されている。もちろん点字説明つきで。

一角に手工業工房群があり、ちょうどガラス工房で実演を行っていた。そのほかにパン屋、馬具工房、機織り、鋳金、土器作り、糸紡ぎ、綿紡ぎ、靴屋、アクセサリー屋、大工、木工師、鋳物屋がある。

また、敷地内にテル・カシル遺跡があり、発掘されたペリシテ時代などの神殿遺構が時代ごとに説明パネルで色分けされて示され、一部の建物は復元されている。イスラエルのテルで多くの石壁、日乾煉瓦壁の建物と言われるものを見学したが、天井まで復元されたものを見てはじめて建物のイメージが沸いた。まだ隣接地では発掘調査中である。

(6)　イグアル・アロン博物館

ガリラヤ湖西岸キブツ・ゲネサレ出身の政治家イグ

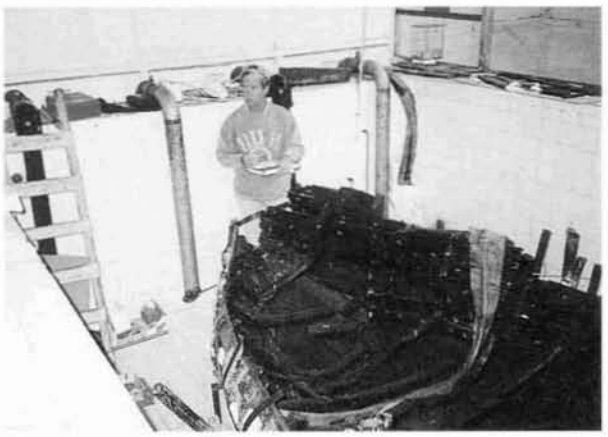


写真7　保存処理中の木造船（イグアル・アロン・センター）

アル・アロンを記念する博物館で、「ガリラヤ地方の人間」をテーマに、聖書の時代から現代までのガリラヤ湖周辺の生活をグラフィックとジオラマで紹介している。

ここの保護水槽には、1986年1月の雨不足で湖の水位が3～4m下がった時に湖中から発見された紀元前後の木造船が保管されている。船は1996年当時は保存処理中であり、見られるのは2年後であるとのことであった。

この船に関する資料は図録・冊子のほかスライドフィルム、ビデオテープとして販売されており、見学者への便宜を図っている。ガリラヤ湖周辺のみならずイスラエルの各地で一人の日本人にも出会わなかったにもかかわらず、ビデオに日本語版があり驚いた。

(7)　エンゲブ漁労博物館・エンゲブ民俗博物館

小規模な博物館であるが、非常にユニークで、熱心な手作り展示がみものの博物館である。

ガリラヤ湖東岸のキブツ・エンゲブは、農業や漁業以外にも観光レストランや観光船の運航など多様な活動を行っており、これら博物館もキブツによる活動の一部である。



公開された「イエスの小舟」（AP）

イスラエル

〝2000歳〟イエスの小舟 公開

水槽保存9年間

【エルサレム27日＝平野一】イスラエル北部のキブツ・ギノサルで二十六日、二千年前の漁船「イエスの小舟」（通称）が報道陣に公開された。イエス・キリストの伝道の舞台となったガリラヤ湖で使われていたもので、新約聖書時代の様子を伝える貴重な史料として国際的に注目を集めている。

この舟は一九八六年、ガリラヤ湖の岸辺で漁師に発見された。長さ九・二㍍、幅二・三㍍の木造だが、老朽化が激しく、九年もの間、水槽に満たされた保存液に漬けられていた。

一緒に埋まっていた壺やランプとともに放射性炭素測定した結果、「西暦五〇年プラス・マイナス八十年のもの」と判明、時代と発見場所から、この名が付いた。舟は今後一年かけて乾燥した後、特別展示館で一般公開される予定。

図3　1995年6月28日付け読売新聞の記事



写真8　復元展示された木造船（エン・ゲブ）

地元の歴史学者メンデル・ヌン氏が中心になって運営し、その奥さんであるゲシアさんが掃除を担当する。全ての展示は手作りで、愛情あふれる展示であることが見て取れる。ガリラヤ湖周辺の歴史を扱う漁労博物館とキブツの歴史を扱う民俗博物館に分かれている。

いくつかの研究調査報告書も英語とヘブライ語で出版しているなど、特筆しておくべき博物館である。

2　博物館の在り方と展示手法

琵琶湖博物館は、規模的にはイスラエルの国立博物館に相当する。琵琶湖博物館では6,000m²もの展示面積を持つが、いかに来館者を飽きさせないで見学してもらい、展示のみならず博物館の諸活動に参加し、ひいてはリピーターとなってもらえるかが課題の一つである。そうした意味で、ウィングに分かれ、各館が相当な特色を出すように努めている様子は一つのヒントになる。広い敷地が必要条件になるが、一つの建物の中でもコーナーごとに独立感を出し、特徴を押し出すことは可能であろう。一方では、まとまりも必要だが、本館の場合はテーマが一つである。従って、自然史、歴史と民俗、環境、水族など展示手法を統一することを固執することは、無意味かと考えられる。

日本では実物資料がない場合、あるいは得られない場合など、いきおいレプリカかジオラマによる復元、グラフィック・パネルに走りがちである。そうしたものに頼らずとも、心打つ展示が可能であることを教えてくれたし、グラフィック一つにしても、その前に何か、たとえば強制収容所内の大型写真の前に有刺鉄線があるだけで、その効果は倍増していたのである。

展示室のゆとりのスペースも、あればあるほど楽な気持ちでいられることもあり、基準に従っているだけという身障者対策や、車椅子対応だけが身障者対策といった認識も改める必要がある。徹底した弱者への特別な心配りを考えていきたい。

たった一つの特徴でも正面に押し出す。たとえば入口を入ってすぐのホール内に階段があるとすると、その真ん中に身障者のための施設・設備を備え付けるぐらいの意気込みを示す博物館が、日本にも現れて良いのではないだろうか。

もう一つ。日本では博物館活動の情報量が余りに少ない。各博物館単位で広報なり広告・ポスター配布などを行っているため、一般の人が博物館巡りを行う際のまとまった情報がない。今後、少なくとも県内の博物館関係施設のネットワーク化とイスラエル観光省並とは行かないまでも、県・市町村ぐるみの取り組みが、「総合的な学習」や土日の余暇利用とあいまってさらに必要になってくるだろう。

註

(1)　本文は、用田政晴「イスラエル考古事情(3)－博物館－」『滋賀文化財だより』No. 179、1992年をもとにしながら、その後の1996年、2001年の調査成果を踏まえて一部、書き改めたものである。

琵琶湖博物館研究調査報告　第22号

アジア基層文化の探求

－アジアから日本列島と琵琶湖を見る－

2004年（平成16年）３月発行

編　　集：アジア考古学研究機構

責任編集者：用田政晴

発　　行：滋賀県立琵琶湖博物館

〒525-0001　滋賀県草津市下物町1091

電話　077－568－4811

印　　刷：㈱スマイ印刷工業

©滋賀県立琵琶湖博物館　2004　Printed in Japan

Research Report of the Lake Biwa Museum

No. 22 March 2004

LAKE BIWA MUSEUM

滋賀県立
琵琶湖博物館
〒525-0001　草津市下物町1091
TEL. 077-568-4811(代)　FAX. 077-568-4850
インターネットホームページ
http://www.lbm.go.jp（lbmはLBMの小文字です）

LAKE BIWA MUSEUM
1091 Oroshimo, Kusatsu.
Shiga 525-0001, Japan

R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています